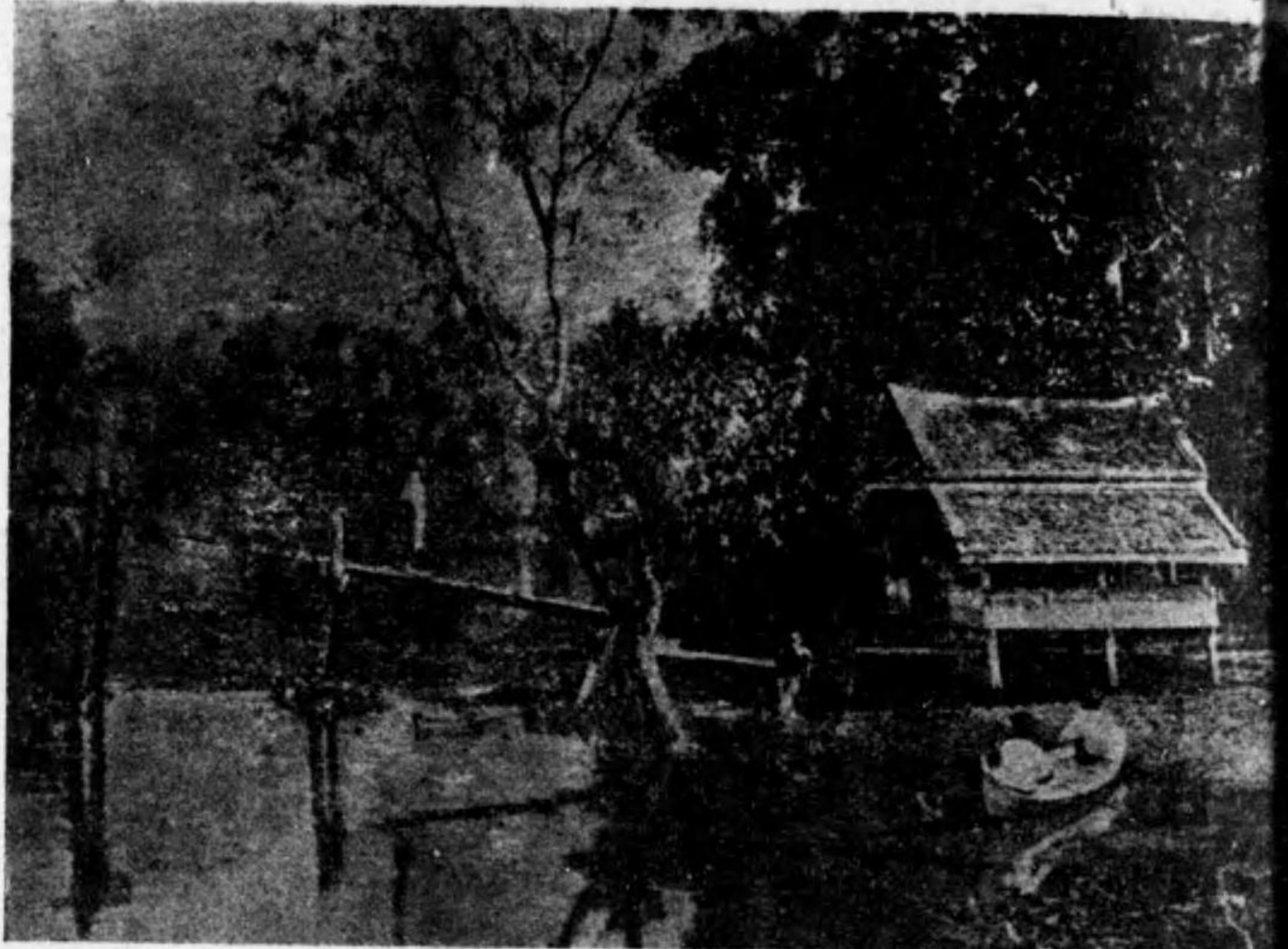
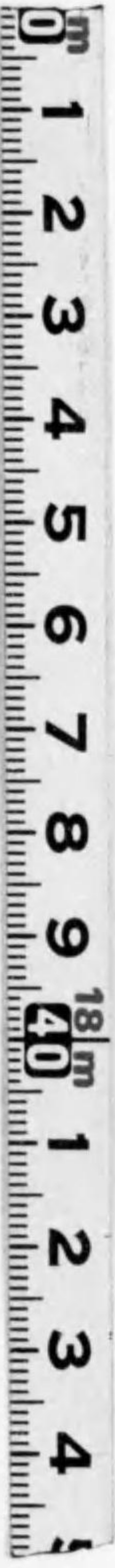


14.2
478



暹羅研究 第一篇

(南支那及南洋調查
第三百三十二輯)



始



臺灣總督官房調查課

寄贈本

凡例

- 一 本書は、グレイム氏 (W. A. Graham) の著述に係る "Siam" (1933) を翻譯上梓せるものである。
- 一 元來邦家と暹羅とは、種々なる點に關係淺からぬ事は、史實に徴して明である。然るに同地方に關する文獻は誠に稀少なるがため、同國の事情を窺知するは至難とする所である。
- 一 同書は曩に出版せられたる "Handbook on Siam" に、一層内容を擴充せられたるもので、同國事情を深く研究せんとするものにとりて、好箇の資料である。
- 一 本書内に表はれたる州は Circle (Moultou) に、縣は Province (Changvad) に、郡は District (Amphur) に、又、總監は Vice-Roy (Uparaja) に、總督は Lord Lieutenant (Samuha Tesa Bihahn) に該當する譯語である。
- 一 暹羅の地人名の發音は、暹羅語を解せざる者にとり尠からず困難とする所である。本書は、之を主として下掲の諸著に據つて讀んだが、素より誤謬なきを期し難い。
- 一 「暹羅の事情」 在暹日本人會發行
- 一 "An Asian Arcady" By Reginald Le May
- 一 "Report on the Operations of the Royal Survey Department of the Army"
- 一 本書は、印刷其の他の都合上第一巻中の或る部分のみに就いて編纂した。爾餘の部分は近々續刊として發表せらるゝ豫定である。
- 一 本書は、筆寫に代ふるに印刷を以てしたるに止まり、敢て公刊せんとするものではない。

昭和二年三月

臺灣總督官房調査課



14.21-478

暹羅研究 第一篇

目次

第一章 地理	一
第一節 面積及び一般地理的區分	一
(イ) 境界の概要	三
一 陸境	三
二 水境	六
(ロ) 領内の島嶼	八
(ハ) 面積	九
(ニ) 一般地理的區分	九
一 北部暹羅	一〇
二 中部暹羅	一一
三 東部暹羅	一四
四 南部暹羅	一五

第二章 人種	一九
第二節 山嶽、河川、都會其の他	一九
(イ) 地理的特色	二〇
(ロ) 山嶽	二三
(ハ) 河川	三四
(ニ) 湖沼	三五
(ホ) 都會	五四
第三節 氣候及び氣象	五四
(イ) 氣温	五七
(ロ) 降雨	五九
第一節 人間の種類	五九
第二節 暹羅の人口	七五
第三節 ネグリット族	八〇
第四節 モン・アナム族	八四
(イ) チャオ・ナム族	八四

馬來人	八九
クメル族	九四
モン族	九六
ユアン族(即ち安南人)	九九
ラワー族	一〇〇
カチエー族	一〇四
チヨン族	一〇
第五節 西藏—緬甸族	一一
メアオ族(メオ族)	一一
ムーソ—族	一一四
カウキ族	一二〇
カウ族	一二〇
リシヨウ族	一二二
ヤオ族	一二三
第六節 ラオ・タイ族	一二八
(イ) 暹羅人	一二八
(一) 服裝	一三五

暹羅研究 第一篇

第一章 地理

第一節 面積及び一般地理的區分

支那と印度との中間に介在し、現時一般に後印度 (Further India) として知らるゝ一大半島は、太古よりして特に外來民族の侵襲を蒙つた。即ち蒙古種族の波濤は、次々にと北方から押寄せ、ドゥラヴィダ人 (Dravidians) は、遙か印度より來つて此の地に植民し、南方の諸島に居住する海賊 (ラウト人 Orangs Laut を指せるものならん——譯者) も亦幾度となく半島を侵した。種族は種族と、部族は部族と、支族は支族と輸贏を争つた。此の人種間の争闘中に於て、優勢なる國家が現はれ、勢力を得てゐるかと思へば、久しからずして凋落の徑路を辿つた。燦然たる文物は起り、榮え、衰へた。此等性質を異にする多種多様の人的要素からして、數多の國民のグループが出來た。此處に言ふ人

第一章 地理 第一節 面積及び一般地理的區分



附 録

索引……………卷末

暹羅地圖……………卷末

第七節 所屬不明の部族……………一七四

(ロ)(イ) カリエン族……………一六九

(ロ) サカイ族……………一六八

(ホ)(ニ)(ハ)(ロ) サム・サム族……………一六六

ラオ族……………一六五

シャン族……………一五七

リユー族……………一四七

死……………一四三

(六) 結婚……………一四二

(五) 誕生、少年時代、青春期……………一四一

(四) 食物……………一四〇

(三) 住居……………一三九

的要素とは、モン人 (Mou)、柬埔寨人 (Kambodian)、安南人 (Annamese)、緬甸人 (Burmese)、シャ
ン人 (Shan)、ラオ人 (Lao)、暹羅人 (Siamese)、馬來人 (Malay) を指せるもので、是等の種族は、人
種學上根本的に違つてゐるものではないが、外觀上は種々の點に於て相異して居り、後印度を舞臺
として、幾世紀かに互り、互ひに覇を争へる傍ら、彼等の間に揉まれ、て覺束なげに生活せる群
小支、部族とも争鬪を繼續してゐた。東洋種族の此の混戰状態の中に、十六世紀に於て、新しい他
の人的要素が現はれた。其れは、歐羅巴人、並びに其の企業である。即ち十六世紀になつてから、
葡、和、英、佛の諸國民は、自ら身を混戰中に投じ、群小の種族を打退け、遂に半島に於ける種族
中の最強者 (暹羅人を指す——譯者) と勝敗を決するに至つた。而して、東西諸國民の此の争鬪は、
始めに互に隔絶し、其れがために利害の衝突を經驗せざりし英、佛兩國が、相互接近し、殘存諸國
民 (即ち、英、佛、暹) の間に於て、争點となれる利益の分配について協定するの先決問題として、
争鬪を休止するの必要を認むるに至れるまで繼續した。殘存國民とは、英、佛、暹の三國民を指せ
るもので、西洋史に於けるゴール (Gaul) と同じく、後印度は、此等三大國民に依て三つの大なる部
分に分たるとことになつたのである。即ち、東に佛蘭西領の印度支那がある。此處には、安南人、東
埔寨人、多數のラオ人が生活してゐる。西に英帝國 (英領緬甸を指す——譯者) がある。此處には、
モン人、緬甸人、シャン人が棲息してゐる。中央に、低地の中間を占領せる部分、即ち、北緯四度二

十分—二十度十五分間、東徑九十六度三十分—百〇六度間に暹羅が横はつてゐる。暹羅の最南端に
は、英領馬來が孤立的に存在してゐる。

(イ) 境界の概要

暹羅の北部は、ケン・トゥン (Keng Tung) と稱する英領シャン・ステート、ムアン・シン (Muang
Sing) と稱する佛領シャン・ステート、ルーアン・ブラバン (Luang Prabang) と稱する佛領ラオ・ス
テートに依て界せられ、東部は、安南に附屬する佛領ラオ人諸邦に依て界せられ、此等諸邦は、メーコ
ーン河 (Mekong) に依て暹羅から區分されてゐる。東部は、更に佛國の保護領たる柬埔寨に依て界せ
られてゐる。西部は、南部シャン人諸邦及び南部緬甸 (Lower Burma) に依て界せられ、南部緬甸の
南方の極點は、北緯九度三十五分に位するヴィクトリア岬 (Victoria Point) にある。南部は、暹羅灣
に依て界せられてゐる。更に狹長なる馬來半島に在る暹羅の部分は、東は暹羅灣支那海に依て、西
は馬拉加海峽の北部に依て、南は英國の保護領たる馬來非聯邦州に依て限られてゐる。今此の國境
を水陸の二つに分ちて左に細説する。

一 陸境

暹羅の陸境は、各方面共、條約に依て決定せられてゐる。最近まで、暹羅の政治を動
搖せしめたる所の境界上の不明不審は、是れに依て訂正し除去せられた。北緯十度三
十分にあるクラ (Kra) から、二十度五分、丁度チャン・セン (Chieng Sen) の北に當るメーコン河の點

に至る九百哩に亙る西北方の陸境は、英暹國境協定委員に依て決定された。最後の協定委員は、一八九二年から同三年に亙りて立界の事務に従事した。此の陸境は、馬來半島の脊柱をなせる山脈の頂上をつたつてゐるが、此の山脈は、北方に於ては、西テナセリム (Tenasserim)、タボイ (Tavoy)、

ウン・ダヤ (Huang Daya) の三河、東メーコーン及び其の支流との間の分水界をなしてゐるのである。此の陸境はトウン・イン河 (Thung Yin) の水源地から、該河を



第一圖 カンヂン山脈の西に近附するに西國境山脈

ら、急角度をなして西 (東の誤りか——譯者) に折れサルウキーン河とメピン河 (Meping) との分水界に上り、諸高山の山嶺、山脈に沿うて東北に進み、バーン・マイ (Ban Mai) と稱する小村落に於てメーコーン河に達してゐる。

下り、人煙稀なる谷に沿ひて、該河がサルウキーン河 (Salwin) に接続する部分に及び、爾後サルウキーン河に沿うて上ること六十哩、其れか

バーン・マイ (是れは北緯二十度十五分の地點に在り) から、北緯約十五度の地點にあるナム・ムーン (Nan Mun) の河口に至るまでは、メーコーン河が佛暹間に於ける最も明白なる國境となつてゐる。(但し、メーコーン河がルーアン・ブラバインを通つてゐる部分だけは例外である)。ナム・ムーン河の河口附近から、境界線はメーコーン河を去り、西に轉じて約二百哩の間ブノム・ダン・レク山脈 (Phnom Dang Kek) に沿ひ、其れから南に向つてプラーチム (Preahim) とバットムボン (Batumbong) 二縣の間を通過し、チャンタブーン (Chantabun) の背後にある山脈に及んでゐる。境界は、海を距る約二、三十哩の地點に於て海岸に沿ひ、且つ右の山脈に沿ひて南東に約百哩進み、其れから南西に曲つて、暹羅灣の遙か南方、クラット (Krat) と稱する小さな縣の下部に於て海に會近してゐる。最終の國境協定に依て、右の如く、國境はメーコーン河から引込んだのであるが、其れがためマルプレー (Malupre)、バサック (Bassac)、バットムボン、シームラーブ (Siemrap)、シソボン (Sisophon) 等の諸縣は、嘗ては成程東埔寨王國の一部であつたに相違ないが、既に久しき以前より暹羅に併合されてゐたものが、再び東埔寨の手に歸し、佛國の保護領に編入さるゝに至つた。兎に角、暹羅の東部國境といふものは、數次任命せられた佛暹國境協定委員に依て決定されたものである。馬來半島の南方に於ける英暹國境は、一九〇九年の英暹條約に依て決定され、英暹聯合委員の手に依て、一九一二年立界せられた。

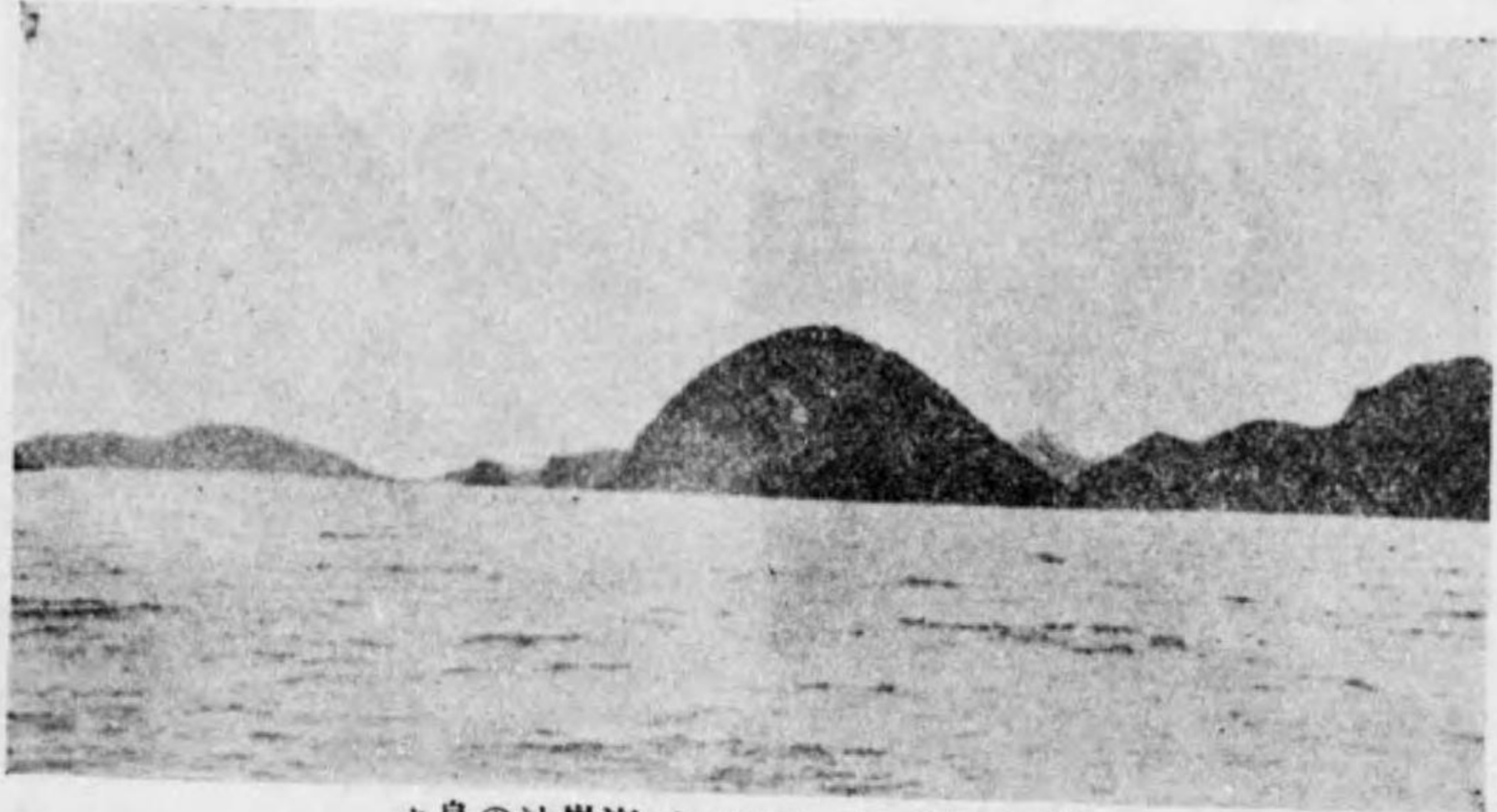
二 水境

海岸線は、馬來半島の東海岸に在る。パタニー區(Patani Division)の最南端から、北に向ひ、暹羅灣を迂回してチャンタブリー州(Chantaburiともいふ)の東南端なるムアン・クラット(Muang Krath)の近くにまで及んでゐる。其の間長さ凡そ一千哩である。此の外、海岸としては、馬來半島の西側に、三百五十哩に亘るものが一つあるのみである。狭長なるブケット州が其れで、英領馬來と英領緬甸とは、此の州に依つて分たれてゐる。

暹羅の此の短かゝらざる海岸線中には、殆どあらゆる種類の海岸が網羅せられてゐる。暹羅灣の灣頭では、浅く、よこれたる海が、泥濘の如き平地を波のまに／＼洗つてゐる。此の方面の海岸は、干潮の際には、何哩となく春中を露出し、殆ど眼に見えないやうな緩勾配で、蚊の充満せるスワムプから、中部暹羅に於ける低平なる舊地沼澤地に昇つてゐる。所が、暹羅灣の東岸に進むと、海岸の様子が忽ちにして違ひ、海の水は清らかにサファイアの如き色を呈し、どろ／＼の海岸は變じて、胸も浮き立つばかり、美しい砂汀になつてゐる。而して、耕耘されてゐない海岸の部分は、鬱蒼たる森林に覆はれ、地形も眼に留る位の優しい勾配をなして、浪打際から小高い丘陵にまで昇り行いてゐる。海岸線は、非常に凹凸に富み、是れに依つて生せる多くの小灣には、小さな島が基布散點し、えも言はれぬ美觀を形作つてゐる。リアント岬(Cape Liant)から更に先きに進むと、毎岸の凹凸變化一層甚だしく、大きな岩塊が到る處、突兀として水面に現はれ、土地は海岸から急勾配を

なしてパタト山脈(Patut R.)の方面に高まり、其處からは、幾多の小急流が、狭い谷を通じて海に向つてゐる。

暹羅灣の西になると、割合に低い海岸と、斷崖絶壁とが交互に存在し、其等絶壁の上には、あんなに険しい所に、どうして植物が其の存在を保ち得るかと怪まれる位、巧妙に搦み付いてゐる。而して、綺麗な、きら／＼と輝く深青色の波が金色の海岸を洗ひ、絶壁に打付け、洞窟の中から噴出し、無数の小島を



第 二 圖 チヤンタブリー州の海岸沖の島々

取圍んでゐる。凹凸多き此の海岸の部分には、多くの灣が自然に出来てゐて、船舶の出入に好適した場所も少なくない。其の中特記に値ひするものが四つで、チャムポーン(Chumphon)、バンドン(Bandon)、バンクラ(Bangkla)、パタニーと稱せらる。此等の港は此の附近を航行する船舶ならば、譬へ幾艘の汽船帆船たりとも自由に入出し、安全に碇泊させることが出来る。

馬來半島の西に位する海岸線にも、二、三の理想的港灣が存在する。此等は、嘗ては海賊の巢窟であつたが、今日では、此等

の小港竝に一大商港たる彼南間に於て商業に従事せる無數のジャンク船帆船に對し、安全なる泊地を提供してゐるのである。

(ロ) 領内の島嶼

暹羅の全海岸は、大小の島に依て縁取られてゐる。此等の島の中二三のものは、一百乃至二百平方哩の面積を有するが、大多數は其れよりは遙かに小さい。領内の島嶼中、最も重要なものはチャラン島 (Chalang) 一名ウヂョン・サラン (Ujong Salang) である。歐洲人は、是れを訛つてジャンク・セイロン (Junk-Ceylon) と言ひ、暹羅人はタラン島 (Thalang) と稱呼してゐる。



第三圖 マハシ灣に於るわーコープ島

此の島は、馬來半島の西岸で、錫鑛業の最も旺んたる所から餘り遠くない地點に位置を占めてゐる。英領印度は東岸に於て此のチャラン島に來り、亞刺比亞の商人も十世紀に此の島を訪問した。歐洲の商人が此島に出入するやうになつたのは、十六世紀の中葉以後である。十八世紀に於ては此の島は暹羅、緬甸兩國爭鬪の中心であつた。該島に良

港が存在すること、竝びに該島が景勝の地位にあることは、同島に艦隊を所有した當時の獨逸をして、海軍根據地を同島に獲得せんとの野望を起さしめた。馬來半島の東岸では、コー・パンガン (Koh Pangan) とコー・サムイ (Koh Samui) とが最も大なる島である。コー・サムイは、面積約一百平方哩であるが、有用鑛物に富むと信せられ、且つ世界に於て最優秀な古々椰子を生産すると稱せられてゐる。暹羅灣の向側には、シー・チャン群島 (Si Chang) が、メナム・チャオ・ブイヤ河 (Memam Chao Phraya) の口元に散在してゐる。而して、同河に這入ることの出來ぬ船舶は、此の群島の蔭に隠れて荷物の積卸しを行ふ。外に、コー・チャン (Koh Chang)、コー・クット (Koh Kut)、コー・コン (Koh Kong) 等の島があるが、何れも空中に聳立して險しく、植物を以て密に覆はれてゐる。

(ハ) 面積

暹羅の面積は、二十萬平方哩と推算されてゐる。若し是れが事實であるとするならば、暹羅は、後印度全體の三分の一の面積より狭きこと四萬平方哩である。南北に亙る最も長い所では約一千百哩あり、東西に亙る最も廣い所では、五百十哩ある。

(ニ) 一般地理的區分

暹羅に關する著述家は、同國に就て記述するに當り、或は二つ、或は其れ以上の部分に區分をなしてゐる。然し、其の場合、彼等は人種學上又は地理學上の原則に依て、左様な區分をなしてゐる

のではない。吾人は、地理學的人種學の見地より、暹羅の國を區分して、北部暹羅、中部暹羅、東部暹羅、南部暹羅とすることが出来る。其れが最も便利なる區分方法である。北部暹羅は、北緯十六度の附近にて、聯合してメナム・チャオ・ピヤ河を形作つてゐる四大河の排水區域、及びラオ人の生活するメーコーン、サルウキーン兩河の排水區域で、古代史に有名なる市街の跡を存する小面積の土地からなつてゐる。中部暹羅は、メーコーン、メナム・チャオ・ピヤ、バン・パコン (Bang Pakong) の三河(是れは暹羅灣頭に注いでゐる)の排水區域、暹羅灣の西に横はれる部分で、南はクウキ (Kui) に達するまでの土地、灣の東に横はれる部分で、南はムアン・クラットに達するまでの土地を包含してゐる。此の中部暹羅は暹羅王國の中心地で、人口の大部分は此の土地に包含せられ、國富の十中八九までは此處に存在する。東部暹羅は、ナム・ムーン河及び其の支流ナム・シー河 (Nam Si) の排水區域、メーコーンの右岸に於ける同河排水區域の一部を包含し、ラオ人を其の主たる組成分子としてゐる。南部暹羅は、馬來半島の前記クウキ町の南に横はつてゐる暹羅領の部分、暹羅の保護下にある馬來人の棲住せる區域を含んでゐる。住民は、暹羅人、馬來人、混血人からなつてゐる。

一 北部暹羅

北部暹羅は、面積約六萬平方哩で、南北に稍々竝行して横はれる山脈と河谷との集合からなる。即ち、東南に於ては、緩に傾斜する上坂のほりさかに過ぎない位の山が、西北に進行するに連れて高度を増加し、西部國境の近くではタネン・タウン・ギ山脈 (Tanen Taung Gyi)

に連なり、非常なる高度を示してゐるのである。此等の山は、到る處密林を以て覆はれ、巖石が高く雲表に聳えてゐる處もあれば、山地住民の存在を示す小開墾地も此處彼處に隠見してゐる。山々には、無數の溪流があり、排水は此等に依て行はれる。暑期渇水の時分には、河とは言はれない程水量少なく、全く乾涸してゐるものも其の中にはあるが、雨期になると、或は瀑布となり、或は奔流となつて、西はサルウキーン河、東はメーコーン河、南はメナム・チャオ・ピヤ河に注ぎ、是れが氾濫の原因をなしてゐる。山間に出來た谷の中には、穀物の畑、其の間を曲りくねる河を有する、稍廣々としたのもあれば、滾々として流るゝ水の音に鳴る峽谷もある。然し、南方に進むと、各河とも膏沃なる沖積層を以て覆はれた廣濶な平地に依て縁取られ、其處には少なからざる人口が集中し、暹羅に於ける主要農産物の或物が多量に生産せられてゐる。北部暹羅は、モンthon (Mouthon) と稱するいくつかの州 (Circle) に分たれてゐる。パーヤップ (Payup)、以前半獨立國であつた北部ラオ人の棲住區域を包含せるマハーラート (Maharat)、ペチャブーン (Petchabun)、ピットサスローク (Pitsanulok)、ナコン・サワン (Nakon Sawan)、等の諸州がそれで、ナコン・サワンのみは、吾人の所謂中部暹羅に片足を突込んでゐる。

二 中部暹羅

中部暹羅は、面積約五萬五千平方哩の一大平原である。該平原は、暹羅と緬甸との國境にある諸山から東方に延び、東部暹羅に於けるテーブル・ランドの西端、並

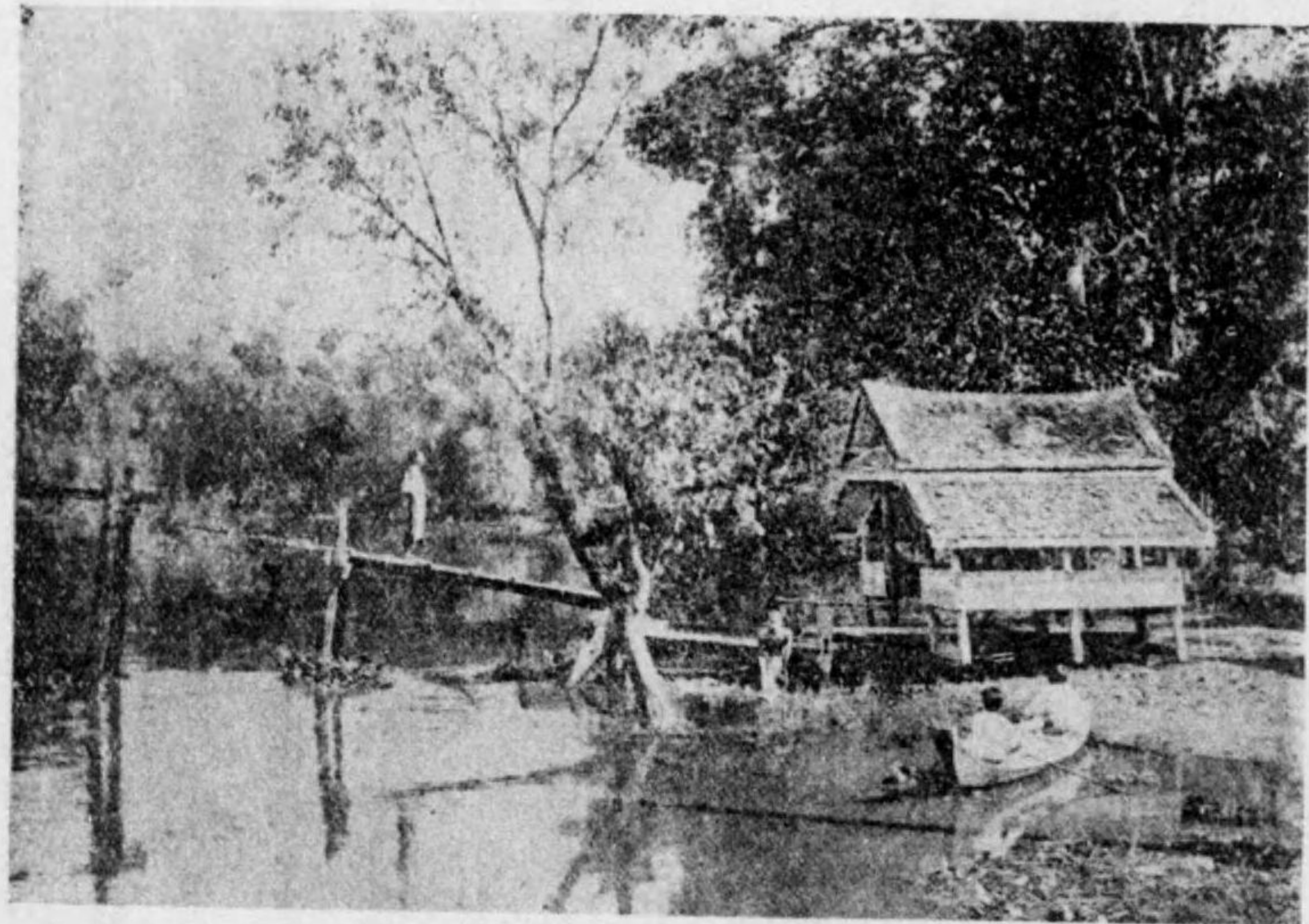
びに東埔寨の國境に達してゐる。吾々は、中部暹羅の一部分として、別に恰も兩手の如き狀をなし、中部暹羅は、無條件に平坦であると言つても差支へない。平原の北、西及び東の海岸地帯には、チャンゲルが今尚ほ名残りを留めてゐる。然し、平野の大部分には、チャンゲルなどいふものは無く、バルマイラ椰子が此處彼處に姿を現はし、住居の存在を示す竹藪が、ちこちに見え、丈高き樹木が水流の兩側に亭々として榮えてゐるのみである。平原の表土は、重粘土狀を呈し、全部沖積土からなり、約其の四分の一は米作のために使用されてゐる。殘餘の四分の三は、草と蘆に依て覆はれてゐる。而して、人力と、灌漑施設とを待たずにゐる。人間の勞力と灌漑の施設にあらば、暹羅は世界に於ける最大の産米國となり得るのである。



第四圖 中部暹羅の河町

暹羅の中部平原は、海面より、唯僅に高いのみである。従て洪水

し、全部沖積土からなり、約其の四分の一は米作のために使用されてゐる。殘餘の四分の三は、草と蘆に依て覆はれてゐる。而して、人力と、灌漑施設とを待たずにゐる。人間の勞力と灌漑の施設にあらば、暹羅は世界に於ける最大の産米國となり得るのである。



第五圖 中部暹羅の代表的風景

の影響を蒙ること甚大である。洪水、氾濫といふのは、毎年の恒例と言ふも差支へなく、其れがため、夥しい分量の沈泥が漸次平原の高度を増加してゐる。平原全體から言へば、北に於て少し高く、南下するに連れて高度を減じてゐる。河流を標準として論ずれば、土地は水流と直角に高度を減じ、河水は自ら堆積せる沖積土の堤防に

沿うて流れてゐるが如き観がある。加之、吾人は、最近の地質學的年代に於て、海水が平原の大部分を洗つてゐたことを證明するに足る澤山の事實を握つてゐる。現今に於てすら、暹羅灣の北岸は、一年一呎といふ、實に驚くべき速度を以て海面の方向に向つて進んでゐる。中部暹羅の中には、クルン・テープ州 (Krung Tep)、「一天萬上の王都」たる盤谷市 (市内外とも人間の密集せる所で、暹羅の首府である)、クルン・カオ (Krung Kao 舊都の意) と呼ばれ、數多の縣を其の州内に包含するアユタイア (Ayuthia)、平原の東部に位するブラーチム州、チャンタブーン州、其の西部に位するナコン・チャイシ州 (Nakon Chaisi)、ラーヂブリー州 (Rajburi) 及びナコン・サワン州の北部暹羅の圏内に包含されない部分が含まれてゐる。

三 東部暹羅

東部暹羅は、其の面積大約六萬五千平方哩で、多數の山に取圍まれた、廣大なれども深くない一盆地からなつてゐる。其の外に、東部暹羅の部分としては、右盆地の東端に於て、其の堺をなせる山々と、メーコーン河との中間に於て位置を占めたる狹長なる土地の斷片がある。此處に言ふ盆地は、中部暹羅と東部暹羅との界限をなせる、千呎又は其れ以上の高臺から、東方に進むに連れ次第に低くなる土地の表面からなつてゐるものである。東部暹羅には、小面積で、而も非常に掛け離れたる場所に、肥沃な土地が無いではないが、一般に地方が貧弱で、氣候不良であるがため、産業上の價値に乏しい。山の斜面を覆へる貧弱なジャングル中には、

取るに足る材木が少ない。而して、低平なる盆地には、自然的排水の道が缺けてゐるため、雨期には大なる沼澤が到る處に出來るといふ有様で、大部分は蘆と雜草の跳梁に委してあるといふ状態である。此等の雜草は、涼しい時に生長し、暑氣の際には枯死すると言ふよりは、寧ろ焼死するのである。百二十五萬内外、即ち一平方哩に付、約二十の人口が、生活しにくい此の暹羅の部分に住んでゐる。而して、半年は濕氣と泥濘との中に、他の半年は暑く乾燥し、塵埃を以て充されたる霧圍氣の中に於て、辛ふじて出來る穀物から、露命を繋ぐことを許されてゐる。此の近傍に於て、特に寒心すべき事件は、人畜の間に、時々恐るべき傳染病が襲來することである。東部暹羅は、行政上、コーラート (Korat)、ローイ・エット (Roi et)、ウボン (Ubon)、ウドーン (Udon) の諸州に區分されてゐる。但し、ウボン、ウドーンの兩州は、邊輒の地で、交通自由ならざるため、中央政府の手が行届いてゐない。

四 南部暹羅

南部暹羅は、面積約三萬平方哩で、馬來半島の狹長なる部分を占め、半島を南北に貫通せる山脈に依て、截然たる二つの地方に分たれてゐる。東海岸地方、西海岸地方が即ち是れである。中部暹羅と南部暹羅との分れ目は、クウキである。此の地方に於ける東部海岸は、非常に細く長く、場所に依ては其の幅十哩以上に達しない。爲めに、傾斜は、波打際に始まり、千乃至二千呎ある山の頂 (此處は緬、暹の國境) まで、殆ど直線に登つてゐる。此の地方、殊にクラの地峽を越えると、急に廣濶になり、ナコン・スリー・タムマラート (Nakon Si Thammarat) 普通にラコ

ン Takon 縣といふ)附近では、山地と平原とを交錯せる幅約七十哩の土地が暹羅灣と緬甸境との間に横はつてゐる。尤も緬甸は、ナコン・スリー・タムマラートの少し北ヴィクトリア岬で終つてゐる。ナコン・スリー・タムマラートの南で、東海岸地方は、更に一圍狭くなり、ソンクラに於て、タレ・サーブ (Tale Sap) と稱する内海を横切り、バタニー (Pattani) に於て再び廣くなつてゐる。此處から東海岸地方の最南端であるタバル (Talar 一名タクバイ Takbai) に至る迄、遙か西方の境界線は、山脈の頂上をのみ縫ふことなく、山嘴、溪流、深谷を辿り、英領馬來の北境に沿うて、廣大なる面積の土地を迂回した山、廣谷を其の中に包んでゐる。東部海岸の南端たる此の地方は、風光誠に明媚で、青々たる海を前面に控へ、長汀曲浦は金色の砂に輝き、亭々たる椰子樹の蔭には、平和なる村落が巢ひ、後方には、千古斧鉞を加へない常緑のジャングルが幾哩となく續き、雲表に聳ゆる西方の連山に依て背景付けられてゐる。東海岸地方は、平地的と言はんよりは寧ろ山地的であるが、大小の平野が多數點在し、輕鬆なる粘土、砂質の沖積土には、米作が年々缺がすことなく行はれてゐる。家畜も到る處に飼養せられてゐる。ナコン・スリー・タムマラート及びパタルン (Patalung) の周圍には、東海岸地方に於ける最大、最肥沃地があり、農業又盛んにして、多數の人口が其れに依て維持せられ、他の地方に於て多く見ざる繁榮振りを示してゐる。此の地方は又各種の魚族に富み、漁業亦至つて旺盛である。天然に恵まれ、一般に幸福なる生活を送り居る點に於て、此處の住民は、東部暹羅の住民

と全然趣を異にしてゐる。彼等は澤山の食物を持つてゐる。一樣性に富む氣候に恵まれてゐる。悪疫の流行がない。彼等は人間生活の苦痛を知らない。行政上、東海岸地方は、スラート (Surat)、ナコン・スリー・タムマラート、バタニーの三州に區分されてゐる。

東部海岸地方で、地理的に吾人の目を惹くに足る一大特色は、ソンクラに於ける延長約五十哩に亙る内海である。内海と外海との間には、狭長低平なジャングル地帯があつて分界をなしてゐる。然し、内海の南端には、狭い自然の出入口があり、北方には運河が設けられてゐる。内海には多數の小島があり、此等小島の中には、密林を以て覆はれてゐるものもあれば、不毛の絶壁より成立つてゐるものもある。内海の周圍は、土地肥沃なれども、人間は多く住んでゐない。南口から這入つて約北二十五哩に亙る内海の部分には、白色の堂塔を頂上に戴いた青々とした山々、威嚴あるカスアリナ樹の森が雙方に竝んでゐて、えも言はれぬ眺望を呈してゐる。内海の下端は港になつてゐるが、内海其れ自身は航行に適せぬ多くの浅い部分があり、加ふるに突風が海上を見舞ふことがあるので、何等海運上の價值を持つてゐない。

南部暹羅の西岸地方は、一九〇九年の英暹條約に依り、ケダー (Kedah)、パリス (Patis) の二州が英國の保護下に置かれることに決定したるがため、著しく面積を狭められた。即ち今日では、背後に馬來半島の縦走山脈を控へてゐる、南北三百五十哩に亙る狭長なる土地で、英領緬甸の南端

から、英領馬來の國境に及んでゐる。面積に於て東海岸地方より遙かに狭く、海岸は、東海岸に比し遙かに多くの鋸齒狀をなしてゐる。然し、西海岸地方に包括せらるゝ島の數は、東海岸よりは多い。天然の風光は、北方テナッセルムの其れと其の趣を同じくし、東海岸の其れに比し遙かに勝つてゐる。世界旅行者の誰れもが作る旅行の日程に一部の變更を加へ、一日の暇を偷んで彼南から旅行者の餘り訪れない此の地に來れば、朝空に紫色を帯び、日中には緑に輝き、夕暮には灰色に變じ、二六時中刻々其の容姿を改め、海岸より急傾



第六圖 トッケブ島の背に於ける海入る

斜をなして高く雲表に聳ゆる多くの山々、黄金色の砂濱に九天直下するがため途中から斷ち切られたる形になれる深緑なる多くの谷、銀色の飛沫を浴べる突兀たる海角、或は赤く或は灰色を帯び、千様萬態をなして海中に突出せる花崗岩、石灰岩、青々たる海原の此處彼處に植ゑられたる白帆、重苦しくゆるやかに、海岸づたひに進むチャンク船、一日の暇つぶしは、是れに依て充分に酬いられるであら

う。西海岸一帯には、米の耕作に適當なる所が少ない。然し、土地は一般に肥沃で、米以外の作物、殊に胡椒、肉荳蔻、古々椰子は非常に能く發育する。流れ速かなる、水の綺麗な小溪流は到る處に存在するが、「河」と名付けらるゝ程のものは一もない。西海岸地方は、地質學的に言ふと、東海岸地方と大差がなく、唯、花崗岩が東海岸地方よりも一層多く表面に現はれて居り、地層學上の系統に大なる變動があつたことを示してゐる。住民は、暹羅人、サムサム人(Samsams)、馬來人、及び極めて少數のセマン(Semangs)種ネグリットーからなつてゐる。中に就き、馬來人は多く南部に居住し、北部では暹羅人が一番優勢である。西岸地方には、右の外、支那人の居留地が到る處にある。彼等は、過去數世紀間同地方に於ける錫鑛に引付けられて渡來したものである。同地方は、行政上プケット(Pulicat)州と呼ばれてゐるが、全體の人口は約三十萬である。

第二節 山嶽、河川、都會其の他

(イ) 地理的特色

後印度は、面積の比較的小さな割合に、三つの見事なる河と、亞細亞に於ける最大湖水の一と、數箇の大なる山脈とを持つてゐる。然し其の後印度の一部たる現在の暹羅の境内には、此等の中どれも存在してゐない。例へば、メーコーン河は、亞細亞に於ける最大河川の一であるが、暹羅の東方に於

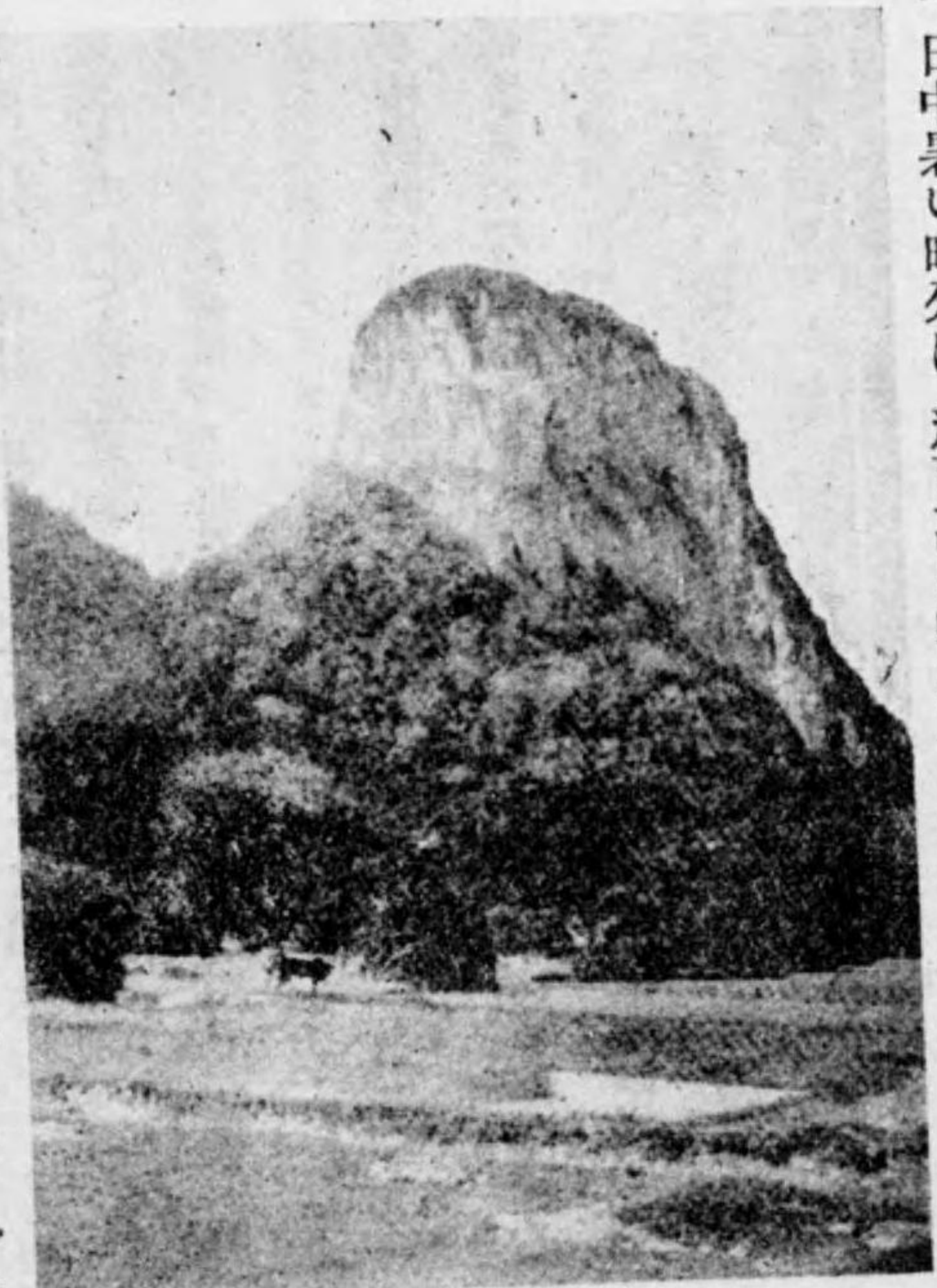
て、一千哩以上に亙つて、國境の一部を形作つてゐるに過ぎない。サルウキーン河も、其の長さによつて、メーコーンに匹敵する大河であつて、暹羅の西境に幾度か接觸はしてゐるが、メーコーンと同様、其の西岸(片岸は置いてゐても)を暹羅の國境内に置いてゐる所は一箇所もない。東埔寨には、タレ・サーブ(Tale Sap)といふ大湖水があり、最近まで其の半分は暹羅の國境内に存在したのであるが、佛暹間に於ける所謂「協定」に依て、全然暹羅の國境外に出されてしまつたのである。山嶽に就て見ても同様である。後印度の南北に走れる大山脈で、後印度の方に下降せるものは、暹羅の東と西とに向つて逸走してゐる。即ち、東に走つてゐるものは、東京を通過して海に赴き、西に走れるものは緬甸を通過して馬來半島に赴き、暹緬兩國間の境界をなしてゐる。此の如く地勢上に於ける諸種の色は、悉く暹羅を連れてゐるけれども、否、最負目に見ても其の一部分しか暹羅の境内には存在しないけれども、暹羅自體の大河高山といふものが別に在り、二三湖水の見るべきものも外にあるから、地形景色上の單調は、是れに依て充分に破られてゐる。

(ロ) 山 嶽

北部暹羅の山脈は、焙器クワグライオンに渡してある金屬棒の如く、相竝んで北南に延びてゐる。高さは四、五千呎の程度であるが、所々に峻嶺を挿んでゐる。其の中特に勝れてゐるものは、暹羅の最高峰たるドイ・インタノン(Doi Intanon 八、四五〇呎)、チェン・ダオ(Chiang Dao 七、一六〇呎)、バナム・ボク

(Panom Pok 七、五三二呎)、サム・サオ(Sam Sao 五、四七六呎)、バ・ウキン(Pa Wing 四、八三〇呎)、バチャウ(Pachaw 五、九〇〇呎)、ステブ(Siehp 五、五〇〇呎)等で、最後に記載せるバチャウ・ステブの二山はチェン・マイ町(Chiang Mai)の附近にある。多くの側脈、例へば其の暗黒なる峡谷、老木の密生せる幽谷に出入するには、死を覺悟せねばならぬ、否、甚くとも病氣に罹ると言はれてゐる。ドン・ブイヤ・ファイ山(Dong Phraya Fai)と同様、土著人民に恐怖されてゐるブナム・ダン・レク山等を有するコーラート高臺は、人目を惹く地質學上の系統である。コーラート高原から南下してバタト山脈に連なつてゐるナコン・ナーヨク(Nakon Nayok)、クラビン(Krabin)等の山々は、熱帯の有するあらゆる植物的美觀と、幾多の清流とを具備してゐる。バタト山脈も亦チャンタブーン海岸の海上で或時は雲霧に覆はれ、其れがためにむづかしい顔をなし、或時は晴れやかな姿で吾人に接する、見事なるジャングルと巖石との結塊である。該山脈中最も秀でてゐるのは、カオ・サイダオ(Kao Suidao 五、五六〇呎)カオ・クモック(Kao Kmoek 四、〇〇〇呎)カオ・チェマオ(Kao Chemo 三、四〇〇呎)等の山々である。北部及び中部暹羅の西境を形成し、且つ暹羅の南部を兩分せる森林を以て覆はれたる山脈の側面には、廣大なる面積のジャングルがあつて、其處には象、野牛、犀等の巨獸が棲息してゐる。而してジャングル生活をする原始野蠻の人間を以て人間と言へば兎に角、然らざる場合には全く人跡を缺いてゐる。此處にはあらゆる色合のライムストーン石灰石の岩、

きらゝかに輝く瀑布を懸垂せる灰色の花崗岩、密林中に高く聳え、且つ互ひに奇々怪々なる各種の蔓性植物で結び付けられてゐる巨木、苔、羊齒を以て覆はれたる高臺の樹木が吾々の注意を呼んでゐる。深い峡谷には、日中暑い時分は、幾百萬の蟬が耳を聳せんばかりに鳴き、夜になると、激々たる谿流の音、高臺に逍遙する巨象の足音、鹿の鳴聲が静寂を破ることあるのみである。此處では天然が其の力、其の美を擅にし、力一杯に其の生産力を發揮して



第七圖 南部暹羅バダウルに於ける石灰岩聖山

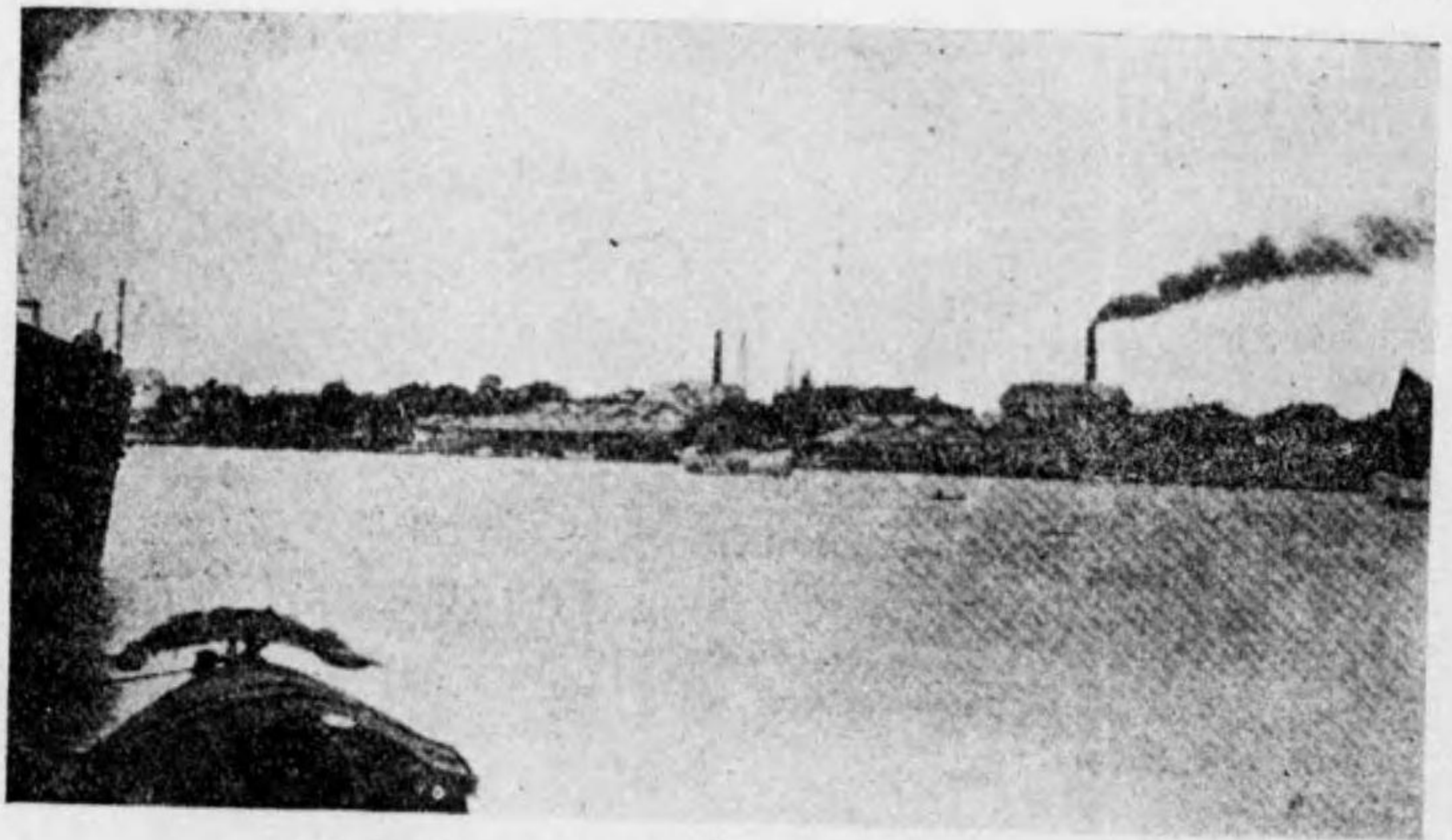
る高山は、何れも大なる間隔を保ち、中に就き特記すべきものは、カオ・ブラ・ブン山 (Kao Phra Wam 五、八〇〇呎)、マゴドック (Magadok 五、七五〇呎) — 以上はラヘン (Rahang)、ナコン・サワンの東に在り — ムアン・クウキ (Muang Kwai) の直下南部暹羅中の最狭部にあるカオ・ルーアン

第七圖 此の方面に於ける交易が此の徑に依て兩國間に行はれてゐる。間には、此の地方を通じて數本の小經が造られてゐて、或程度の交易が此の徑に依て兩國間に行はれてゐる。

(Kao Inang 四、八〇〇呎)、主山脈に接近してゐるが其れとは離れ、舊都ナコン・スリー・タムマラートの附近に互ひに接近して竝立せるカオ・ブロン (Kao Prong 四、五〇〇呎)、カオ・ルオン (Kao Luong 五、八〇〇呎) 等である。

ハ) 河川

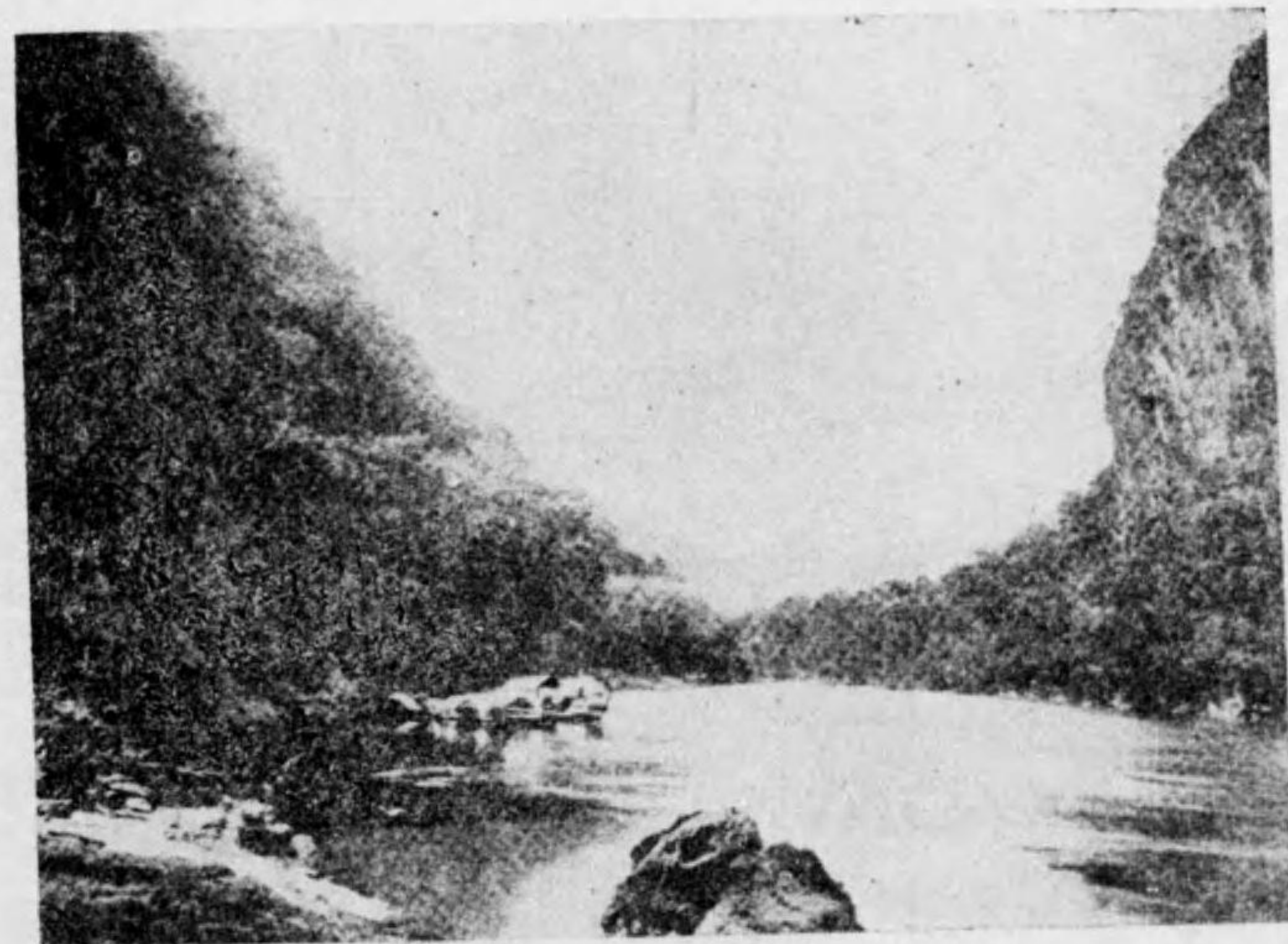
多數の支流を有するメナム・チャオ・ブイヤ河は暹羅に於ける唯一の河川系統であると言つて差支へない。此の河の流域に生活し、河に航行する暹羅土人は、此の氣高き河、此の河に依て氾濫され排水されてゐる區



第八圖 暹羅のメナム・チャオ・ブイヤ河の近附谷盤

域のみが本當の暹羅だと考へてゐる位である。大多數の暹羅人は、メナム・チャオ・ブイヤ及び其の流域以外に河や谷や平原があることを考へてすら居らぬ。遙か北方のバーヤツプ、マハーラト兩州に於てサルウキーン・メーコーン兩河に屬する分水嶺の間に横はる山からしてメピン、メワン (Mewan) メイヨム (Meyom) メナム (Menam) の四河が發源してゐる。此等の四河は、前述の焙器狀を爲せる山脈の

中間を流れ、メビンとメワンとはラヘンといふ所で、メイヨム、メナムとはチャム・セン (Chama) で先づ合一し、合一せる二つの河流は更に水源地から約二百五十哩もあらうと思はるゝパークナムポー (Paknampho) といふ所で會流し、メナム・チャオ・ブイヤ河を形成してゐる。此等四つの中、西の方にあるメビンとメワンとは、水源地の位置が非常に高く、従て流れが急で、深度も深くないからして氾濫し易い傾向を持つてゐる。是れに反し、東方にあるメイヨム



第九圖 急流の河ニヒメ

とメナムとは、發源地が前者に比して低く、従て水流が緩で深さも大であるから水量は定期に且つ規則的に増減する。西方の二河は、其の大部分を通じ、淺吃水の船を行ることが出來、東の二河は、四時大吃水の米穀船を行ることが出來る程、深さが大である。満水時季には、前記

パークナムポーの上流百二十哩の地點まで、大吃水の汽船其の他の船舶を行ることが出來る。四つの川の中、メナムが最も深く、大きく、且つ流れが最も緩で、大體の性質が、四河の合流點以下のメナム・チャオ・ブイヤに似てゐる。該河 (メナム) は産米地方を通過してゐるがため、河上に於ける運輸交通は相當頻繁である。

最後の合流點であるパークナムポーから海までは、直線にして百四十哩あるが、其の間のメナム・チャオ・ブイヤ河の進路は甚だ



第十圖 三百五十五哩の上流メナム河に於けるナム河

複雑である。即ちパークナムポーの下流約三十五哩なるチャイナート (Chaiat) に於て、メナム・チャオ・ブイヤは一の支流を出してゐる。此の河は、スバン河 (Suan 一名タチン河 Tachin) と稱せられ、母河に並行して流れ、遂に海に注いでゐる。チャイナートより河下の方でメナム・ノイ (Memam Noi) といふ河が又一つ出でゐる。此の河は、暫く母河と並行して流れ、バン・サム・コーク (Ban Sam Kok) といふ所で、再び母河に合してゐる。チャ

イナートの下約二十哩のバン・タクワイ(Ban Takwai)といふ所で、メナム・チャオ・ブイヤは更に一つの支流をば東に向つて出してゐる。此の河は、ロブブリー(Lopburi)、アユタイア等を経由し、前記バン・サム・コークといふ所で再び母河に合してゐる。此等諸河の岸邊は、概して低く、且つ密に竹林、高木を以て覆はれてゐる。而して此等の竹や樹木の蔭に、村落がちりぢりばらばらと、然し乍ら大體に於て連續的に存在してゐる。此等の村落で、左もない處では稻が地平線上見渡す限り植付けられてゐる。



第十圖 舊王の廟に於けるヨイム河 (ラプ・アル王の廟に於けるヨイム河)

中には、町と稱するも不可なき程多數の戸數を有するものがある。無數の寺院、僧院、堂塔等が其の間を點綴してゐる。唯折々岸邊に何にもない所があり、其處に米田が其の姿を現はす。米田の後方遙か向ふに竝木が見えれば、其れは其處に他の河流がある證據

メナム・チャオ・ブイヤは、其の深みには多量なる黄色の沈泥と、廣袤たる表面には大小無數の船を浮べ、次第に南下して遂に首府盤谷に達する。此の附近に於ける河は、數百萬人の通路であり上水であり、下水でもある。首府の附近より以南は、一千五百噸以下の航洋汽船が自由に航行することが出来、廻りくねりつつ同河は、尙ほ下ること二十哩で遂に海に注いでゐる。盤谷から河下の方は、沿岸の風光、河上とは大に其の趣きを異にしてゐる。河下の方には、古々椰子や竹藪が少なく其の代りに低く羊齒狀をなせるニッパ椰子の葉狀體、マングローブが何哩となく兩側の沼澤地に連なつてゐる。岸も此の附近になると、盤谷の上流よりは遙かに低い。河は、低平なる泥狀の地面を其の岸とし、海に達するや、此等の河に通有なる一の働らきをなしてゐる。即ち其の中に孕んで來た夥しき數量の粘泥は、海にぶつかつて大なる半圓形の砂洲となつて河口の兩方に跨り、其の廣さ幾許なるを知らずといふ有様である。

前に記載した四つの支流を除けば、メナム・チャオ・ブイヤにはバサク(Pasak)といふ一の支流を他に持つてゐるのみである。此の河は南西に流れ、ベチャブーン、サラブリー(Saraburi)等の地方を横切つて、メナム・チャオ・ブイヤの東側の支流たるロブブリー水道と、アユタイアの少し上の所で合してゐる。バサクは、延長約二百哩の河で、本流との會合點より上二十五哩は、小蒸氣船其の他舟筏の航行に適してゐる。

メナム・チャオ・ブイヤに依てなされる排水の分量は、季節に依て甚だしく異なるものである。パークナムボアの直下に於ける最乾期の排水量は、一秒百五十立方米突以下である。

然るに、同一の場所に於ける最大雨期の排水量は二千立方米突に達してゐる。洪水期に於ける、盤谷附近の排水量は一秒三千五百立方米突である。水量の増加し始むるのは五月で、十月まで次第に其の分量を増し、其の時に於て増加の絶頂に達する。減水は漸次に行は



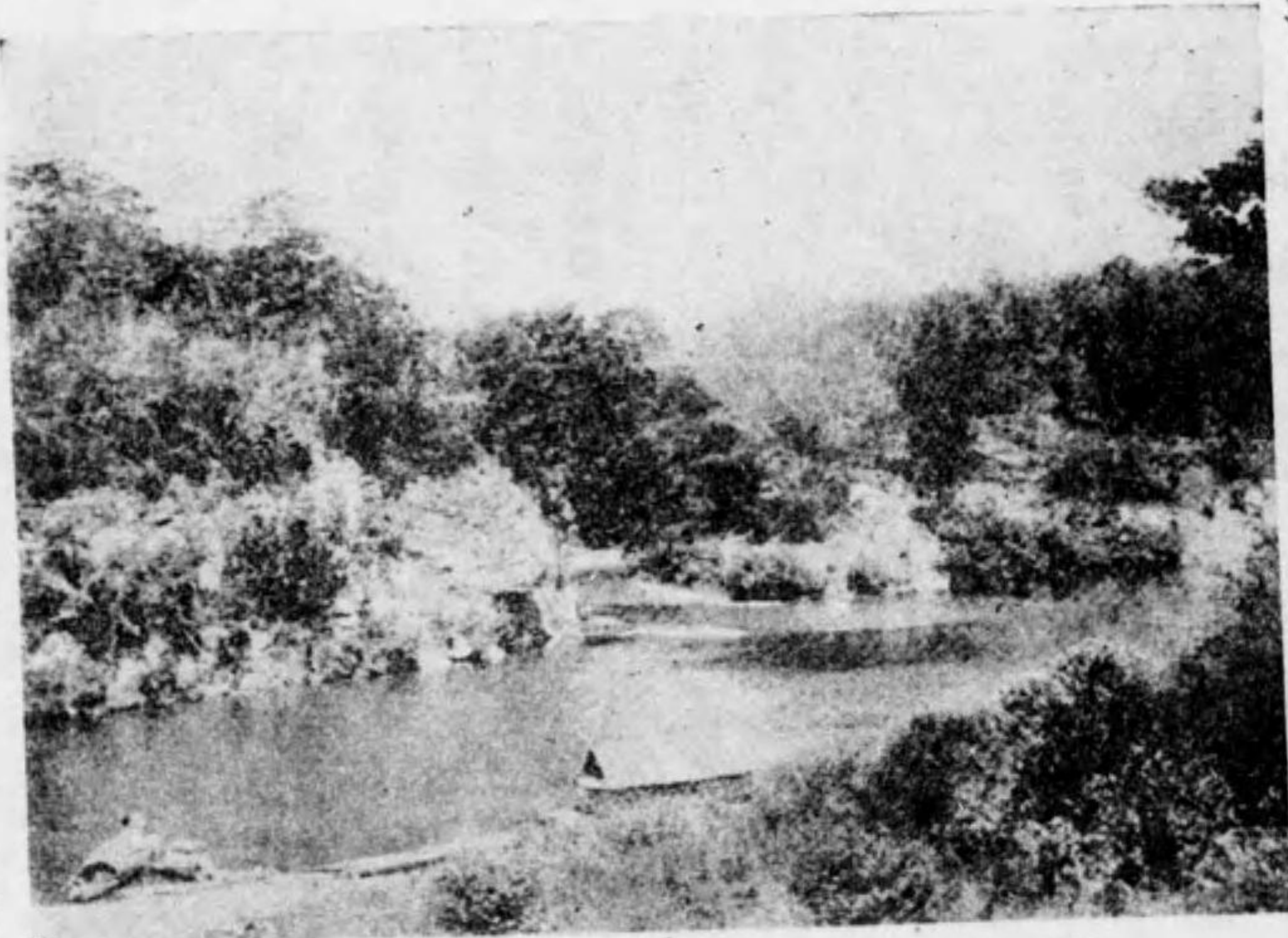
第二十圖 イヤチ・ダンバ・ン附近のサバク河

の勢力は或程度まで減殺せられるが、乾期になると海水は遙か内陸まで進入する。而して其の場合に於ては、水量の増加し始むるのは五月で、十月まで次第に其の分量を増し、其の時に於て増加の絶頂に達する。減水は漸次に行はれ四月に於て低水の極點に達す。突然の出水、氾濫といふことは、メナム・チャオ・ブイヤに於ては見ない所である。河口より約五十哩の地點までは甚だしく潮流の影響を受ける。然し、其の潮流は河底を一様に浚渫し深くする効果を持つてゐる。洪水期に於ては、水量水勢が多いため、海水

於ては、下流の水は黒色を帯び飲用には供せられなくなる。

バン・バコン河は盤谷の東方にあるブラーチム州に流れてゐる。此の河は、源を新に協定された暹羅の國境に近き山に發し、始め北に流れ、次に西下し、最後に南流し、完全に近き半圓を形作り、暹羅灣の東北隅に向つて注いでゐる。此の河は、延長約百二十哩で、最後の五十哩は屈曲甚だ多く、低平にして豊饒なる米作地を通つて流れてゐる。上流地方にはワッタナー(Watana)、クラビン(Krabin)と稱する二つの金鑛があり、下流には富裕なるブラーチム(Prachin)、ペトウリウ(Petouliu)等の町がある。水源地から約五十哩の間に於て、同地の重なる支流と見らるべきものは、ナコン・ナーヨク河(Nakon Nayok)で、此の支流は、同一名の一小縣に於ける水を集め母流に注いでゐる。他の支流中、特記すべきは、チャンタブーンの背後なるバタト山脈の背面に其の源を發し、北に向つて流れてゐるサイ・チェン河(Sai Cheng)、北方のブノム・ダン・レク山脈に發源するタバ・ン・ヒン(Taphan Hin)サイ・ヤイ(Sai Yai)の兩河、母河に依て圍繞せらるる地方に灌水し、遂に母河左岸の諸點に於て是れに合流する數本の小流である。メナム・チャオ・ブイヤと同じく、バン・バコンもずつと上流の方まで潮水干満の影響を蒙る。然し、バン・バコンは、前者と異なり、突如出水し、頻々として附近數哩の平地に氾濫する。ペトウリウまでは、航海汽船を行ることが出來、小舟、小蒸汽船ならばブラーチムまで走らせることが出来る。

次は、メクロン河 (Mekong) である。此の河は、西部國境山脈と、其の山脈に屬する東方山麓諸丘との中間に横はれる長谷に流れてゐる。少しく東に寄りつゝ南に流れ、暹羅灣の西北隅に於て海に注いでゐる。河口から約百哩位上流の地點までは、該河は二つの支流からなつてゐる。東の支流はラヘンから遠くない地點に發源し、未開にして殆んど人跡を止めない地方を流れてゐるに反し、西方の支流は、有名なるスリー・バゴードス (三つの西の支流共殆んど眞直であるが、流れが狭く、速く、僅かに小舟の航行に適するのみである。曳



圖三十第 景光の流上イノ・ワグ流支の河ンロクメ

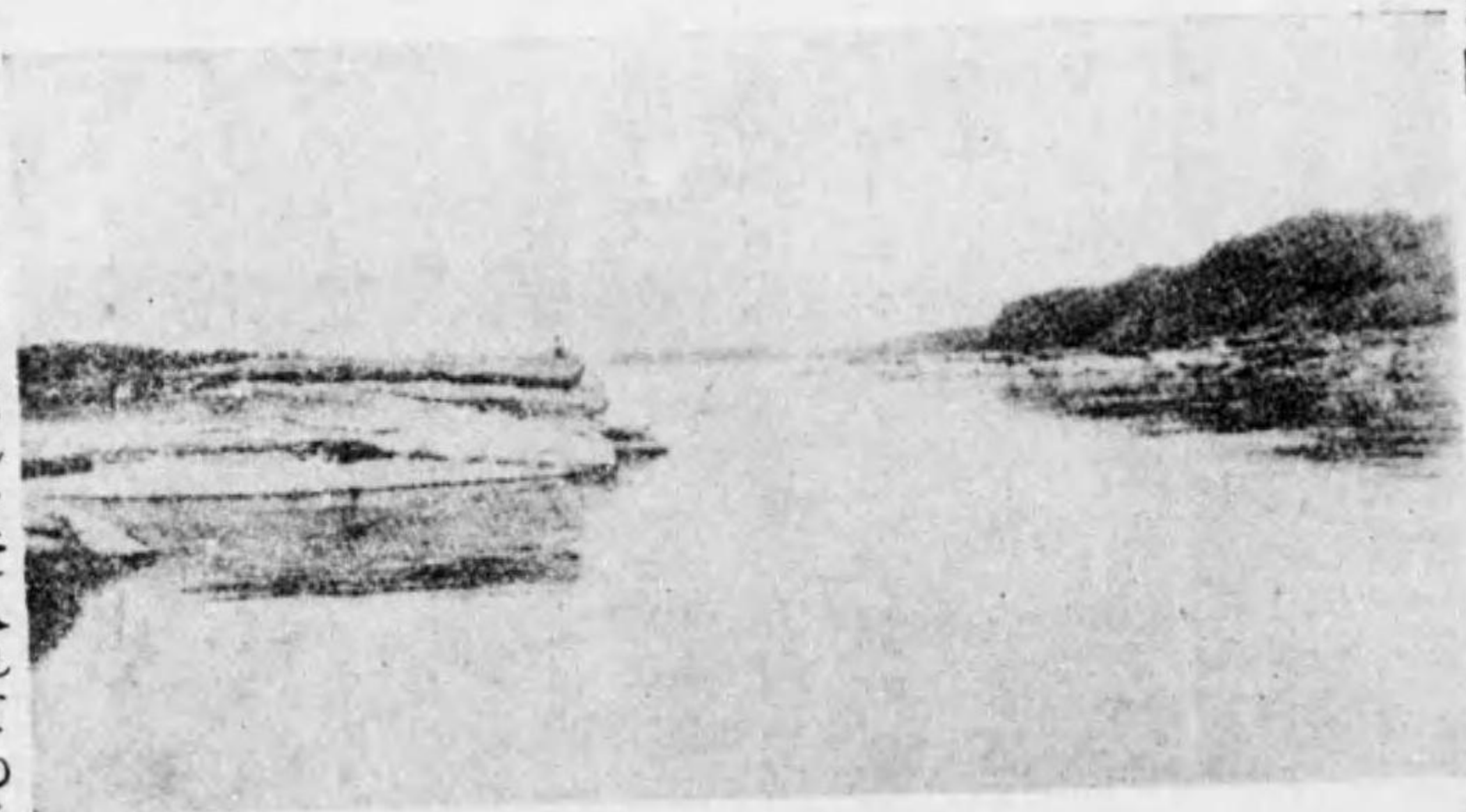
堂塔)の附近なる緬甸の國境に其の源を發し、到る處舊市の廢墟を見る地方で、今日開化せるカリエン人 (Kien Hien) 部落の存する所を通つて流れてゐる。東方の支流はクワー・ヤイ (Kwa Noi) 大河の意)と稱せられ、西方の支流はクワー・ノイ (Kwa Noi 小河の意)と稱へられてゐる。東

汽船、米船等は淺底のものですら合流點以上に溯航することが出来ない。メクロン河の下流にはカムブリー (Kamburi)、ラーヂブリー、サムト・ソーンクラム (Samut Songkhram) 等の町があり、此等町の間には、河の兩岸に沿うて多數の人口を擁する村落が數多存在する。該河の河底には、綺麗な黄色の砂が敷かれ、透明な水が其の上を流れてゐる。メナム・チャオ・ブイヤの、柔かい灰色の泥土を流してゐるのは全く選を異にしてゐる。メクロン河は、短時間急に氾濫することがある。而して傾斜が急であるがため、潮水の干満に影響せられることは少ない。

上記バン・バコン及びメクロンの兩河は、並行せる一聯の運河に依てメナム・チャオ・ブイヤ河に連結せられてゐる。此等の運河は、兩河の河流とは直角の方向に、暹羅の中央平原を横切つて設けられてゐる。運河は、何れバーシ・チャローエン (Pasi Charoen 繁昌する收入の意)、ダムネウン・サンダク (Damneun Sandak 氣持善き王の道の意)等の名に依て分る通り、首府と接近し難き地方の町村とを連結するために設けられたもので、砂利を得ることが出来ず、且つ斷えず洪水に侵さるゝため道路を敷設すること容易ならざる暹羅に於ては、今日に於てですら、便利なる交通機關となつてゐる。主運河は、何れも過去百五十年間に開掘せられ、中には時代の経過と共に、沈泥のため淺くなつたものもあるが、最近新に開鑿浚渫せられ、必要な部分には水閘が設けらるゝに至つた。

次はメナム・コーン・カ (Me Nam Kong Ka) である。此の河は一名バンドン河といふ。バンドン河

は、南部暹羅第一の大河である。海を距ること遠くない、ナコン・スリー・タムマラートのチャワン山 (Jawang Hills) に其の源を發し少し西に傾きつゝ南に流れ、其れから西に轉じて大なる半圓を描き、チャイヤー地方を通じて北に流れ、最後に東に轉向してバンドン灣に注いでゐる。該河は其の大部分の流れを通じて砂堤を有すれども、河口から約五十哩は小舟の航行に適してゐる。上流は淺く、流れ急であるが、下流は深く流れ緩慢である。從て河口から約十哩の地點までは潮の干満に影響せられる。バン



圖四十第 河ンコーメ

め、に重要である。此の河は又、ナム・ムーン河の流れを受入れてゐるといふ意味合に於て注意する價値がある。該河には多くの支流があるけれども特記する價値あるものは一もない。メーコーン河、既に説明したる通り、メーコーン河は、暹羅の領域中のどの部分も通過してゐない。然し國境の一部を形成するがた

値がある。ナム・ムーン河は、多くの支流を有し、東部暹羅の全部を其の排水區域とする程の大河である。メーコーン河の河畔にある部落としては、近代的特色を帯べるナウン・カイ (Nawang Kai)、チェン・ローン (Chiang Khong) といふ小さな町だけが興味を持つて見られる。メーコーンは、水量豊富、深度大なる壯大なる河であるが、多くの急流が所々に挿まれてゐるがために、航行頗る不便である。佛領印度支那政府は此等の難所を除去するため、種々施設したけれども、



圖五十第 ナム・ムーン河及メーコーン河合流地點の近附

見るに足る効果を收むることが出来なかつた。今日吾々は、メーコーンを以て商業上有利なる交通機關と認むる譯には行かぬ。ナム・ムーン河は、コーラート附近の高臺に其の源を發し、長さ三百哩餘、東部暹羅の盆地を通じ北緯十五度二十分の地點に於てメーコーン河に注いでゐる。メーコーン河との合流點は、同河の右岸を迂回せる諸低丘間に於ける空隙に依て形作られてゐる。ナム・ムーンは多くの支流を

有し、就中ナム・シー河は延長頗る大である。此の河は、全系統を通じて、雨期中屢々洪水に見舞はれる。而して乾期に於ては、諸支流の出口に急流が出来るため、口元が封せられた様な形で、中に

溯航することは不可能であるから、全體が、交通機關としての價値に乏しい。
以上列記せるものゝ外、暹羅に於て稍々記載するに足る河は、メーコーン河の北の支流たるナム・コー(Nam Koh)、ナム・イン(Nam Ing)の二河である。南部暹羅に於けるバタニー河も一瞥の價値がある。該河は、廣く、淺く、流れ速く、長さ約百二十哩で、バタニー州を構成せる七小國の排水をなしてゐる。景色絶佳にして、人口稍々稠密なる地方を通つて流れ、流底には砂金を藏するとの噂がある。潮水の干満に影響せられることが殆んどない。

(二) 湖 沼

暹羅には湖沼が少ない。ソククラの内海を湖水中に入れないとすれば、殘餘の湖水は、何れも小さく、經濟的價値に乏しい。東部暹羅の北方には面積大にして、一年の或時期には全く乾涸してゐるか、然らずんば殆んど乾涸せる二、三の淺い湖水がある。此等の湖水は、一年中の他の時期には、蘆を以て充され、無数のペリカン其の他の水禽が嬉々として其の中に遊ぶスウォムプとなる。此等の湖水中最も能く知られてゐるのは、ラマラート(Ramarat)村の附近にあり、メーコーン河とは、ナム・クン(Nam Kun)と稱する短かい流れに依て接續されてゐるナウン・ハン(Nawang Han)湖である。北部暹

羅には、チェン・ライ(Cheng Rai)から餘り遠くない所に、高山の中間に挟まれ、ナム・イン河に依て排水されてゐる一小湖水地方がある。此等の湖水中最大なる者は、長さ三哩幅一哩である。該湖水地方は、稍、滋味のある美觀を具有してゐるが、住民の數は非常に少ない。西部山脈の麓に在るチャングルで、人間の餘り出入しないウタイ・ターニー(Uai Tai)及びラーヂブリーの西に數箇の小湖水がある。

(ホ) 都 會

暹羅語には、英語のタウン(町)に恰度能く當嵌る言葉がない。人間の住居に對してのみ、又人間の居住地ならば色々の大きなものに對して用ひられ得る暹羅語は、バーン(Ban)といふ語のみで、此の語は英語の Village の昔しの意味と同じく、一軒又は其れ以上の住居の集合に對して用ひられ得る。勿論、バーンの外に、形が大きいとか、或は其の他特別の理由で、普通バーンと稱せられるものよりは、遙かに重要な人間の居住地に對して附せられた特殊な名目はある。此等特殊な名目の中、最も重なるものはホア・ムアン(Hor Muang)、簡略してムアンと稱せらるゝもので、是れは一縣の首都會又は中心地を意味する。次にナコン(Nakon)といふ語がある。是れは、サンスクリット又はバリ語のナガラ(Nagara)から出たもので Country を意味する。次にウキエン(Wiang)といふ語がある。是れはラオ人の語で、城砦のある場所を意味する。次にクルン(Krungs)といふ語がある。是れは首都を意味する。此等の語を以て示されてゐる居住地は、クルンといふ語を冠せるものゝ外は、大きな場所

もあるが、小さな問題にならない所もある。小さな場所であり乍ら、尙ほ此等の語を以て冠せられる所以のものは、嘗て偉大なる勢力を其の地方に操つてゐたといふやうな歴史的因縁があるから、又は近年になつてから行政上の中心地となつたからである。兎に角此等の語だけでは、居住地の大小輕重を判斷することは出来ない。現にバーンと呼ばれてゐる所で、相當人口を持つてゐる場所がある。であるから、暹羅に於ては、どれが町タウンであり、どれが村ヴィレッジであるかといふことを、はつきり定めることが餘程むづかしい。英語の辭書では普通町は村よりも大きい場所柄であり、村は町よりは小さな處であるといふ風に定義してゐるので、右の區別は益々困難になつて來る。若し人口一千以下の居住地を町でないとすれば、暹羅に於て町と稱し得べきものは、一打の半分もないであらう。これに反し、市場の有無を以て、町であるか否かを決する標準であるとするならば、暹羅には村と同數位多數の町があることになる。

其れは兎に角、盤谷が暹羅の首都であることに就ては、一點の疑ひを容れぬ。何となれば、盤谷は、前述の意味に於ける町であるのは勿論のこと、後印度に於ける最大の都會で、人口三十五萬有餘を持つてゐる。該市はメナム・チャオ・ピヤの河口から二十哩内外の所で其の兩岸に跨り、約十五平方哩の土地を占領してゐる。首府の人口の其の國の人口に對する割合の大なること盤谷の如きは、世界諸國に於ては、倫敦を外にしては例のない所で、盤谷の人口は、暹羅全體の人口の七・五〇とな

つてゐるのである。最近數年前迄、盤谷の町は暹羅全體の精力と成分とを一身に汲收し、町の施設を完備し、是れを美化するため、地方からの貢租を集め、此處に住める貴族の家庭又は陸海軍の兵舎を充實するために、全國の優良なる青年農民を狩り集めながら、過去百二、三十年間次第に發達し來つた、大なる人間の溜りに過ぎなかつたのである。斯の如き盤谷の状態は、今日は勿論一變してゐる。即ち、奴隸制度の廢止と共に、貴族等は、地方から狩り集め家庭の用に使役した農民の大部分を解放すると共に、國の精銳を汲收した徴兵の制度に一大改良を加へ、盤谷中心主義を捨て、或程度の地方分權を行つた。殊に、最近行はれた鐵道の擴張工事は、僻遠の地をば、暹羅人の眼に、以前には夢想だもせられざりし程重要なものとし、所謂上流階級たる官吏社會をして、盤谷のみが生活に適するの地といふ觀念を一掃せしむるに至らしめんとしつゝある。然るに拘はらず、現今に於ては、盤谷は全暹羅に對し總ての點に於て壓倒的の勢力を有し、暹羅に來る旅行者は勿論、盤谷に居住する土人外國人まで、暹羅で値打のある所は盤谷の外にないと信じてゐる。

一七六九年以前、盤谷は、取るに足らざる一小村落に過ぎずして、此處には、昔日の首府アユタイアに達する水道を警戒するために一城砦が設けられてゐるに過ぎなかつた。右の年か其の前後に此の一小部落が、緬甸人の手から暹羅を恢復する軍事的行動の本陣として利用せられた。其の時以來盤谷は長足の進歩を遂げ、國內に於ける最大の都會となり、改造國家に於ける政治の中心地たるに

至つた。ラー一世陛下(Somdet Phra Putayod Fa)は、一七八二年確定的に盤谷に居を定め、此處に居つて政を見ることにせられた。此の年より以來、暹羅の天朝と盤谷とは、全く同身一體の如き觀あり、盤谷の繁榮は又同時に王朝の繁榮であるといふが如き因果的關係を保ち、非常なる發展を遂げ、暹羅に於けるあらゆる舊都をして後に瞠若たらしめ、未だ嘗て見たることなき大都會たるに至つた。

以前盤谷市は、河(メナム・チャオ・ピヤカ)譯



第六十圖 盤谷の運河

其の周圍に或計畫の下に開掘せられた多數の運河の上、又其の附近に建設された。家屋は水流の側に繫留しある平底船の上、又は土手に打込んだ長い棒杭の上に建築された。宮殿の敷地は、河の東岸に於ける一大屈曲點に定められ、其の周圍に於ける最良の敷地は、寺院堂塔等のために使用されてゐる。此等寺院堂塔は、

入念の設計の下に多くは煉瓦を以て構築され、輪奐の美見るべきものが多い。一般住宅は、頗る貧弱な材料を以て建築せられ、屋根は草葺であつた。皇族其の他貴族の邸宅は、一般に堅固な材料、例へばチーク材等を用ひ、複雑なる彫刻を施せるものすら往々にして見受けられる。此等の家屋は、葺くに瓦を以てしてある。以前に



第七十圖 盤谷の水路

は、道路といふものがなく、交通は總て水路に依て行はれた。然し、道路の必要は夙に識者に認められ一八八〇年頃約五哩の延長を有する道路が敷設せられ、宮廷の附近と、市の方の東岸に場所を占めてゐる商館、外國領事館、歐洲人住宅地等とを連結するに至つた。其れ以來政府は、道路の建設——建設は最初に徐々に、後には急速に行はれた——に意を用ひ、其の

結果として、今日では、一定の計畫の下に立派に敷設された百哩内外の道路があつて、數百千の地點に於て運河を横切り、煉瓦造りの家屋が其の兩側を縁取つてゐる有様である。此等煉瓦造りの家屋に住んでゐる者は、嘗ては見すばらしい河堤の居住者であつたのである。街道は一般に良く、砂利又は敷石を以て敷詰められ、大體に於て清潔に保たれてゐる。皇族の眼に觸れるから、と



第十圖 盤谷市に於ける新道

景を添へた昔の城砦も近來取壊され、城門は交通を便利ならしむるため取除かれた。城壁は全部破

いふ意味で、宮殿附近の道路が一番に整然と清潔にしてゐる。道路には、あらゆる種類の交通運輸機關、例へば人力車、馬車、自動車があつて織るが如くに往來してゐる。今日でも、草葺にせる家屋の列が、此處彼處に散見せられ、又河及び其の支流の岸邊には、少數の浮家屋が見受けられる。然し此等は勿論最近消滅すべき運命に在る。一種の光

壊され、砂利に利用せられた。久しからざる將來に於て、盤谷は煉瓦家屋の町、樹木の町となるであらう。盤谷の樹木の青緑は、優美なる尖塔、寺院、官衙等の美しい屋根と相俟つて、吾人が往々にして歐洲の市街に見るが如き單調なる景色を破るものである。

盤谷市の北に、數年前一大公園が設けられ、其の中心に、先帝陛下は時々行つて田園生活を樂しむことが

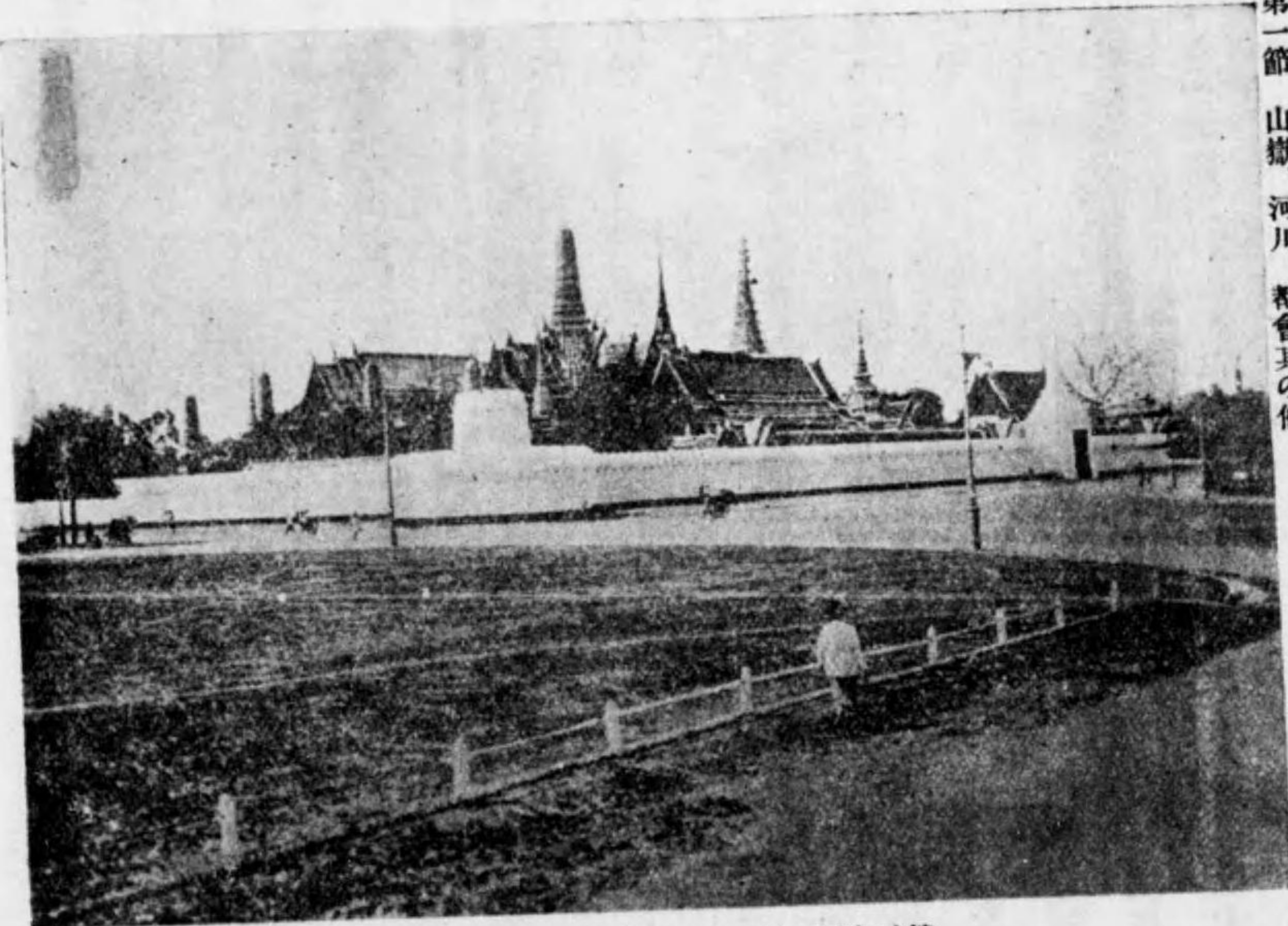


第十圖 第五世紀紀念碑及び謁見館(シッド公園に於ける)

くの美麗なる建築を有する一大構園になつてしまつた。宮人等も今日では大體に於てこれ等の家屋

に住むやうになり、

宏壯なる謁見所も此處に設けられた。而して有力なる皇族貴族等は謁見所を遙か遠方に取巻いて、美麗なるヴィラを建築してゐる。幅二百呎延長約二哩の竝木廣小路が、大理石の橋に依て、三つの運河を横切り乍らドゥシト宮殿と市内に於けるグラランド・パレースを連結するため



第十二圖 マダラド・レーン構造圖

に設けられてゐる。グラランド・パレースは、精巧なる螺旋狀屋根の迷宮ともいふべき一大構築で、鏤められたる金銀は燦然として八方に輝き、高く城構へある城壁の上に聳え、周圍には青々たる芝生を繞らし、威嚴ある列樹路、白色の道路、宏壯なる寺院、高塔、官衙其の附近に錯綜し、東洋に於

ける最も驚異すべき美觀の一を形作つてゐるのである。

歐羅巴人の居留地は、市の南及び南東方に在る。此處には多くの領事館があつて、目下改築中のものもあれば、既に改築されてゐるものもある。此等領事館の多くは公使館に昇格された。主なる街路には街路樹が植付けられ、電車が其の中を走つてゐる。而して全市に互つて電燈の設備がある。

良好なる飲料水の缺乏といふことが、盤谷に於ては、年中斷え間なき脅威であつた。以前同市が非衛生的だといふ悪評を受けたのは、主として是れに基いてゐたのであつた。然るに最近現代的の給水設備が出来、全く成功したので、衛生状態は著しく改善せられ、右に述べた如き脅威は、殆んど全く取除かるゝに至つた。

市の直下に當る河區が盤谷港である。港には、多くの汽船、帆船、舢舨等が、河の兩岸に立てゐる多くの精米所の煙に半ば隠され乍ら碇泊してゐる。

舊都の城壁の南側外にあり、サム・ペン (Sam Peng) と呼ばるゝ所は、盤谷名所の一である。此處は支那人の居留區域である。此處の支那人は、或古い支那町の一部分に酷似するやうに此の町を造つた。大小形状悉く異なる多くの家屋が、出來得る限り接近して建て込まれてゐる。而してごく最近までは、街路といふのは全く路次に等しく、幅員僅か十二呎以下のものも屢々ある位で、其の

間に大勢の人々が朝晝の差別なく右往左往してゐる。外國人の夜間此の地區に這入る者は生命財産の危険を覺悟してゐる必要があつた。殆んどあらゆる家が何等かの商賣をやつて居り、驚くべく大なる取引が、雜然と非衛生的な生活をしてゐる多くの住民に依て行はれてゐる。最近年に幅廣い街路が、此の區域の眞只中を通じて設けられ、住民を警察的に衛生的に取締る方法が攻究せられた。然るにも拘はらず、衛生、保安の状態は決して満足すべき状態でなく、以前より



第二十二圖 イマ・ンエチに於ける古城及び濠

は遙かに良くなつたとは言へ、盤谷市行政の一大弱點となつてゐる。

盤谷市に次で記載せねばならぬのはチエン・マイである。チエン・マイは北部暹羅に在り、人口戸數の點から言つて盤谷市の次に位する。該市はメナム・チャオ・ブイヤの北方支流の一たるメピン河の右岸、海拔八百呎の高所、北緯十八度四十六分、東經九十九度

零分に在る。チエン・マイは紀元十一世に、一小ヲオ人國の首都として創設され、其の後近隣諸侯國は是れがために征服され、其の結果として、甚だ締りはないが一種の王國の首都たるまでに立至つた。中世紀並びに近世紀の大部分を經、十九世紀の初頭に至るまで、チエン・マイは貧弱なる一王國の首府として最も困難なる位置に置かれ、榮枯盛衰を經驗した。即ち兩隣りの



第二十二圖 北部暹羅に於ける煉瓦造防禦工事

緬甸、暹羅は該王國を以て、己の附庸國なりとし、常に兵力に訴へて自家の主張を貫徹せんとした。市は、三方面共、重厚なる城壁とラムバート（今日は大分破損してゐるが）とに依て圍繞せられ、一平方哩以上の圍郭を有し、其の中に世襲の國王（チャオ（Chao）と稱す）の御殿と、重なる家臣の邸宅と、數多の寺院とかある。今日チエン・マイは

北部總監の駐在所、暹羅陸軍の屯所である。現在人口は約三萬、主としてヲオ人からなり、此等は

良く出来た街路又は河の兩側にある清潔なる家屋に住居してゐる。飲料水は、附近の山から得られ町を圍繞せる濠、市内を貫通する水路は、此の山水を引くことになつてゐる。河（メピンを指すか一譯者）には二本の橋が架せられてゐる。其の中新しい方は立派なる構造を有する。外國人としては、米國長老派宣教師、チーク材の取引に従事する二、三の歐洲人商館の館員が其の重なるもので、別に、北部暹羅ラオ人諸邦の全部を管轄區域とする英、佛兩國の領事が此の地に滞在する。緬甸の商人で、木材、其の他一般商品の取引に従事してゐる者も少數此の地に居住してゐる。歐洲人で、鐵道、醫事、山林、測量等に従事する技術者、憲兵將校として政府に聘用せられてゐる者もある。河の東側には、米人宣教師の住宅、陸軍營舎、競馬場、ボロー・ゲームのグラウンド等がある。

次はブケットとである。此の町は別名をトゥン・カー (Tung Kahl) カーはラン草で、トゥンカーはラン草の原を意味するといふ。歐羅巴人は間違つて發音しトンカ (Tonka) と言つてゐる。南部暹羅の西岸に在るタラン島 (チャンク・セイロン島ともいふ) の南東隅に位し、正確なる位置は、北緯七度十分東徑九十八度二十四分である。此の地は多量の錫を埋藏するので昔から近隣に知れ渡り、印度海岸地方からは、二千年前此の地に植民して採錫に従事し、此の町を開いた。其の後八、九百年亞刺比亞商人の一隊が來つて錫事業に従事したことは既に述べた通りである。十五世紀に、支那の商人が同地の錫鑛業に注意を拂ふやうになり、其の結果支那人鑛夫の部落が此處に出来、今日に及んで

ゐる。但し今日のトゥン・カーは、昔日の夫れとは全然別の物である。今日の町は、昔の町が十九世紀の始に緬甸人に依て破壊せられた後、タルア (Ta Ru) と言つた昔の町跡に建てられたもので、年代が比較的に新しく、昔のに較べて新式である。トゥン・カーは、ブケット州總督の所在地ではあるが、地の下及び其の周圍に多量の錫を埋藏してゐるといふこと以外に大した取柄はない。人口は約三萬で、主として支那人からなつてゐる。錫鑛業に従事してゐる歐洲人も少數ある。濠洲の一會社が最近町に近い海底から採錫することを始め、大なる利益を收めつゝある。他に同様の目論見をしてゐる者が二十三ある。トゥン・カーは、良好なる計畫の下に建設され、締りのある町である。英國の副領事館と印度チャータード・バンク (Chartered Bank of India) とが此の地に存在する。

次はアユティア。從來、俗にクルン・カオと言はれた處で、メナム・チャオ・プィヤの東の支流上に立ち、北緯十四度二十一分、東經百度三十二分に位置を占めてゐる。河は、此の附近に於て分裂して小浦、沼澤のネット・ウォークを形作り、其の真中に島がある。これが暹羅の歴史に於て其の名高きアユティアの所在地で、今日でも寺院、堂塔、宮殿の廢墟があつて、昔日の盛觀を偲ばせる。アユティアに關する最古の記録を見ると、此の町はドゥヴァラプリー又はドゥヴァラヴァティ (Dvarapuri, Dvārāvati Dvaravuti) と稱へられ、紀元四六九年から同六百五十年頃まで存在せる一小國の首都であつた。其の後此の町は、七世紀の始め頃から、引續き起つた政治上の激變に遭遇して消滅し、一一八九年

頃、再び舞臺の表面に現はれ、ノン・サノ (Nong Sano) 又はノン・サルナオ (Non Sarnao) として知られてゐた。亞刺比亞人旅行者及び有名なる馬來史記 (Malay Annals) の編者には、シャル・イ・ナオ (Shahr-i-Nao) 或はシャハー・アル・ナウイ (Shahr-al-Nau'i) として知られ、中南部暹羅の全部を包括する國の首府として記録されてゐる。其の當時のノン・サノは全盛を極めたものらしいが、再度凋落して全く見る影もなくなり、一三五〇年に至り、遂にアユティアに依て其の位置を奪はるゝに至つた。然るにも拘はらず、ドゥヅアラヴァアティといふ舊名は、町の榮枯盛衰に關係なく人口に膾炙してゐたものと見え、繰返し歴史に依て使用されてゐる。例へばサイムズ (Syms) の如きは「一七九五年アバへの特派使節に關する物語 Account of an Embassy to Ava in 1795」中に於て、暹羅の首都たるべきアユティアが、當時の緬甸人にはドゥヅアラヴァアティ (緬甸人の呼んでゐる名前は外にもあつたが) として知られてゐたことを記してゐる。アユティアは、紀元一五五五年と一七六五年の二回に於て、緬甸人に依て破壊され、殊に一七六五年以後は、同地方の首府ではなくなつた。現在のアユシアは、主として昔の小浦の土手、或は平底船の上に密集し、極めて貧弱粗末なる材料を以て建てられた家屋から成立つてゐる。アユティア州の總督が此の地に駐在し、別に近傍の廢墟から收集された考古學的價値に富める古文物の遺物を多數に備へたる博物館がある。官衙、病院、監獄、市場、停車場等は、此の町としては相當大規模な建築物である。數哩の良好なる道路が最近敷設されたが

交通は尙ほ大部分水に依て行はれてゐる。アユティアと、四十二哩離れた盤谷との間には、河と鐵道の連絡がある。而して兩者間には是れに依て可成り大數量の取引が行はれてゐる。人口約一萬二千、大部分は農業に従事してゐるが、小賣商人も少なくない。新編制の結果、アユティアには、陸軍の一部隊が駐屯せしめらるゝことになつた。

次はチャ・チェルン・サオ

(Cha Chheng Sao) トウツウ



家浮るけ於にアイテユア 圖三十二第

ともいふ)。バン・バコン河畔にあり、盤谷とは鐵道に依て連絡せる前途有望なる町である。地味豊かなる地方の中央に位置を占め、米の取引日に盛んに、最近數年間に數箇の精米所が同地に設立された。人口約六千、主として暹羅人からなつてゐる。但し、支那人の血液を多分に混じてゐる。

次はチャンタブー

ン。チャンタブーンは、

暹羅の東南端を距ること遠からざる所に注ぐチャンタブーンといふ河の口元から數哩上流にあるさ
さやかな町で、古く且つ歴史的に由緒ある所なれども、最近は佛蘭西が、佛領の國境を脅かされて
るといふ假定の下に、一八九三年から一九〇五年まで守備兵を駐屯せしめたので寧ろ有名である。

チャンタブーンは、商業の一小中心地で、胡椒の取引は稍々旺んに行はれてゐる。尙ほ内陸方面に
ある寶石の産地に對しては、其の輸出港の役を勤めてゐる。然し、内陸の寶石産地は、領土變更の
結果、今は大部分佛國の保護領たる柬埔寨の境内に組込まれてゐる。住民は雜多なる種族からなつて
ゐる。曾て大規模の迫害が、安南の基督教徒に對して試みられた際、遁れて此の地方に來た亡命者
の子孫が、今日も羅馬加特力教の信者として多數同地に在住してゐる。其の外寶石の鑛山に惹付け
られて來たシャン人緬甸人が多數同地に居住する。佛領の境界を越えて來た多數の柬埔寨人も其の
地に棲住してゐる。チャンタブーンは、行政上獨立の州で、州廳の所在地である。

次はコーラート。暹羅に於ける最古の鐵道線路たる東北線は、現在コーラートを終點としてゐる。
東部暹羅に於ける城壁を有する舊都で、盤谷からの距離は百六十四哩である。住民は一二、〇〇〇人
で、暹羅人、東部ラオ人、柬埔寨人からなつてゐる。コーラートの公の名前は、ナコン・ラーチャ・シマ
ー (Nakon Rajasima 國境地の意) で、昔暹羅と柬埔寨との中間に位し、以前には大體に於て柬埔寨の
勢力下にあつた。唯、隣邦の騷亂に乗じ、一時的に獨立を贏ち得たこともある。然し、盤谷が暹羅の王

都として確立せられたのと相前後して、完全に暹羅に征服せられ、暹羅に編入せられて今日に及んで
ゐる。現在では、コーラート州廳、陸軍の部隊、佛國副領事等の所在地として知られ、絹絲工業の中
心地として多少重きをなしてゐる。盤谷との間に於ける家畜類の取引は、漸次發達の趨勢にある。

次はウボン。中心を離れた東部暹羅に在り、交通が不便である關係上、都會としての價值並に人口
は相當あるに拘はらず、外部には餘り認められてゐない。ウボンは、ナム・ムーン河がメーコン河に
注げる所から大約三十哩上流の地點に在り、七千の人口を有する。住民の大部分は東部ラオ族に屬す
る。一年中三箇月間は、小蒸汽船がメーコン河とコーラートの方面からウボンに來航する。其れ以
外の月に於て、コーラートと連絡を取らうと思へば、約二百四十哩なる粗造な車道に依るの外はな
い。其れにも拘はらず、ウボンは地方的の取引が割合に盛んで、店舗には、主としてコーラート經
由盤谷から輸入せられた外國製綿布、金物類等のストックが澤山に並べられてゐる。ウボンとコー
ラートとの間には最近に鐵道が敷設さるゝ計畫である。ウボンは、州廳の所在地で、此處には一箇
部隊の陸軍と佛國の副領事とが駐在する。別に、ラオ人間に布教するため古くから這入り込んで
も多數見受けられる。町には、古い城壁もなければ記念塔の如きものもない。全體として歴史的に
は價値に乏しい所である。

北部暹羅中の小都會中、ピットサヌロークは歴史的由緒ある町で、兼て州廳、兵營の所在地として此の地方に於ては重きをなしてゐる。農業地の中心としても亦一廳の價值がある。メピン河上に於けるラヘンは、木材の溜りであり、且つ暹緬兩國間に於ける道路の出發點として知られてゐる。

パークナムポーは、北部暹羅に於ける大河の合流點にあり、鐵道の終點が同地にあつた間は、相當重要視せられてゐたが、線路が北方に延長されてから、段々に都會として價值を失ひつゝある。

アン・トーン (Ang Tong)、サラブリーは、共に中部暹羅に於ける小さな町で、前者は米、後者は東部暹羅から來る畜類及び其の他の物産の取引を相當行つてゐる。ブラバタム (Phrapatum) — 此の町は最近の勅令でナコン・パトム (Nakon Patom) と改稱せられた — ラーチャブリー (時にラーチャブリー — Rajaburi と稱へらるゝことあり) は、共に中部暹羅の南西に位し、興味ある過去の歴史、現今の活躍とで一顧の値打がある。ブラバタムは、國王の愛好せる別荘の所在地である。

南部暹羅の東海岸では、ナコン・スリー・タムマラート (時にラコンと呼ぶ)、ソンクララー、バタニーが稍々注意すべき町である。ナコン・スリー・タムマラートは、ラコンを多分支那流に轉訛せるリゴア (Ligore) を其の儘受入れ、歐洲人は是れをリゴアと呼んでゐる。暹羅王國の附庸國として一時大に勢力を揮つた國の首都として、歴史的に重要視すべき城壁に圍まれた舊都會である。ナコン・スリー・タムマラートは、其の長い歴史中に於て色々の浮沈はあつたが、殊に英國が彼南の植民地を造る

際に於ける其の (ナコン・スリー・タムマラートを指す) 斷末魔に於ては、是れに關聯して面白い役割を勤めてゐる。次にソンクララーは、馬來人に依てシンゴラ (Singgora) と稱呼せられ、歐羅人も亦シンゴラと呼んでゐるが、元支那海賊に依て創設せられたる所である。然るにこれ等海賊竝に其の子孫は、同地に定著し、平和なる商人になつてしまつた。所が、彼等は、此度は却て他の海賊の攻撃を受くることになつた。そこで彼等は、遂に其の地に城砦を築き、其の中に立籠つて是れを一箇の殷賑なる町とした。海賊の攻撃もたちろぎ、支那人が隨意に同地に働らき得るやうになつてから、同地の支那人頭目は暹羅の皇室よりしてラーチャー (Lachao) として認めらるゝに至つた。該ラーチャーの子孫は、今國家から恩給を得てゐる。ソンクララーには、南部諸地區を管轄する暹羅人總監が駐在する。此處には半島縦貫鐵道支線の終點があり、米其他物産の取引が活潑に行はれてゐる。町は大なる湖水 (内海ともいふ可) の入口に於て頗る景勝の地を占めてゐる。該湖水は町の名前にちなんでソンクララー (シンゴラ) と呼ばれてゐる。町は大きく、其の結構は誠に便利に出來てゐる。然し、此の町には、特記すべき建築とか歴史的紀念物といふものがない。街路には、砂利が綺麗に敷詰められてゐるが、此の砂利は、嘗て海賊を防禦する爲に築造した砦の石を破壊して作つたものである。人口は約五千である。バタニーは、馬來半島の東部沿岸に於て記載洩れになつてゐる、馬來人の居住する唯一の州の首都である。人口は約六千、バタニーの特長は、今日は沈泥で幾分閉塞されてゐるが、良好なる碇泊所を有す

る點にある。其れがため十六、七世紀に於て、通商のため東洋に來た歐羅巴の商人は、頻繁に此の地を訪れた。十六、七世紀中、葡萄牙人、英人、蘭人は其處に商館を設けた。バターニーには、現に州廳を置いてゐる。

スコータイ(Sukhothai)、サワンカロク(Sawankhalok)、カムペンペット(Kampongpet)、ナコン・サワン、スパンブリー(Spanburi)、ロブブリー、チャイヤ(Chaiya)は、何れも昔首府のあつた暹羅の都で、城砦を持つてゐるが、歴史的考古學的興味を有するに止まり、近代の都會としては何等の價値を持つて居らぬ。

第三節 氣候及び氣象

(イ) 氣 温

暹羅は、どこもどこも、北部熱帶の圈内にあるけれども、其の温度は、特殊なる地方的事情に依て影響されてゐる。従て、地方に依り、目立つほど氣温が違つてゐる。中部暹羅の平原は、二、三月から十月に掛けて、海風が絶えず南又は南西から吹いてゐるから、日中の暑さは減殺され、夜は比較的涼しい。二、三月から十月までの中には、暑期と雨期との二つが含まれてゐるが、温度は減多に九十八度(華氏)以上に昇ることはないし、七十九度以下に下ることもない。十月末から二月までは、所

謂寒期である。此の時期には、風は北東から吹き、氣温は高い時に九十二度、低い時五十七度に達することもある。盤谷市の氣温は、其の周圍にある平原の其れと、以前には大同小異であつた。サー・ジョン・パウリング(Sir John Bowring)は、暹羅に關する一五八六年の著述中に、一八四〇年から一八四七年までの盤谷の氣温に關する統計を掲げてゐる。其の統計に依ると、最高温度は九十七度、最低が五十四度である。即ち、平原の温度と大體に於て一致してゐる。サー・ジョン・パウリング以後の統計も大體に於て同じである。然るに、過去十年内外の統計を見ると、盤谷に於ける日々の平均温度が段々に上つてゐる。即ち、現在に於ては、最低温度は以前と大差ないが、暑期には毎年最高百度から百四度に達し、雨期、寒期の各月に於ては最高温度九十五度に達する。盤谷の氣温の上に於ける如上の變化は、未だ充分に説明されてはないが、人口が著しく増加すること、建築材料として従前藁木材を使用せる所に、今日は瓦、煉瓦を使用すること、盤谷市の内部及び其の周圍にあつた沼を乾したことも、恐らくは其の重なる原因であらう。

北部暹羅には、海風が吹いて來ず、それに照り返しが猛烈であるから、日中殊の外暑く、夜は日中の暑さに引き較べ意外に涼しい。是れを南方の中部暹羅の平原に比較すると、平均最高温度に於て三度高く、平均最低温度に於て四度低い。

廣く淺い東部暹羅の盆地は、南、東から來る涼風を、周圍の山に依て遮斷されてゐるばかり下な

く、其の赭土が思ふ存分太陽に照されてゐるので、恐ろしく暑い。薄く生えてゐる植物は、晃々たる日光に焼盡され、此の地方の一大部分の土は、乾燥して焦げた焼野原のやうになる。日中は照り返しが強く。晝夜氣温の間に權衡が取れず、其れがために健康上甚だ面白くない。寒期に於ける氣温は非常に低い。

南部暹羅の氣候は、暹羅の他の部に比較して最も適順で、平均温差も、此の地方が最も低い。即ち海風が間斷なく、半島の東からと西からと交互に吹いてゐるから、寒暖計は六十八度以下に下ること稀れに、最も暑い時分でさへ九十五度以上に昇ることは殆んどない。一日の温差十四度以上に上ることめづらしく、雨期などには温差が三度以上に昇らぬこともある。

中、北、東部暹羅には明かに三つの時節がある。第一が暑期で、是れは二、三月から五月に及んでゐる。第二が雨期で、六月から十月に及び、第三の寒期は、残りの四箇月をカヴァーしてゐる。北東の風強く吹くときには、寒期にあることが分る。所謂寒期と言つても、實際の氣温は、歐洲の夏分の平均氣温より低くないけれども、暹羅に土著してゐる人々は、其れでも一寸困る位である。然し寒期に於ても、季節風が吹かぬこともある。其の時分には、寒季と言つた所で、暑季との間に、氣温の上に何程の變化もない。南部暹羅の下部に於ては、二月から八月に互る暑期と、九月から一月に互る雨期との二つしかない。雨期の絶頂は十二月で、此の月には中部暹羅には雨が降らない。チャ

ムボン町の南には、寒期なるものがない。時々、寒暖計が六十八度少し以下を指すことがあるけれども、其れは一、二月に一、二夜ある位のものである。

(ロ) 降 雨

雨量は、地方に依て大に異なる。南部暹羅及びチャンタブーンの海岸では、一年の平均雨量は百吋を下ること遠くない。北部暹羅では、平均が六十吋、盤谷附近では五十吋である。英國領事館、米國宣教師の駐在所、二、三の商館では、十九世紀の中葉頃からして雨量を記録してゐる。農務省は、其の後暹羅の各地に雨量測定所を設けた。其の報告に依り、一九〇八年以後は、雨量が可成り綿密に知らるゝことが出来るやうになつた。

中部暹羅の雨量が少ないのは、其の西方に大きな山脈があるからである。此等の山脈は、南西方から来る、水分を澤山に持つてゐる季節風を遮ぎつて、山脈の頂き、又は其の斜面に雨を降らせ、暹羅全體に平均に降下すべき雨を、そちらに汲收してしまふ。暹羅に於ける降雨は、必ずしも、雨期に限れるものでない。例へば盤谷の附近に於ては、夕立は、寒期暑期に於ても能く見る所であるし、暹羅の西部及び南部に於ては、暑期の各月中數時づつ降ることすらある。雪は暹羅の何れの部分にも、最高山に於ても降らない。然し降霰は、勿論頻繁には見られないが、間々ある。雨期の始めには、狂風に雨を交へた、所謂スクォールと雷鳴とがある。其れから、大雨が降り、西方の高地から

一齊に流下して、平地にある財産に多大の損害を與ふことがある。九、十月中には、旋風のやうな強風が暹羅灣に吹くことがある。然し盤谷から出這りしてゐる船の遭難することは稀れである。海や氾濫せる沼地には水柱を見ることが往々にしてある。英領馬來聯邦に近き暹羅の南端では、約五十年前、恐るべき旋風が襲來し、多大の損害を土人の財産に與へた。其れで、彼等は、彼等と彼等の親の時代に起つた事件を話し、たい時には、其の旋風を基として話しを進める。

第二章 人種

第一節 人間の種類

一つの國の原住民族はどんなものであつたらうか、換言すれば、地質學的時代といふやうな古い年代に、其の國に住んでゐた人間はどんなものであつたらうかといふ問題に對する詮索、想像は、何等の結果をも生まない、無益な所業であるといふ結果になり了る傾向を有するものである。といふのは、研究者が譬へ、どんな古へに研究の歩を進めて見ても、此の時代以前に人間が棲んでゐなかつたといふ確證を掴み得る時代には達しないのである。何れの國の人種學的研究を見ても——此等の研究をば、極めておほまかに取調べただけでも——或時代に原住民族に就てなした學者の想像、彼等の結論といふものは、其の次の時代の研究調査に依て誤つてゐたといふことを指摘されてゐる。

原住民族に對する效果の少ない研究は兎に角として、民族の起源、發達、盛衰、汲收、消滅といふやうな問題、國民の成立、破壊、乃至人類全體のどよめきに關する調査、或は人種學の研究といふものは假令其の調査研究が、透視することを許さないほどの濃霧中に吾人を導くとは言へ、他に比類なきほど面白い仕事である。吾々が、此の人種學的研究を進めて行く上に於て材料となるべき

ものは、人種の身體的特徴である、其の言語である、其の傳説である、其の文字である、其の歴史である。此等の事物に關する研究は、年齢尙ほ未だ若く、生氣潑刺たる人種についてのみならず、既に老衰せるものに就ても爲されねばならぬ。然り而して、今述べたやうな研究材料の豊富なる點に於て、後印度(暹羅を包括せる)の連山、深谷、曠野の如きものは、先づ無いであらうと信せられるのである。

暹羅に於て人間が住んでゐたのは、久しき以前からのことであらうが、慥かに住んでゐたことを證明するに足る最も古い證據は、斧形の頭を有する石鑿である。此の石鑿は、南部暹羅及びコーラト高原に於て時々發見せらるゝものである。此等の地方に發見せらるゝ石鑿の或物は歐羅巴、亞米利加に於ける新石器時代の石鑿とは、其れが鑿のやうに片側のみ磨いである點(細かに磨き上げである點に於ては歐米に於けるものと同じだが)及び角張つた肩を有する點に於て異なつてゐる。他の石鑿はアッサム(Assam)、緬甸、安南、柬埔寨に於て發見せらるゝものと同じく、兩面が磨いてあつて、何處も餘り角張らない、普通に見る石鑿なのである。此等石鑿の一般の出來榮えからいふと、どうも後新石器時代の産物であるらしく見える。

右に記述したやうな石器をば、どんな人間が造り、どんな人間が使用したか、此等の人間はどこから來たか、どんな生活状態であつたかを知ることが、今日到底不可能で、此の種問題については

各人の想像に一任するより外はない。兎に角、此等の人間は、今日確實に吾人の知つてゐる最も古い人間よりは、數年代、數十年前前に暹羅に於て生活してゐた原始人である。一體、比較的近代に暹羅に棲んでゐた種族の傳説に依て、或は又現に吾々が見てゐる地層の動搖に依て考へて見ると、暹羅の中央平原は元々海であつて是れが海面上に隆起したのは、殆ど有史以後のことであると言つて差支へなく、従て前記の石鑿は、中央平原に於ては見付からず、此の中央平原を包含したるべき大なる灣の周圍に於て、山嶽起伏せる地方に發見せらるゝに過ぎないのである。石鑿を造り是を使用した人間も山嶽地方に住んでゐたものと想像せられる。併し此等の人間に就ては、そんな人間が太古に棲んでゐたこと、而して、其等の人間が前述のやうな石器を製造したものであるといふこと以上には知られないのである。此等の人間が、暹羅の原住民族であると考へる理由は毛頭ない。何となれば、地質學は、此等の人間が屬したるならんと想像せらるゝ後新石器時代よりは、數年代否數十年前前に、人類が棲息してゐたことを明かに證明してゐるからである。

南部暹羅の山中に行つて見ると、現今でも、倭小にして色の黒い、縮毛を頭に戴いたる人間がゐる。此等の人々は、暹羅の他の部分にゐる部族、種族とは頗る様子を異にしてゐる。彼等は其の居住地から餘り遠く西の方に隔つてゐない、緬甸の南方にあるアンダマン諸島(Andaman Islands)の土人竝に比律賓の山地に棲住する或種族(ネグリット種族をいふ譯者)と人種上の關係を有するも

のである。彼等は、或著述家が、印度の原住民族であるだらうといふやうなことで、議論を落付けてゐるネグリットー種族であること明かである。今日南部暹羅から馬來半島にかけて棲住してゐるネグリットー等は、恐らくは、暹羅新石器時代人の末裔又は後繼者として、一時大に蔓延してゐた人間の氣の毒なる殘骸であると信せられる。彼等は暹羅に於てはセマン種として知られてゐる。而して、同じ山脈内に、併し乍らもつと、つと南に、大體からいふと暹羅の國境外に生活してゐるサカイ族(Saikai)と混同せらるゝことがあるが、彼等は、サカイ族とは生活様式こそ似て居れ、體格等の點に於て甚だしく異なつて居り、決して同一視すべきものではないのである。

一時多數蔓延してゐたネグリットーは、どんな歴史上の渦巻を経験したか。近時一般に承認せられてゐる所に依ると、遙か北方なる中央亞細亞に於て、自然的社會的原因に由る人類の一大運動が起り、其れがため、暹羅のみならず、後印度の全部が周期的に人種的汎濫の渦中に投せられた。當時の事情を想像すると、暹羅、否當時海の表面に現はれてゐた現暹羅の或部分に棲んでゐたネグリットーは、依然舊態を脱せず原始的生活を送り、彼等以前に其の地方に住んでゐて、石鑿を振廻した種族と何等擇ぶ所なき生活振りを示して居つた。其處に彼等を深山に驅逐し、彼等が以前に占據せる地盤を横領し、彼等をして絶滅に瀕せしめた、人類大運動の一波が襲來した。此の大波は、吾人が今日便宜上モン・アナム族(Mon-Annam Family)と總稱するもので、後印度のあらゆる河に沿うて南

下したものである。此のモン・アナム族中には、モン(別稱タライン Talain)、クメル(Khmer 柬埔寨人と稱す)、以前から開化せる安南人、今日尙ほ蠻風を脱却せざる多くの他の部族を包含してゐる。

モン・アナム族の暹羅地方侵入は、數千年以前に開始せられ、是れが成就する迄には、恐らくは數世紀を必要としたであらうと思はれるが、其れにも拘はらず、系統として現今殘存してゐるものは如何にして、何時どの方面から侵入したかに就て何等傳説を有してゐない。故に、此等の問題を合理的に説明せんとするには、ガーニアー(Garnier)、フォーブス(Forges)、マックス・ミュラー(Max Müller)、ギャリソン(Garrison)其他の學者の發見と意見を參酌して研究を進めるより外に途がない。かくして研究せる所に依ると、イラワッディ河(Irrawaddy)、メーコーン河の谷を圍繞せる山嶽に棲息せる多くの部族は、傳説上餘程久しき以前に現今の場所を占領し、従つて部族としての特徴も各非常に相異してゐるに拘はらず、何れもモン・アナム族の系統であることは明かである。此等の部族は北西の方角なる中部アッサム(C. Assam)地方にも棲住してゐる(中部アッサム以北、以西にまでは及んでゐないが)。其の外、緬甸の北部シャン・ステーツ(N. Shan States)、メーコーン河の流域で英、佛、支、暹の諸國が互ひに國境を接しやうとしてゐる地方にも住んでゐる。殊に暹羅の北、北西、東部には多數に發見せられる。此等部族の言語には共通的特性があり、今日のモン人クメ

ル人の言語とも共通的關係があることを證明してゐる。加是、此等部族の言語は、今日モン・アナム族の開化せる分派として知らるゝ者の古い形の言語であることを示してゐる。尤も學者の中には、モン・アナム族に屬する諸系統の人間の使用せる言語と、ドゥラヴィダ以前に印度に這入つたコル人 (Kor) 人の言語との間には類似の點がある、其れであるから、コル人とモン・アナム族とは出所を一にしてゐると主張する者がある。併し、此等の人々に對しては一體モン・アナム族は、其の昔西藏の曠野に生活してゐたから、コル人の祖先と接觸する機會を持つたかも知れない、言語の上に多少の類似があるのは其れがためである。出所を同じくするためではないと主張する者もある (著者グレーム氏も左様主張する者の一人であるらしい—譯者)。

モン・アナム族が南下したといふ以上の説には、反對する者が少なくない。或學者は、モン・アナム族が南下したことを證明すると同一程度に、有力に北上したことを證明することが出来ると言つてゐる。即ち此等の人々は、モン・アナム族の祖先は、印度其の他の地方から海を横切つて後印度に入り、後印度に於ける大河の河口に隣接せる地方から、内部北部に侵入したものであると主張してゐる。此の主張に眞實らしき色彩を添へるのは次の事實である。即ち、比較的近年(と言つても今より約二千餘年前)、モン人クメル人に依て占領せられてゐる地方に、印度のテリンガナに住するドゥラヴィダ種族が海を横斷して移住をなした。其れは成程事實である。併し、當時移住を試みたドゥラヴィ

ダ族は航海に習熟せる人民である。彼等が海を越えて移住するのには何の不思議もない。加是、移住の當時彼等が周圍に於て發見せるモン・アナムの各部族は、全く無智蒙昧で、甚だしく野蠻な生活を送つてゐた。斯様な人間が、大舉して海を越えて移住し得べくも思はれない。加是、メーコーン河の遙か上流にウキエン・チャン (Wiang Chan) に依て建設せられた最初のラオ族國に關する記録に依れば、ドゥラヴィダ種族が移住したと殆んど同時分、ラオ人は今日モン・アナム族中の山地生活者として知られたる住民(其の住民は久しき以前から其の土地に定著してゐた)と激烈なる戦争を敢てしてゐたといふことである。右の記録に依ると、モン・アナムの部族は、當時前印度の遙か北方まで擴延してゐた。果して然りとせば、海を横斷したといふモン・アナム族は、ドゥラヴィダ族が來たといふ二千年より遙か以前に前印度に移住し、其處に落付いてゐたものと想像せねばならぬ。吾々は左様久しき以前に、極めて原始的な生活に満足してゐたモン・アナム族が、何故に先住の地を離れて海外に移住せねばならなかつたか、どこに、どうして行くといふ航海上の知識もないのに、如何なる方法で移住し得たか、假りに移住し得たとするも、彼等の末裔がどうして遠くメーコーン河の上流及びシャン・ステーツにまで其の居を擴め得たかを了解するに苦むのである。況んやモン・アナムの例に習ひ、ラオ人西藏—緬甸人 (Tibeto-Burman) が北方から這入つて來たのを見ると、モン・アナム族も亦其れ以前に北方から南方に進出したと類推しても一向差支へないのである。其の外モン・アナム

族が印度から海を越えて来たといふ説の前には、彼等がモンゴリア系統であるといふ印度渡來說では説明出来ない事實が横はつてゐる。深邃なる言語學研究者の見地からして、學者は、モン・アナム族が北方から南下したか、南、南西より海を横切つて後印度に渡來したかといふ問題に就て、判斷を下し兼ねてゐるけれども、海を越えて来たといふ説の根據は寧ろ薄弱で、今日では、多くの人が陸續きの北方より南下したといふ説を承認してゐるやうである。以上の説は、勿論、一度移住を完了したモン・アナム族が、或は南部暹羅に、或は馬來半島に、或は馬來群島に、個體として、團體として、東西南北の別もなく轉々移住したといふ事實と衝突するものではない、其等の事實を否定するものではない。

後印度に移住してから後のモン・アナム族の動靜は如何。彼等は、其の移住先きに於て發見せるネグリットー族よりは、幾分開化してゐたと言はれやう。併し、大體に於ては、彼等の先住民族たるネグリットーと同様原始的な生活をなし、始めはネグリットーと雜居してゐたが、遂には是れを驅逐し、其の地盤を奪つたものらしい。然し、其れを彼等は、優秀なる技術と高等なる知識に依て達成したのではなく、繰返し押寄せて來る數の力に依て成就したのである。モン・アナム族は、屢々の移住に依て其の數を増加すると共に、後印度の海岸地帯を占領し、遂には馬來群島を通過して亞細亞本土の附近に散在する諸島に擴延するに至つた。勿論、支那人、印度人、ネグリットー等と混血的にな

つてゐることは争はれないが、今日吾々の見る海南島土人、爪哇人、ブギス人(Bugis)、マカッサ人(Makassar)、比律賓のタガラ人(Tagalas)、ボルネオ島のダイア人(Dia)、其の他是れに關係を有する多數の部族は、モン・アナム族から出發したものであると想像すべき理由が充分にある。馬來群島に於ける交通は、今日は頗る困難である。然しラッセル・ウォレス(Russel Wallace)が主張する如く、同方面の地表が漸次沈下しつゝあるといふことが事實であるとするならば、モン・アナム族が八方に進出を試みて居る時代には、彼等は今日船に依て旅行せねばならぬ所の、馬來群島及び其れ以東、以南の海域の少くとも一部分は、徒歩にて進出し得たかも知れないのである。

此の古いモン・アナムの支族で、暹羅に現存してゐるものは、クメル人(東埔塞人)、モン人(タライン人)、ユアン人(安南人)、ラワー人(Lawai)、チョン人(Chong)及び暹羅人が普通カチエ種族(Kachis)なる名稱の下に包括する多くの部族である。中に就き、モン人、クメル人は、南部印度より渡來せる移民の齎せる文明に依り、早くより野蠻の域を脱せる部族の後裔である。相當な文化の階段に達せる彼等は、地表が高まつて以前海であつた部分に平原が出来、デルタが生ずるに従ひ、或程度まで互ひに獨立せる多くの社會として擴延したものである。現今吾々が暹羅に於て發見する馬來人は、比較的近代の産物で、複雑なる人種的要素を其の中に含んでゐるが、彼等は多分嘗て馬來半島に占居せるモン・アナムの部族と、モン人、クメル人の如く、印度文明の文化的影響を受けて

後、南方の諸島から出た彼等の遠き縁類との結合に依て生ずるものである。此處にいふ、遠い彼等の縁者とは、内外の事情に制せられて、彼等の祖先が嘗て南方に行く時に踏んだと同一の徑路を辿つて後印度の方面に歸つて行つたものである。カムク(Kamuk)、カメト(Kamet)、カヒト(Kahit)カホク(Kahok)等の支族を包含せる前記カチエー族及ラワー族は、共にモン・アナム族の流れには相違ないが、モン・アナムの部族が嘗て南進運動を爲した際、山に取残されたものである。彼等は、山に居残り、文化の恩澤に浴する機会が今日までなかつたため、依然として數千年前の原始的生活様式を墨守してゐる。

モン・アナムに次で、北方より後印度方面に向つて試みられた人口上の大移動は、西藏—緬甸族の其れである。此の大移動は、二千年前は三千年前との中間に於ける或時期に起つたものであるが、何れにしても、モン・アナム族の移動よりは遙か後れて行はれたものである。此の移動に關聯して生じた傳統は、今も尙ほ西藏—緬甸族の代表者たる部族間に殘存してゐる。此の西・緬甸族の出所は、地圖上どの地點にあるかといふ問題に就ては種々異論がある。然し、彼等が、モン・アナム發祥の地と略ぼ同一の地域から出發したといふことに就ては、今日學者間に定説があるやうだ。唯西・緬甸族は北方から南下するに當つて、モン・アナムの如くイラワッディ、メーコーン兩河に依らず、主としてイラワッディ河に依り、少數の者のみメーコーン河に依てゐる。彼等は又、現今暹羅國を形成せる地域

の堺にまで進出したのであるが、決して是れを越えなかつた。堺を越えて現今の暹羅に進出したのは、極めて最近の事象に屬するのである。即ち、西・緬甸族の流れを汲む部族なりと信せらるゝメオ(Meao)又はメオ(Meo)、ムーソー又の名ラフー(Muh-sü, Lahu)、カウ又の名アカ(Kaw, Aka)、リシヨウ(Lislaw)、ヤオ(Yao)は、最近に至り、暹羅の東北部に其の姿を現はした。此等は、元來ムアン・シン(Muang Sin)、シブソング・パンナー(Sibsong Panna)、シブソング・チュタイ(Sibsong Chutai)及び其の附近の山間、並びに更に其の北方に位する地域に其の居を構へてゐたのであるが、此等地方に於ける數次の暴動は、彼等をして種々の方向に向はしめ、一部が暹羅に定著するに至つたものである。此等暹羅に定著せる徒は、新來者の参加に依り、現時其の數を増加しつゝある。

モン族とクメル族とが、後印度の南岸に沿うて其の居住を擴張して居ても、外部から來た新移民の文化的影響に浴し乍ら尙ほ未だ野蠻の域を脱し得てゐない時、彼等が南下運動の際、諸々の地點に残した部族は、山嶽地帯に追込められてゐたのである。斯く彼等を追込め、半ば征服統御したるが如き形に置いた者は、第三番目の人口移動で、是れも同じく北方から流れ込んだ。ラオ族は即ち是れである。ラオ・タイ族は、最も古い時分から楊子江の谷底に根據を有し、此の根據地から南方に向つて進出したものである。而して、二千五百年の昔、ウキエン・チャンの附近に於けるメーコーン河の兩岸に於て、有力にして、或程度迄文明的な一國家を形成するに至つた。

ラオ族が、西部支那からなせる最初の南下運動は、西藏—緬甸族が西藏から南下したのと殆んど同時に行はれた。最も古く南下した此等のラオ族は、ラオ・タイと稱する大なる種族の最初の分派であつて、其の後の分派をば、吾人は今日アッサム、シャン・ステーツ、暹羅及び佛領印度支那の背後に接し、暹羅北境の遙か向ふにある、事情不明の大地區内に於ける住民に於て見ることが出来る。一體、楊子江の河谷に住んでゐたラオ・タイ族は、多數の人民を擁してゐた種族に相違ない。其の證據には、彼等は其の本據地より遙か離れた地域に於て、既に久しき以前多くの王國を樹立し得たばかりでなく、自らの郷國に於ては一大勢力を形作り、暫時間支那全土に對し、覇を争うてゐたのである。即ち數世紀に亙り、彼等は各方面に於ける彼等の隣邦と戰ふことを常習としてゐた。然し、彼等が、本來の弱點である結合力の缺乏は、種々の事情と相俟つて、彼等の王國を崩壊するの因を作り、生來有せる逍遙的傾向は、彼等を驅つて遠方の諸國に移住し、其の運命を開拓するに至らしめた。彼等は幾度が支那人の攻撃を受け、其の都度郷國の脱出を繰返した。ラオ・タイ國に最後の打撃を與へ、根本的に是れを覆へし、人民をして四散するの運命に立至らしめたのは忽必烈で、其れは、紀元十三世紀のことである。斯の如くにして四分五裂した亡命者の或群はアッサムに入つた。併しアッサムには、既にラオ・タイの一族が這入つて居つたので、新に侵入した彼等の部族は、覇者的勢力を揮ふことを得るに至つた。亡命者の他の群は緬甸に侵入し、其處ではタイ王朝（シャ

ン王朝)を形作り、二世紀に亙り緬甸に君臨した。此の外、サルウキーン河、メーコーン河に沿ひ、隊を組んで暹羅に這入つて來た亡命者の群は引きも切らず、彼等は、一方に於て、以前より其處に居住してゐた彼等の同胞と新に結合することの機會を得たるのみならず、以前より行はれ來つたラオ、クメル兩族間の結合をも促進し、遂に、今日暹羅の大部分を占領する一大民族を形作るに至つた。

クメル種族の最後の根據地が轉覆せられ、アユタイア市が創立せられたる時以來（歴史の章參照—譯者）、ラオ族とクメル族との結合に依て生せるタイ(Thai自由人の意)族は、外人の征服を受けた短期間を除いては、暹羅に於ける支配者階級として止つた。

今暹羅の國境内に生存せるラオ・タイ族の支族を一瞥すると、先づ第一にタイ族がある。是れは、普通にいふ本當の暹羅人である。次はラオ族がある。是れは、後にタイ族といふものに變化した。彼等の同種族が、嘗て住んでゐた地方に現に住んでゐるものである。次にシャン族がある。是れは、十二世紀及び其の以前に、緬甸帝國の東部諸地方に住せる彼等の同胞たるラオ・タイ族の後裔で、後に至つて暹羅に侵入したものである。次に南部暹羅のサム・サムがある。是れはタイ族と馬來人との雜種である。最後にリュウ(Lo)族なるものがある。是れは新しく暹羅に這入つて來たもので、過去の經歷に就ては餘り多く知られてゐない。唯彼等の言語がラオ・タイ族の其れから出發してゐ

ることだけは分つてゐる。

暹羅には、現に後印度に於ける三大種族として前に挙げたモン・アナム、西藏—緬甸、ラオ・タイ族の外に、其の何れとも結び付けられない種族がある。此等の種族中、最も重要なものはカリエン (Karen, Karen) 族で、其の本據を暹羅緬甸の國境地方に持つてゐる。國境の中、何れかと言へば緬甸の側に持つてゐる。然し、分界山脈の側には、中部暹羅の西部國境諸地方から馬來半島の暹羅領諸州に掛けて、多數に棲息してゐる。カリエン族は、自らの種族に關する物語なるものを持合せてゐない。唯僅か持合せてゐるものから綜合して見ても、彼等の祖先が果して何處から來たものであつたかには、判斷を下すこと出來ない。唯、彼等は、祖先が彼等の知らない遠方の故郷からさまよひ來つたものであるといふ、ぼんやりした傳説を持つてゐるのみである。此等の傳説を辿つて見ても、緬甸の國境以北の地には、吾々を導いて呉れない。然し、彼等の言語と、ラオ族、支那人の其れの間には、僅かばかり類似の點がある。此等の點から考へると、カリエン族の祖先は、支那の西南部から來たのかも知れぬ。支那の西南部から來たものらしく見える。或學者は、彼等をラオ・タイ族と同一種なりといひ、或學者は彼等を西藏—緬甸族と結付けて考へんとしてゐる。而して或他の學者は、カリエンは、此等近隣に住める種族とは、何等の血縁もないと主張してゐる。フォーブス大尉は、ベグ (Beg) 及び其の附近のモン族、暹羅のクメル族が、文明的國民になつた後、

紀元六、七世紀頃、現在の場所に這入り込んだものだといつてゐる。恐らく支那人は、カリエンの徒を、ラオ・タイ種族に關係あるものと考へ、血族的に關係あるといふ此の想像からして、彼等を支那から驅逐したものであらう。

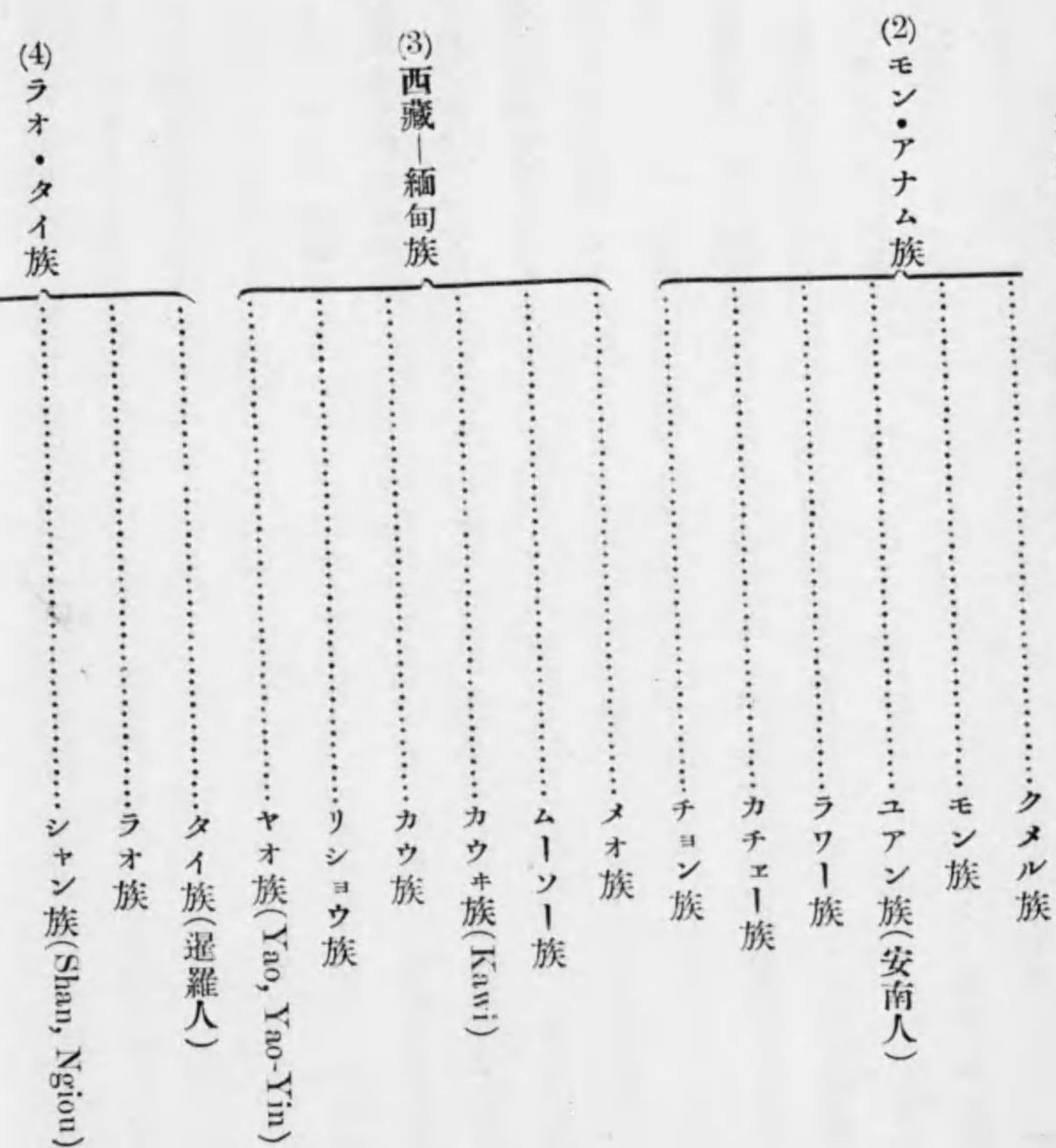
カリエンと同じく、出所が明かでない、従て、どの種族に附屬すべきか、安心して處置出來ないものにサカイ族なるものがある。此のサカイ族は、南部暹羅の山中に少數棲んでゐるが、其の本據地ともいふべきは、英領馬來聯邦州である。一時、學者は、南部暹羅及び馬來諸州に住するサカイ族、チャクン (Jakun) 族、セマン族を、ネグリットーと同一種族に屬するものと考へたやうで、實際此等の蠻族はネグリットーに似た色々の特徴を持つてはゐるが、其れは此等の種族が長年月間互ひに接觸を保つてゐたからである。最近此等の蠻族は、ネグリットー族とは、全然異なるものであることが證明せられた。加是、最近提出せられた證據材料に依ると、サカイ族は、南部印度のヴェッタ種族 (Veddhas) の祖先である所の、昔のドラヴィダ種族の流れを汲めるものゝ如くである。

以上の記述に依り、現に暹羅に棲住してゐる種族を分類表示すれば左の通りである。

(1) ネグリットー族……………セマン族

……………チャオ・ナム族 (Chao Nam)

……………暹羅の馬來族



以上列挙せる諸種族の外に、吾々は多数の支那移民を挙げねばならぬ。此等移民の中、最も多数なるは惠州、潮州人であつて、福建人、南島人も是れに加はつてゐる。海南島の土人には、モン・アナム族の血液が這入つてゐるかも知れないが、今日吾人の見る海南島土人は、本當の支那人と見分けが付かないやうである。

第二節 暹羅の人口

暹羅が始めて全國的國勢調査を實施したのは、西曆千九百九年に於てである。暹羅の人口は、其の頃から比較的正確に分るやうになつた。其れ以前は、暹羅の人口は、各人の當て推量に一任せられてゐたから、人々の是れに關する觀察は悉く違つてゐた。人口問題に就ては、誰れもが其の一流の筆法で調査を進めたから、結論も違つてゐた。即ち、或人の調査と或他の人の調査の間には、五百萬人から一千二百萬人の相異がある位である。但しバルゴワ監督(Bishop Pallegoix)は、一千八

百五十四年に於ける暹羅の人口を六百萬人と計算してゐるが、是れ恐らくは最も正確に近い數字であらう。

一九〇九年の國勢調査は、極めて緩慢なる計數法に依て開始され、反覆されたる照合と訂正とに依て、人口の實數に餘り遠くない結果を生み出すに至つたやうである。其の後の事業としては、政府は、戸口簿の各年整理をなし、是れに依て人口移動の趨勢を知らんとしてゐる。官憲の言ふ所に從へば、斯の如くにして得たる暹羅の人口は、大體に於て正鵠を得てゐるけれども、吾々は暹羅の或部分、殊に調査に従事せる者の素質知能が充分でない、僻遠なる地區に於ける調査は、決して完全なものではなく、大小の誤謬を其の中に含んでゐるといふことに就て、確證を握つてゐる。盤谷の人口すら、第一回調査の際に於て得たるものは、實際の數字よりは一四%多かつたことが知られてゐる。

訂正せられたる盤谷市、並びに接續町村の人口(一九〇九年の調査を訂正したものか―譯者)は五十萬人餘であつた。而して、一九二〇年調査の際、盤谷市のみ就て爲せる計算に従へば、三十四萬五千人である。一九二〇年の調査に依ると、盤谷市に於ける男子の數は、女子の數より遙かに多く、其の割合は女子の二に對し男子三である。是れは、一夫多妻を許してゐる國の現象としては奇異の觀なきを得ないが、盤谷市には由來多數の外人が居住して居り、此等外人の中では男の數が常

に女の數を凌駕して居り、且つ同市にある學校兵營は、國內の男子を汲集して、其處に集めるといふ傾向を持つてゐることを見ると、前記の釣合は、強ちに不自然であるとは言はれない。

衛生施設の不完全、健康法に對する知識の缺乏、醫術と魔法との徹底的混同、其他多くの原因が、過去に於ける暹羅人口の増加を妨げた。暹羅の人口は、最近までは、殆んど眼に見えない位の増加しか示してゐない。然し、今日吾々は、人口停頓状態が既に終りを告たことを證明するに足る色々な事實を認むる。良政の施行、交通機關の改善、醫學的知識の普及、人口の健全なる増加發達に依てのみ物質上の進歩が庶幾せらるゝといふ意識が人口増加の原因となり、最早其の結果を生みつゝある。最近訂正されたる一九二〇年の國勢調査に依れば、暹羅の人口は一千萬を距ること遠くない。即ち暹羅人(タイ人)並びに其の混血人が三、八〇〇、〇〇〇、ラオ人(暹羅人と同一なりと見て差支へなき者)が三、六五〇、〇〇〇人、純粹なる支那人五〇〇、〇〇〇人、クメル人四五〇、〇〇〇人、馬來人四〇〇、〇〇〇人、モン人六〇、〇〇〇人、カリエン人六〇、〇〇〇人、ラワ、カチエー、リニュー等の、山地蠻民が六〇〇、〇〇〇人である。此等の數字を、十年前の調査に比較すると、其の間に多大の増加が認めらるゝが、吾々は此等の數字を頭に入れる前に、用心することが必要だ。元來、暹羅では、教育ある高級官吏ですら、最近まで、國民中の大多數者たる農民は、國家に取つて大した價値あるものでない、どうでもよいものである、物の數に這入らぬものであると考へてゐ

た。一般人民の決して輕んずべからざるものなることが覺知せられたのは、仁慈なる現國王の詔と、一時暴威を逞ふせる天然痘を撲滅せんがために、國王自ら經費を負擔し、撲滅事業を計畫し、指揮したること等に由るものである。兎に角近來では、人命の貴重なることが弘く一般に認識せらるゝに至つた。其の結果として、國勢調査が始めて施行された際には、國勢調査などといふものは、官僚政治家等の能く爲す無益な改革沙汰であると心得、何れも不精無精是れに従事したのであるが、今日では天下の重大事件として是れを取扱ふやうになつた。否、地方官吏の或者の如きは、己の受持区域内に於ける人口の増加率が他に劣らざることを誇示せんとするの傾向がある。年々の統計に於て、受持區域の人口が停止又は減少せることを數字の上に現はすことを恐れざる者は少ない。此の如き事情あるがため、暹羅人口の實數は、現在統計に上つてゐるものより五〇内外少ないかも知れないと思はれるのである。

盤谷には、歐羅巴人、亞米利加人、日本人、印度人、緬甸人、爪哇人、馬來人等の外國人がゐるが、其の數大約三萬である。歐米人の全暹羅にあるものは合せて一千八百人、主として官吏、會社員、宣教師等よりなつてゐる。暹羅在留支那人の數に就ては、非常なる誤解がある。バルゴソ監督は、是れを百五十萬なりといひ、バ氏よりもつと新しい暹羅の研究家で、氏よりはつと大きな數字を掲げてゐる者もある。暹羅國に於ける人口の半分は支那人であるなど公言してゐるものすらあ

る。此等は、何れも盤谷の町に於て多數の支那人が往來してゐる——支那人は盤谷に最も多く地方に少ない——のを見て、直ちに暹羅全體を判斷せんとするもので、彼等は盤谷の街路に於て邂逅する二人の人間の中、一人は支那人であるといふことからして、盤谷以外に於ても斯くあるべしとなしてゐる。盤谷に於てすら、支那人は、全人口の四分の一に過ぎない。而して、此の割合は、盤谷からの距離が遠くなればなる程少ない。ブケット、ベトウリウなど、錫鑛業、精米業のある所では、支那人が獨立のコロニーを形作つてゐるが、其の他の田舎には前記割合の支那人がゐないのは勿論のこと、全然彼等の居ない所が多い。然し、暹羅人其の物の血管中には、支那人の血液が多分に通つてゐることを否定することは出来ない。市街地に住する暹羅人、上流階級の暹羅人の場合に於て殊にさうである。支那人は、貿易業者、商人、労働者として十七世紀の始めから續々暹羅に入込み、割合自由に土人婦人と雜婚を遂げた。其の間に生ずる雜種は、三代、或場合には其れより以前に、純粹なる支那人と全く區別出来ない程に暹羅人化する。現に暹羅に住する貴族中には、餘り遠くない祖先に支那人を持つてゐる者が少なくない。祖先たる此の支那人は、渡來した當時は、勿論一文なしであるが、節儉なることを知らざる人民中にあつて、勤儉己れを持ち、巨萬の富と權力とを贏ち得たものである。

第三節 ネグリット族

一八九九年、ケムブリッチ探險隊は、南部暹羅と馬來半島の内部を調査し、其の結果を報告したが、其の報告と、スキート(Skate)、ブラッグデン(Bragden)兩氏の名著 The Pagan Races of the Malay Peninsula (馬來半島の異教徒諸種族)とは、セマン族(暹羅地方に於けるネグリット族の別名)に關する吾々の知識をば大に増加した。以前には、セマン族は、該族の附近に棲住してゐて、サカイ族と總稱せらるゝ部族と同一視せられてゐた。サカイといふのは、暹羅人が北部暹羅の山間に住んでゐる雑多な民族を總稱してカ(Ka)と言つてゐると同じく、馬來語で奴隸、奴僕といふことを意味する。今日の研究では、セマンは、彼等を圍繞せる多くの他の種族より、年代遙かに古く、此等の種族とは全く違つた種族であるといふことが分つてゐる。彼等は、アングマン島及び比律賓に於けるネグリット族及び事に依ると中央亞弗利加のピグミーと共通で、現存せる人類中で最も古い種類に屬するのである。

暹羅に住するセマン族は、其の數約六千で、チャイヤ、ソクラー、バタニー地方の背後にある山嶽地に棲息してゐる。彼等は、此等の山嶽地に登つたり、降つたりしてゐて、唯稀にのみ同一箇處に止まる。同一箇處に留まる場合でも、其れは、彼等が山側をざつと伐り開いて作る米或は黍を收

穫するまでとあつて、其れが濟めば他に轉住するのが普通である。彼等の中の男子は身長四呎十吋、女子は四呎七吋(平均)である。膚色はチョコレート褐色、又は黒色である。剃髪してゐない者の頭は短い縮毛を以て覆はれてゐる。前額は低く且つ圓い。鼻は扁平で、頬骨は高くない。眼は水平で、口は大きく、唇は普通見苦しい程厚くはないが、時々厚い唇を持つてゐる者もある。額は小さく、顎は幾分突出してゐる。體軀は稍々後方に突出してゐるが、全體としては、能く發達してゐる方である。然し、セマン族自らの標準からでなく、他の種族の標準から言へば、人好きのするといふ點は甚だしく缺けてゐる。然し彼等の生々した眼、陽氣な顔付、敏捷にして而もたはやかな動作、不斷の快活さは、一般に見苦しいといふ彼等の缺點を補つてゐる。

セマン族の男子に特有なる衣服は、彼等の住地に於て能く見る紐狀菌類の禪である。婦人の衣服は、木葉製の腰巻で、婦人は別に病氣と惡運とを除けるといふ意味で竹製の櫛を頭に付けてゐる。文身は全然行はれてゐない。其の代りにセマン人の男女で、顔面裝飾の目的で、棘を以て皮膚に傷付ける者はある。彼等の家屋は、椰子の枝を地上に突差し、葉を結付けたもので、其れ以上手を盡した家屋は普通見られない。彼等よりは文明的な種族と接觸することに依て學んだ結果、椰子の葉を編み、其れを材料として家居らしきものを建築してゐる者も往々にして見受けられる。然し野蠻なセマン族になると、巖窟、樹穴に住み、家屋などいふ問題に全然頭を煩はされない。彼等の武器

は弓矢、吹矢(是れはサカイ族から取入れたもの)、鋭利なる竹片で出来た槍である。矢、吹矢の尖端には、イポー木(一名ウバス木 *Poh or Ubas tree*)と稱し有名なる *Antiaris toxicaria* と稱する樹の液を毒薬として塗付してある。彼等は附近に住する馬來人、暹羅人から取得した鐵を以て矢尻を作ることがある。彼等は、獵師としては頗る勇敢巧妙で、大は象より小は小鳥に至るまで彼等の原始的な武器の前に斃れる。彼等の宗教思想は、頗る曖昧且つ漠然たるもので、雷霆の支配者たるカイエ(*Kayo*)なる神に、折々祈禱を捧げ、是れを慰撫する位のことにと止まつてゐる。彼等は、ぼんやりした天國、地獄の觀念を持つてゐる。併し、其れは彼等の現世に於ける生活を道德化する程のものではない。彼等には宗教上の儀式といふものが全然ないと言つてよい。花婿と彼の義父たるべき者との間に於ける簡單なる物々の交換で結婚は成立する。葬式は、木葉を敷詰めたる浅い墓穴に、沈黙裡に屍體を引摺り込むといふことに過ぎない。彼等の音楽、舞蹈、歌謠は最も原始的である。椰子の葉を以て打ち、或は樹の幹に打付けて鳴すラ、フラの竹、口でなく、鼻孔に依て吹奏する蘆笛、猿骨を以て吹奏する口琴(*Jenis harp*)等が先づ彼等の樂器で、此等に合せて粗野な歌を唄ひ、簡單な踊りを踊るといふのが彼等の藝術の全部である。而して、音楽、舞蹈は、儀式等に關聯するものではなく、唯氣晴らしにするものたるに止まる。セマン人は、生で肉を食ふこともあるが、食物を煮焼するの術も知らないのではない。發火材料としては、竹を用ゐるが(竹片を互ひに摩擦する)、稍々開

化せる者は、燧石、鋼鐵を用ひてゐる。燐寸すら或る處では發火用として使用されてゐる。彼等はアルコール、阿片を飲用しない。其の代りに甚だしく煙草を嗜好する。セマン族は、全然彼等に特有な文字を持たない。全くの文盲である。彼等の言語は主として近傍にゐる馬來人から取入れたもので、モン・アナム語も多少彼等の言語中に這入つてゐる。モン・アナム語は、多分彼等が有史以前にモン・アナム種族に接觸した時分取入れられたものである。

小人族たるセマン人は、其の近傍に生活せる他の種族から、幾十、百生代となく、威嚇し、壓迫し、虐待せられたので、總て他の人類を怖れ疑ふといふが如き性質を持つに至つた。一體馬來人や暹羅人等は、セマン人が彼等と同じ人間であるとは考へてゐない。セマン人の生命と、人類に最も必要な動物の生命との間に大した相異がないと考へてゐる。彼等は下等動物の命を取つたと同じやうにセマン人の食を奪つた。それ故に、セマン人は、チャングルを根據とし、此處から外に出やうとはしない。偶々外部の人が訪れることあれば、野獸の如く逸走隠匿する。巖の下に見えたと思つて行つて見れば、くすぶれる火と編み掛けた籠と、今迄嚙つてゐた鳥獸の骨のやうなものが散亂してゐて、本人は影も形も見えないといふ有様である。彼等に面謁することを得んがためには、彼等が日頃信用してゐる仲介者に依る外、別に方法がない。それでも、彼等は欣んで吾等に會つて呉れるのではない。斯の如くであるから、租税を負擔する一個の國民として、セマン人は何にもならな

い、それでも、彼等が若し英國に本籍を持つてゐたならば、人間の片割れとして選舉權をすら獲得し、不^{ノレニシテ}存在物と同一に違ひないが、暹羅では彼等は人間社會の風來者で、奴隸としてすら價値がなく、一である^{ノレニシテ}と看做されてゐる。數年前生きた年若い實物として、一セマン人を捕へ、國王に獻納したことがある。此の青年は其の後間もなく暹羅語を話すやうになり、給仕として多くの人々と共に宮仕へしてゐたが、盤谷の氣候と生活様式とは彼に適せず、健康を害して夭死した。

第四節 モン・アナム族

(イ) チャオ・ナム族

馬來半島の西岸に沿うて上下し、或はマーギ群島(Margui Archipelago)間を往來し、或はブケット島(Puket Is.)の海岸を迂回し、或は其の後方の入江に浮かみ出づる、原始的の小舟とむさくるしき陸上團體生活とが、折々見受けられる。これは暹羅人がチャオ・ナムと呼び、馬來人がオーラン・ラウトと稱する不思議なる漂流生活者である。彼等は、海上漂流者の部族である。是れに屬する人間の頭數は多くないが、其の擴延せる範圍は頗る擴大で、北は緬甸から南は濠洲大陸の北岸にまで及んでゐる。彼等は、馬來人が馬來半島に來ない前に、馬來半島に住居した非常に古いチャクン族の一部であると認められてゐる。チャクン族は、現今半島の南方及び西南方に居住してゐる。チャオ・ナム

族は、其の身體的特色に於ても言語に於ても甚だしくチャクン族に似てゐる。但し、此の兩部族は太古に分れ／＼となつたものである。

チャオ・ナム族は、一時新嘉坡及びヂョホア(Johore)附近の小島小灣に於て最も多數に生活した。彼等は殆んど無數の小部族に分れてゐるのであるが、其の中二、三の者は、其の苗字を附近に於ける小浦小灣の名から取入れてゐる。

チャオ・ナム族は、暹羅の海岸にゐる者も、漂泊者には相違ないが、さればとて無暗に遠く航海するのではない。彼等の運動は、大體に於て季節天候等の自然現象に支配されてゐる。然し彼等の中には、或氣に入つた場所を一種の根據地とし、或程度まで定期に出入してゐるのがある。彼等の有する貧弱なる財産は、悉く、彼等の住宅たる小型帆船に積載されてゐる。船は、長さ二十呎で、夫婦と五、六人の子供、一疋の猫、一、二疋の犬、物好きの有する一疋の猿を運ぶには充分である。彼等は、不斷船を家とすれども、船の建造修理のために、或は天候不良の場合には、陸上生活を餘儀なくせらるゝことがある。陸上に於ける彼等の家といふのは、亂雜に樹葉を以て覆へるものたるに過ぎない。

ローガン(Logan)、トムソン、(Thomson) スキート其他諸氏の研究に依ると、チャオ・ナム族は、モン・アナム族の系統を引いてゐるやうである。唯、不思議なのは、其の割合に蒙古人的の特色が

少ないこと、否、或場合には殆んど其れが認められないことである。頭は短頭顱で、眼は時として少しく斜めに且つ多くの場合はぼつちりと開いてゐない。然し、鼻すぢははつきり通り、顎は突出でゐる方ではない。頭髮は真直で且つ漆黒である。成人せるチャオ・ナム人には、普通僅少の髭、髻がある。骨格は概して良好であるが、幾十生代となく船上生活を送つたために、足は一見しても分るほど發育が遅れてゐる。彼等は徒歩旅行者としては全く駄目だと言はれてゐる。平均身長は、暹羅人の其れと略ぼ同一である。皮膚は粗硬で淺黒く、種族全體として誠に痛ましくも見苦しい皮膚病に悩まされてゐる。以前にはチャオ・ナム族とセマン族とを同一種族なりと考へてゐたが、其れは間違で、偶然の機會に於て接觸したところのある外、兩者の間には何等人種的關係はない。

チャオ・ナム族の宗教は、ぼんやりした形の精靈崇拜である。彼等は至上の存在とか、唯一神とかいふ觀念を持つてゐない。併し、死後の存在を信じてゐる。而して、死者の靈は、任意に各處を訪問し、或場合には人間を悩ますものと信じてゐる。新に出生した子供に、靈魂を持つて來ると信せられてゐる。蜥蜴（飛脚する）は、鱧、鰐魚と同じく神聖視されてゐる。雷、暴風の靈の如き惡靈は、弘く其の存在を認められてゐるばかりでなく、食物を供へることに依て慰宥されてゐる。今日はチャオ・ナムの有する魔術療法に關する知識は、彼等の接近する馬來半島の他の種族から習得したものである。

出産は船内に於て行はれる。普通一、二人の他の婦人が、出産の場合、産婦の手傳ひをする。分娩後約三十分、産婦はマンガローブの葉を煎じて造つた煎劑を一服し、海水に浴すれば平常の通り仕事に服する。嬰兒は脊部に結び付けられ、哺乳等必要な場合に前に下される。

チャオ・ナムは、結婚披露の宴を張ることもある。然し多くの場合、彼等は何等儀式張つたことをせず、男が自らの船に女を同行することに依て結婚は成立する。一夫多妻は彼等の間に行はれてゐない。離婚は、其の意志に依て決定する。禁婚の範圍は、従兄弟姉妹にまで及んでゐる。

死人を埋葬するに當つては、何等の儀式を用ひない。新に埋葬せる場所の近傍には、幽靈出沒の懼れありとして餘り近寄らない。

チャオ・ナム族の言語は、馬來語、チャクン語、暹羅語の混合より成立つてゐる。中に就き、馬來語の要素が最も勝つてゐる。彼は全く文盲である。何等の文字を有さない。彼等は三つの數字に對する名を持つてゐるだけである。併し、暹羅人、馬來人の文明に接したる者の中には、十まで勘定する算術上の知識を得てゐる者がある。

彼等の親類であるチャクン人と同じく、彼等には半ば音樂的噪音、噪音的音樂に耽ることを楽しむの風がある。然し、特有なる樂器を彼等は持つてゐない。彼等は竹製の笛、其の他の樂器を彼等の隣族から輸入した。又歌謠、舞蹈に似たものを持つてゐる。而して思ひ掛けない漁獲、船の進水

などいふやうな祝賀の場合には是れを實行する。

男子の衣服は、狭い褌からなつてゐる。褌は、以前は樹皮で作られてゐたが、今日は外國輸入の綿布を用ひてゐる。同じく綿製の鉢巻を、彼等は頭に巻いてゐる。婦人の中には、馬來人と同じく腰巻とチャケットとを持つてゐる者があるが、殆んど是れを用ひないで、ふだんには、腰の下から膝の上まである綿布製の腰巻を捲いてゐるだけである。彼等にも嬌態を示して男子を釣らんとする本能がある。即ち、彼等は日頃洗はない、日に焼けて眞黒になつた身體をば魚齒、白色の木實、蟹足で作つた首飾、腕飾で裝飾し、編んでお下げにせる髪に貝殻の紐を結び付けてゐるなど、身體を飾るに相當意匠を凝してゐる。馬來半島の或部族間に見るやうな文身、顔面、身體の搔傷といふやうなことはチャオ・ナム族には知られてゐない。

武器、諸道具といふが如きものを、彼等は餘り多く持つてゐない。馬來地方のチャングル中に見る或種の植物は、彼等に魚を捕るに用ふる矛、網、吹矢其の他を製造するに必要な材料を提供する。彼等は又別に馬來人から或は盗み、或は物々交換に依て得た粗造な庖丁を持つてゐる。是れが彼等の身體を保護し、彼等が食物を得るために使用する武器、諸道具の全部である。耕作といふものを全然しないから、農具などは彼等に全然必要がない。

チャオ・ナム族は、海參、海龜の卵、樹脂、杖、沈香其の他を提供することに依て、煙草、衣服、

米其の他の生活必需品、養澤品を得てゐる。船舶用の帆、綱具、其の他の船具を、彼等は海岸地帯のチャングルから取つて來た材料で作る。

チャオ・ナム族に教育を施した場合、其の結果がどんなものであるかといふことに就て、折々實驗せられたるが、其の成績を見ると、彼等が知識文明を汲收消化し得る何等の能力をも持たぬことは明かである。彼等が義務を負擔し得る國民となり得ないことが、其れに依て證明されてゐる。彼等は今日數に於て非常に少ないが、次第に其の數を減じてゐると言はれてゐる。

(ロ) 馬來人

暹羅に於ける馬來人の口數は以前一百万以上であつたが、一九〇九年南部一帶の地方を英國に割譲したるがため、現今に於ては四十萬内外を算するに過ぎない。此の四十萬内外の馬來人中、大部分は南部暹羅に住んでゐるが、五萬内外は、チャンタブーン、アユティア、盤谷及び暹羅灣の東海岸地方に居住してゐる。是等東海岸地方に住んでゐる馬來人は、暹羅が馬來半島に向つて、過去に於て度々出した遠征隊が捕獲した者の末裔である。

馬來人の地盤が暹羅に出來たのは、比較的最近のことである。漂浪徘徊する馬來人の諸團體が、マラッカ (Malacca) を出で、始めて馬來半島の北部に流れてゐる諸々の河に沿うて遡り、同地方に於ける住民の抵抗に打勝ち、居住地を造つてから五百年以上をすら經過してゐない。是等の馬來人

は其の優秀なる戰鬪的素質を以て、勢力を隣接地帯に擴めた。彼等は、彼等の征服した地域の男子には割禮を施し、女子とは自由に雜婚した。其の結果、極めて短日月中に、馬來人とも暹羅人ともつかない多數の雜種を作り得た。何故にそんなに早く雜種が出来たかといふに、元來其の地方の土人は彼等と同じくモン・アナム族の末裔であつて、多くの點に於て、非常に能く彼等に似てゐるからである。事實、言語、衣服、宗教を取除けば、今日南部暹羅に住んでゐる馬來人と、其の地方の暹羅人との間に、殆んど何等の相異も認められない。身體的には、兩者全く同一である。雙方其の顔色が種々の度合の茶褐色である。丈は何れも高くない。どちらもほつそりしてゐるが、引締つた骨格を持つてゐる。短頭顱で顎が出張り、頭髮は黒く直立し、眼が斜めで褐色を帯び、頬骨が隆起し鼻が扁平なる所、どちらも前印度地方に於て普通に見る蒙古型の總の特徴を持つてゐる。以上述べた諸點に於て、南部暹羅に住する馬來人は、眞正の馬來人と幾分趣きを異にしてゐる。眞正なる馬來人の血管中には、彼等が種族的發達の素因をなせる印度人其他外國人の血液が這入つて居り、其れがため、彼等が本來持つてゐた蒙古人的特色は多少の變化を受けてゐるのである。

暹羅の馬來人は悉く回教信者である。然し、彼等が回教に改宗する以前實行してゐた精靈崇拜——其の崇拜は佛教(婆羅門教の誤りか—譯者)の被包で覆はれてゐた——は、改宗後と雖、動かすべからざる根柢を彼等の精神生活中に持つてゐる。此の現象は、奥地に棲んでゐる馬來人中に於て特

に著しく見られる。是等奥地では、住民は活物崇拜^{アニミズム}を内面的の宗教とし、回教は外に塗付せられたニス^{ニス}のやうなものに過ぎない。然し、外面的には、暹羅の馬來人は、どこ迄も回教徒である。回教徒たる彼等は、多くの教區に分たれて居り、各教區にはスラオ(Slao)と稱する禮拜堂と僧侶の一團とがある。割禮、婚姻、葬儀等は何れの地方に於ても回教式に行はれてゐる。是等重なる回教的儀禮を外にしては、人民は一般に無數の超自然的存在(精靈といふが如き)に依て支配されてゐると言つても差支へない。彼等の信する所に依れば、此等超自然的存在は、彼等を圍繞し、彼等の爲す最も些末なる行爲にまで、善かれ悪しかれ關係を及ぼすものである。暹羅の馬來人が回教に改宗する以前彼等が墮落した婆羅門教を信仰生活中の一部分に取入れてゐたことに就ては、是れを證明すべき多少の證據がある。彼等の征服者は、彼等に回教的信仰を強制したが、其れと同時に婆羅門の諸神の勢力を彼等の中より驅逐することは出来なかつた。婆羅門の諸神は、正統回教信者の眼から見ればアフリット(Afris)、ジン(Jins)といふが如き邪神と同じで、是等を信仰した者は、死と永劫の責罰とに値ひしたのである。所が、此等婆羅門教の諸神は、精靈界の中心に立ち、今日馬來人の、尊信を博してゐる。要するに、婆羅門教の諸神、並びに是れに附隨する幾多の神々の回教的馬來人に對する關係は、其等が佛教徒たる暹羅人に對して有する關係に異なる所がない。佛教徒たる暹羅人も單純に佛教をのみ信仰してはゐない。

暹羅の馬來人は農民であり、漁夫である。彼等は、馬來半島に於ける、最も豊饒なる土地の或部
分を所有してゐる。而して、彼等の漁區は、多種多様の魚類に富んでゐる。彼等の農耕法、漁獲法
の暹羅人の其れと異なる所は、例へば諸道具に就て言へば、大體同一であるが、唯、其中二、三の
品物の形が違つてゐるとか、彼等が農業、漁業に従事するや、暹羅人よりは一層多く不可見の精靈
を怖れ、其の支配を受くるとか、或は超自然的の精靈を餘計に畏怖するがため、此等を慰撫するた
めに一層入念な努力(供物其他)をしようとかいふやうな點にある。

暹羅馬來の普通の服装は、三枚の著物と言はんよりは、寧ろ三枚の布片と言つた方が可なるもの
よりなつてゐる。男子は、第一に、膝に達する腰巻を纏うてゐる。次に、撚つてベルトの如くにし
て身に付け、或は肩に引掛ける布片を纏うてゐる。最後に、頭の周圍に頭布を纏うてゐる。婦人の
場合には、上記の三布片が幅廣くせらるゝだけである。即ち腰布は膝までなく、足首に及び、次の
布片は兩腕の下から胸部を越えて臂部の少し下まで達し、第三の布片は、單に頭と首とを覆ふに止
まらず、肩まで隠すことになつてゐる。男子は剃髪するのが普通で、女子は髪を延し、結節として
頭上に飾つてゐる。暹羅馬來は、元來多毛性でない。而して、頤などに僅かばかりでも毛を生ずれ
ば引抜くを習ひとする。祭禮などの際には、男子は辨慶縞のサロン(腰巻)を著け、女子はげく
しき光澤を有する絹物を身に纏ひ、頭髮は花を以て飾る。回教で嚴禁されてゐるに拘はらず、婦人

等は、彼等の衣服を鹽梅することに依て、美しき曲線美(美しいのが往々にしてある)を示し、もつ
と南の方では到底認容せられない仕方に於て腕と首とを、あらはに外部に誇示せんとすること屢々
である。他の回教社會に於て置かれてゐる社會生活上の制限(女性に對する)は、暹羅馬來の女性の
間には行はれてゐない。彼等は嚴格な儀式の場合を除く外、男子と殆んど同じく社會の各方面に自
由に出入し、随意に振舞つてゐる。儀式の場合には、僅か一時間内外前までは、公共水浴場で、殆
んど一物も身に付けず、男女混交して遊び戯れてゐたと思はれる者が、嚴重に男子から區別され、
眼の附近まで注意深く體軀を覆うてゐる。

ぶたくしたジャケットとズボン(又は光彩豊かなるサロン)は、馬來半島南部に住する馬來人男
子の代表的服装であるが、暹羅馬來人の間には殆んど見られない。左様な服装をしてゐる暹羅馬來
人があれば、其れは富裕なるものに於てである。

諸處に散在する馬來人の社會中に於て、回教の勢力の微弱なること、暹羅に於ける馬來人社會の
如きはない。然し、賭博と飲酒とを禁ずる回教の教へは、暹羅馬來の間に於ても相當勢力がある。
少くとも、東海岸方面の、所謂わすれしつてゐない馬來人中には、一般的に、此の禁制が守られて
ゐる。従て、此等の人々は、統御し易く、附近の暹羅人等よりは犯罪の傾向も少ない。西部に住ん
でゐる馬來人の中には、タミル人(Familis)の血が大分混入してゐるが、彼等は回教を外面的に尊信

する點に於ては頗る注意深い、内面的には是れに違背するやうなことのみにしてゐる。此の傾向は市街地に於て最も甚だしい。恐らく西部の市街地に住んでゐる馬來人ほど、墮落してゐる馬來人の集團は、諸々方々にある馬來人の社會中に於てもなからう。從來、否、或程度までは現在でも、馬來人と言へば猪突的勇氣と、陰謀的兇暴性とに富むと言つて、是れに關する物語は、英本國の子供等に能く聞かされたものであるが、不思議にも暹羅産の馬來人間には、そんな武士的な所はない。彼等も時に或は名譽に關する問題を武力、腕力で解決せぬことはないが、そんなさつぱりした事は寧ろ稀れで、十中八九は何時までも法廷で嘔み合ふやうである。

ハ) クメル族

クメル族(東埔寨人)は、主として佛領印度支那に於ける東埔寨本部の國境に面せるウボン、コーラート、ブラーチム等の諸州に住居してゐる。然し、小なる彼等の集團は、其の他の地方に於ても發見される。中部暹羅の西方に於て殊にさうである。昔、暹羅との戰爭に依て捕虜となつた東埔寨人は一定の地域に植民させられ、土地を付與された。彼等は、其の代償として、征服者に對して兵役其の他の義務を負ふたのである。中部暹羅に於けるクメル人の部落は、斯の如くにして出來たものである。

戰爭に於て捕へられ、暹羅人の間に持來された東埔寨人の末裔たる現今のクメル人は、其の服裝

習慣、宗教等に於て、暹羅人と異なる所がない。兩方の種族を區別する外面的の特徴は、クメル人の暹羅語のアクセントの一種異様なることである。彼等は、暹羅人の中に、既に數世代に互つて生活せるに拘はらず、暹羅語の極めて複雑なる變化に習熟せず、異様な發音をなすを常とする。

ウボン、コーラート兩州は、昔、東埔寨本部中の邊在地域たりしものを包括してゐる。現在の國境は、ブノム・ダン・レク山脈の頂上に沿うてゐる。然し、該山脈中にある諸山の北側(即ち暹羅の側)には、到る處にクメル時代の神祠、堤道、貯水池、城壁を以て圍繞せられたる市街の遺物が疊々として横はつてゐる。此等を見ると、此の地方には、一時頗る多數のクメル人が生活してゐたに相違ない。處が、現在では、四十萬内外の人間がゐて、それ等がコーラート高原の南縁に沿へる村落中に散棲してゐる。此等の人間は、東埔寨語を用ひ、暹羅語を第二國語として使用してゐるといふ以外に、彼等と暹羅人とを區別することは出來ない程兩者の間に相似の點がある。彼等の服裝、宗教、習慣、各種の儀禮は殆んど全く暹羅人の其れに一致してゐる。一體、東埔寨の歴史には、充分判明しない點が澤山あるが、現今判明してゐる程度の同國の歴史に就て知つてゐる著述家の中には、東埔寨人の體軀には、印度人又は高加索人、又はエリリアン人の特徴が認めらるゝと管々しく書いてゐるのがある。蘭貢、盤谷、其の他後印度の都會に於けると同じく、東埔寨の首都に於ても、太古より遍歴癖ある印度人が立寄つて其處に住つた關係上、外國人の血液が其の地の住民の中に認め

られるかも知れないのは無論事實であるが、例へばブノム・ダン・レク地方の東埔寨人に歐羅巴人の血が通つてゐるなどいふことは、取消す必要もない附會な説である。

近代に於けるクメル人は、太古印度の南部海岸より齎らされた婆羅門教及び是れに附隨せる文化の影響を蒙り、其れがために大なる發達の階梯を経て、頗る高度なる文明に達し、一朝にして奈落の底に落ち、發足した時と同じやうな原始野蠻な状態に逆轉した先祖の後裔である。祖先の進歩と發達とを證明するに足る彼等の遺物は、彼等が盛んであつた時に建設され、而して今日吾人の目撃する神社、其の他の建築物の殘骸である。現代のクメル族は、壯大なる祖先の遺物中に生活してゐるに拘はらず、此等の造營物が如何にして出來たか、如何なる意味を有するかに就て知識を持つてゐないのみならず、傳説すらも持つてゐない位である。クーカン(Kukan)に於ては、今位置を奪はれてゐる地方酋長の家族に屬する二三の者が、相當の活計を樹てゐるのみで、他の住民は殆んど全部小農民で、チャングルを伐採して得た地積又は大平原中に、唯僅かばかりの土地を持ち、生活の資を得てゐるに過ぎない。此等の平原に於ては、今は全く忘れられた灌漑、農業に關する知識を以て、クメル人の祖先が、大なる人口を支持するに足る食糧を得てゐたのであつた。

(ニ) モン 族

緬甸人は、モン族をタライン族と呼んでゐるが、彼等は今日王都の上と下なるメナム・チャオ・ブ

イヤ河の兩岸に部落をなしてゐるが、ラーヂブリー、ナコン・チャイシ内に散居してゐるからである。相當數のモン人が盤谷市其れ自身の中に於ても生活してゐる。此等のモン人は、暹羅と緬甸とが戰を交へてゐた當時、緬甸のテナッセリム(Tenasserim)州から、捕虜として連れて來たものか、然らずんば、緬甸人のために迫害を受け、是れを免れんがためベグ及び南部緬甸の他の地方から遁れて來た者の末裔である。捕虜又は亡命者として暹羅に來た者に對し、政府は耕地を與へた。其れが代償として、彼等は兵事上の義務を負はされた。此の點は、捕虜又は亡命者として同國に入込んだ馬來人、東埔寨人、其の他の外國人と同じである。彼等(モン族)は、與へられた土地に接壤せる村落に住居を定め、多くの場合に於て、同族出身の頭目の支配を受け、彼等に特有なる佛教上の儀禮を行ふことを許され、彼等自身の言語を使用するの權を與へられた。彼等の佛教は、暹羅人の其れと唯僅か異なるのみである。彼等の子孫は、彼等が嘗て占有したと同一の土地を占有してゐる。彼等並びに彼等の子孫は、彼等の嫌忌せる軍事上の義務を負はされ、其れがため當然享受し得べき社會的位置を得能はざりしに拘はらず、集團として、形に於ても、財産の點に於ても、大なる發達を遂げ、或者は官吏として相當の位置を占むるに至つた。かくてモン族は、今日暹羅に於ては、頗る富裕なる種族の一と考へられてゐるのである。十九世紀中、英國に公使たりし暹羅人にして、手腕と人望との點に於て、評判最も高かりし者の一人は、モン族出身者であつた。

自然の趨勢として、或種類の人民に對してのみ、特に軍事上の義務を負はしむるといふ法律は、暹羅國の要求と一致せざるに至つた。其の法律は、陸海軍に於ける服務を、暹羅全體の住民に負荷するといふ法律に変更せられた。かくて、モン族と暹羅人との融和を妨げた大なる原因の 하나가除去された譯である。であるから、モン人が暹羅人の間に汲收し、同化されてしまふの日が、茲數年の中に來るであらうといふことが期待されるやうになつた。緬甸に於けるタイイン人がさうである如く、暹羅のモン族も普通の暹羅人に比し、體軀が長大であるがため、それと見分けられることがあつた。其の他の點に於ては、モン族は身體的に暹羅人と異なる所がない。モン種族は、男女共、暹羅人と同じく縫込み(段々をつけるため)あるスカート(skirt)を纏うてゐる。唯モン婦人のスカートは暹羅人のよりは、一層、こつてりとしてゐる。モン種族中の貴婦人は、或場合には、體に喰ひ付いたやうなジャケットを著る。又彼等は、頭髮を燃つて一種特有なる髻を作り、頭の後方に戴いてゐる。

モン種族の家屋は、其の構造の點に於て、暹羅人の其れと多少異なつてゐる。而して、切妻壁が必ず東西に向いてゐる。暹羅人は是非東西に向けねばならぬとは考へてゐない。モン語は、村落に於ては、今日も尙ほ會話に使用され、寺院附屬の學校に於ては之を教授してゐる。然し、總てのモン人は暹羅語を話し、柬埔寨人が暹羅語を話す時のやうに、外國人らしいアクセントを交へない。

(ホ) ユアン族(即ち安南人)

暹羅に於けるユアン人の數は約六千で、主として東南部のチャンタブーン州に於て生活を營んでゐる。然し、別に盤谷の附近に住んでゐる者も少數ある。チャンタブーンに住んでゐるユアン族は、十七、八世紀の交、宗教上の迫害を免れんがために、安南より遁れて暹羅に這入つた羅馬加特力教徒の末裔である。盤谷附近に住んでゐるユアン族は、暹羅と安南とが、柬埔寨に對する支配權を爭へる時分、捕虜として連れて來た者の子孫である。チャンタブーンのユアン人は、迫害を甘受し乍ら信仰を維持せる祖先と同じく加特力教を信じ、盤谷附近に於ける彼等の同族も、大多數は是を信奉してゐる。史實に徴すると、暹羅に於ける羅馬教の宣教師は、捕はれて來る安南人捕虜をば甚だ容易に彼等の宗教に導いたらしく、彼等は其の際唯單に基督教の初歩を安南人に授けたのみならず、不思議にも、同時に軍事的教練を施した。斯くて安南人は、誠に憐れむべき奴隸の一團として、いやながら征服者の命に従つて干戈を取つたものが、宣教師の教育により、規律と能力とを備へたる軍人となつたのである。此の如き現象を見たる暹羅王は、安南人との戰爭に於て、敵兵を捕獲する毎に、是れを宣教師に渡し加特力教に改宗せしむると共に、軍事教育をも授けしめ、基督教的軍隊の中に彼等を編入した。國王モンクット(Mongkut)の如きは、治世の初期に於て、三千人の安南

人捕虜を一括して加特力教の宣教師に引渡したことがある。

安南人は、其の容姿骨格共に、頗る暹羅人に似てゐるが、宗教を異にするために、暹羅人に同化汲收されやうといふ何等の傾向をも示さない。彼等は、昔から用ひて来たぶか／＼した黄のズボンと上著とを用ひてゐる。其の點は男女共異なる所がないが、女の上衣は下に長く、長寛衣ガバインの格好を呈してゐる。男女共頭髮は出来るだけ伸してゐる。彼等は、安南語を用ひてゐるが、暹羅語も多少正則に話し得ないことはない。ユアン人の中には、軍人として高官になつてゐるものがある。併し、陸海軍人以外の上流階級に彼等の同胞を見ること稀である。

(一) ラワー族

ラワー族はルワー(Lu)族ともいふ。北部暹羅の西及び西南に位するボーダー山脈(Border R.)の中に住んでゐる山地部族である。彼等は、現在ラオ族、シャン族、暹羅人等に取繞かれ、此等の種族と接觸することに依りて、生活様式にも多大の影響を受けてはゐるが、彼等の容貌、言語、傳統等は彼等が明かにモン・アナム種族に合するものであることを證明してゐる。彼等自ら信する所に依れば、彼等の遠祖は、一時中部暹羅の諸谷、諸平原を悉く占領してゐた。而して、吾々は、彼等の此の傳統が信用するに足るものと考ふべき理由を持つてゐる。

ラワー族は、今日一種族の斷片に過ぎないといふ觀を呈してゐるが、彼等が今日の如く凋落するに至つたのは、一朝一夕のことではなく、漸を追うて起つたことに違ひない。而して、彼等の此の漸

衰的凋落は、餘程以前に完了したものと信せられる。何となれば、ラオ・タイ族が、中部暹羅を席捲した際に、多少の文化を持つて其處にゐたに相違ないと思はれるクメル族と、彼等を結付ける何等の歴史的事實をも彼等は持つてゐないからである。彼等は、人種的にはクメル族の遠い縁類である。而して、此のクメル族勃興の波は、一時其の絶頂に達し、其の反流が暹羅の中央に横流し、其處を占領してゐたのである。彼等が、彼等の祖先をクメル族と結び付けるべき何等の史實をも持つてゐない所を見ると、彼等は其の反流前に散亂し、山間にもぐり込み、外略に於ける大なる歴史上の渦巻とは全く没交渉にして暮してゐたものらしく見える。彼等は、彼等の保持せる精靈崇拜に粗雑なる佛教的信仰を輸入混合し、最近に至つて少數のシャン族の言語を其の言語中に採用した外は、最初に起つたクメル文明、其れに引續いて起つたラオ・タイ文明が、彼等の周圍に一進一退したことなどは全然没交渉で、彼等の祖先と同じ粗野原始的な生活を續行したものである。

ラワー族は、暹羅人よりは幾分身長低く、膚色黒く、蒙古人種的特色も稍々少く持つてゐる。彼等は暹羅人流に頭髮を刈る。而してぶた／＼したズボンを著用し、シャン人と同じ頭帕布を戴いてゐる。

後印度に於て、東經約九十八度乃至百四度、北緯約十七度乃至二十五度の間に横はり、森林を以

て覆はれたる連山谷地よりなれる地方——其の地方をば英、佛、支、暹四國が分割領有してゐる——の何れの部分たるを問はず、其處にあるデヤングル道路、馬道に依て旅行する人は、彼等の徑のどの地點かで、或は脇道から出て来る所で、重苦しい荷物を背負ひ乍ら一列になつて歩いて来る青装束の人間——其れは幾分小型の——を見るであらう。此等の人々は、何れも、可成り丈の高い籠をば前額に捲き付けた紐で脊中に支へ、腕をば彼等の前に打振り乍ら、口笛でも吹いてゐるかの如き息使ひをして歩いてゐる。此等は、右に記載した廣大な地域に重疊せる山脈の或は頂上に、或は支脈に於て居住する無數なる種族の一に屬する女共である。而して彼等の背負うてゐる荷物といふのは畑圃に於ける收穫を家に運搬せんとしてゐるのか、然らずんば收穫せる物産をば、谷地のシャン族、ラオ族の村落に於て定時に開かれる市場に運搬せんとするのである。彼等は、種々の部族から出て居り、其等の部族中には、往昔幾分種族上の關係があつたのもあれば、全くそんな關係ないのもある。然るにも拘はらず、其の外觀が彼此酷似せるがため、不注意なる觀察者は、例へば、バーモ（Bhamo）の附近から來たカチン族（Kachin）の一團をば、ムアン・ナン（Muang Nam）附近のカチンと取違へることがある。此等女共の衣服の材料の根本は、殆んど、總ての場合に於て黒青色の綿布で、彼等は是れを以て、蘇格蘭風のキルト又はスカートを作り、大小のジャケットを作り、頭圍布となし、ゲイトルを作る。吾々が、一の部族の女を他の部族の女と區別すること出来るのは、此

の青綿布の上に引いてある線、付けてある飾、腰、首、膝等に巻いてある籐其の他ワイヤー、頭帕布の結び方、一種特有なる髪結び方等あるがためである。ラワの婦人も亦此の青服を纏うてゐるが彼等は通例其のスカートに細く白い横線をいくつか引いて目立つやうにしてゐる。彼等は、又長寛衣を略式にしたやうなジャケットを着てゐる。併し、普通頭帕布を戴いてゐない。彼等は頭髪を伸し、無雜作に是れを丸め頭の後方に戴いてゐる。

ラワー族は、山に陸稻を作る。寧ろ憶病で、平和を愛好する人種である。人口は幾分減少してゐる。ラワー人は、魔術と精靈崇拜とを混合せるものを宗教としてゐる。彼等の宗教思想は、佛教の托鉢僧が彼等の處に廻つて來るので、更に複雑面倒にせられてゐる。彼等は本來貧乏であつて、貧乏である限り彼等は一人の妻を以て満足してゐる。然し、或偶然の機會に於て大なる富を蓄積することあれば、思ひ切つた形の多妻主義者に變化する。市場に行くことが彼等の最も愉快とする所である。彼等は其の頭目に依て統治せられ、頭目は政府を代表してゐる。彼等の所謂外界といふのは暹羅政府の林務官、收税吏であつて、其れ以外に彼等は廣い世間なるものを知らない。彼等の家は大きく、不思議なる構造を持つてゐる。大體に於て竹を以て造り、家根は葺を以てふいてある。内部は名狀すべからざる程不潔である。ラワー人は、鐵を製鍊する術——最も原始的なやり方ではあるが——を知つてゐる。而して割合に旺んに犁頭、庖丁、小刀其他の金物類を製造し、近隣の市場

に於て賣つてゐる。

(ト) カチエー族

カムク、カメト、ラメト (Lamut)、カビット、カホク、バイ (Pai) 等カチエーの支族は、一部分北部暹羅の東部に於けるムアン・ナーンの山嶽中に、併し其の大部分は、其れに隣接せる、佛國の保護領たるルーアン・ブラバイン、チエン・カウン (Chiang Kawng) に住んでゐる。ラワー族の棲住してゐる山から大面積の地方に依て分離されてゐるに拘はらず、ラワー族に似てゐる。カチエー種は又、彼等の北約四百哩のサルウキーン河とメーコーン河との間の土地に住んでゐる。ワ族 (Wa) 並びに北西三百五十哩の處に住んでゐるタウン・ペン (Tawng Peng, Tawng Paing ともいふ) の山々に住するバラウン族 (Palungs, Rumai ともいふ) とも種族上の關係を持つてゐるが如くに見える。バラウン族と同じく、カチエー族をモン・アナム族の部族と見て居るものがあるが、其れは正當なる見方である。ラオ族の物語中には、ラオ族とカチエー族とは、ルーアン・ブラバイン附近に出来た二箇の南瓜から生れた、一人の褐色人と同じく一人の黒人とを祖先としてゐる。此等の黒人、褐色人は、種族を造り出すには是非共必要であるとせられてゐる女性の助力なしに二つの種族を作り出したと謠つてゐるが、此の如き傳説あるにも拘らず、前記の見方は正當である。

カチエーの諸支族に屬する住民の到達してゐる文明の程度は、各支族とも同一でない (諸支族を

暹羅人は、カ又はカチエーと總稱してゐるが、カ又はカチエーは元、奴隸を意味してゐた)。カチエーの或支族は、ラオ人、暹羅人と長年月間親密なる交渉を保つて來た關係上、佛教其の他此等隣族の有する風俗、習慣等を取入れ多少の進歩を示してゐる。然るに大多數である他の支族は、彼等の祖先と同じく無智蒙昧なる生活を續けてゐる。彼等は、元來ラオ族の領分内に棲んでゐたのであるが、ラオの頭目等は、彼等を目するに、人間より少し以下の動物である、支配階級に對しては一種の動産に過ぎないと見、彼等を賣買するを得るは勿論、必要と信ずる場合には勞働を強制し得ると同時に殺戮しても差支へないものと信じてゐる。ラオ人がカチエー族を殺したといふことは、取りも直さず、ラオの頭目の有する有價値なる財産を破壊したことにほなるが、殺人的行爲を敢てしたものは考へられなかつたのである。カチエー族は、多くの場合に於て、ラオ族より多數であつたから、ラオ族の虐待に對し、屢々反抗を試みたが、苦もなく壓抑せられ、其ればかりでなく、心得違ひをなし、柔順の徳に反する行爲を敢てしたる廉で、其の都度殘忍なる懲罰を與へられた。然し殘虐なるカチエー人待遇は、今日は最早過去の事件であると言つて差支へない。今日カチエー族は、暹羅に於ける他の住民と全く同等に待遇されてゐる。殊にカムク支族に屬する者の中には、チーク林に於ける馭象夫又は樵夫として勞働に従事し、相當な金を作り、財産を蓄積してゐるのがある。唯併し、ルーアン・ブラバイン及びメーコーン河の東方にある一帯の地を割讓したるがため、暹羅に

於けるカチエー人の口数は頗に減じた。其の代り、暹羅に於ける森林伐採業のため、曩に佛國に割譲した地方より比較的素質の良いカチエー族が西部に移住し來り、ナーン縣(寧)に於て、セトルメントを作り、此等セトルメントの数は、今日次第に増加しつゝある形勢にある。カチエー族は、ラオ族、暹羅人よりは身長が著しく短かく、膚が黒い。加之、ラワー人と同じく、彼等が蒙古種族であることの證明になるやうな積極的特徴がない。彼等の身長が短かいこと、皮膚の色が黒いこと、は観察者を導いて、ネグリット種族と同一であると結論するに至らしめた。然し彼等の容貌、生活上の習慣を、眞のネグリットである、例へばセマン族の其れに比較すれば、此の如き結論が全く間違つてゐることが明瞭である。彼等の言語は、ラワー族の其れに酷似してゐる。兎に角、雙方の言語の一般的構成法は、殆んど同一である。彼等の間には文字がない。然し、或傳説に依れば、一時アルファベットが彼等の間にあつた。唯一人のカチエー人が是れを知つてゐるのみである。所が或事件に就て、其の人が激論してゐる最中に急に死に、其れがためアルファベットも不幸にして失はれた。彼の同族者間で、最も知識に富み、賢明の譽ある人々が、此の大學者の所持せる知識の幾分を挽回しやうと思ひ、彼が肉を啖つた。然し、學問のためにした此等特志家の高尚な努力は、遂に酬いられなかつた。其れがため、カチエー族は、今日も文字を持つてゐない、と傳説へられてゐる。

カチエー族男子の衣服には、極めて簡單なものと、複雑なものとがある。簡單な衣服といふのは、手製の綿布で、後方から見ても其の存在をすら疑はれるやうに小さく、唯申譯に前方を隠すに過ぎない褲からなつてゐる。普通青年の着用してゐる衣服といふのは、先づそれである。然し相當な位置と収入とがあるやうになれば、シャン種族のドレスを多少の程度に真似た、ぶたくしたズボン短かい上著、頭帕布、帶等完全に機つた著物を着用するやうになる。勿論左様にしやれた生活を希望せず、野蠻な山上生活で満足するの徒は、前述の褲で事足り、唯祭禮に出るとか、肌寒い晩に少し體を温めたいと思ふ場合に、其の補充として短かいチョッキを身に著ける位のことである。所が、此のチョッキは、彼等の裸體を充分に隠さないのみならず、彼等の教育を受けてゐない心が、人に示すことを愧と思はない體の部分を一層露骨に盛上がらしむるが如き結果になる。開化せるカチエー部落では、ズボンを著けるといふことが普通になつてゐる。

カチエー族の婦人は、山地住民に取ては傳來的ともいふべき青色スカートを着用してゐる。而して、多くの婦人は、それを足首まで伸してゐる。縁には幅廣い線が引いてあつて、スカートの上部を飾つてゐる。其れ以外の衣服の部分は、割合に簡單である。同族中でも、開化の程度の遅れてゐる支族、例へばカホクの如きは、漸く膝まで達する、蘇格蘭のキルト風のスカートを着用し、其の中には白、赤の紐が飾りとして織込まれてゐる。婦人の誰れもが時折着用する短かい青色のチャケ

ツトは、普通赤白色の線を有し、其れが胸部から首の後方にかけて廻つてゐる。女は銀製の腕飾りへヤピン、耳飾りを著けてゐる。頭髪は切りこそせね、俗におかつばさんと言つたやうな式に、上の方にたくり上げ、頭为天邊に戴き、頭布を以て是れを覆うてゐる。然し是れは外出する時の話であつて、家庭内に於ける彼等は此等衣服の全部とは言はれないまでも、其の大部分を脱ぎ棄ててしまふのである。是れは勿論家庭内に於ける



第二四圖 パン・イカチエー人

自由ならしめんがためである。カチエー族は最も開化せるカムク族ですら、清潔法といふ

ことは一つの餘計なる道樂でもある如くに考へ、決して是れを實行しない。

佛教を採用信奉してゐるカムク族を別とすれば、カチエー族の宗教は、犠牲を提供して惡靈の害を免るゝことに存する。彼等の信ずる所に依れば、此等の惡靈は、間斷なく彼等を取巻き、彼等を

監視し、行往坐臥を見守つてゐる。而して此等の幽霊群は、死者の靈の中から驅り集められ、其の數無限なるのみならず、災害の源は此等幽霊中の何れかゞ等閑視せられたことにあるのであるから此等無数の幽霊の唯一つだに等閑にせざらんことは最も必要なことで、従て惡靈の宥慰といふことは益々殖えて来る。大抵の村落には會場の設けがあつて、其處で鶏、豚、牛等の家畜が屠殺され料理され、靈前に捧げられて後、會衆一同是れを快喫快食し、或は部落民全體の幸福のために、或は何等か災害を蒙り、其れがために窘窮し、會衆一同の祈りを必要とする者のために祈る。どの靈が、どの人に、いつ害を加へたかといふことは、傳授を受けたものが、一本の棒を立割り、其の纖維を精細に検査すれば分ることになつてゐる。

カチエー族の村落は、山脈の絶頂にある。家は低く深い。木材と竹とを以て造つた、割合に頑丈なる建物である。床は地面より二、三呎高く、家根は草を以て葺いてある。結婚は、理論的には、物と人間との交換である。然し、實際に於ては、結婚の當事者は、結婚に關する諸事萬端が、表せらるゝ以前に、結婚生活同様の生活をなせる經驗に基き、相互、充分に了解してゐるのを例としてゐる。結婚生活前に自由戀愛を實行する他の部族に於けるが如く、結婚後不義を働くことは殆んどない。カチエー族は、殆んど醫術上の知識を持つてゐない。二、三の草根木皮の性質效用に就ては知つてゐて、此等は或病氣を治癒するためには使用されてゐる。然し、どんな病氣でも、是を治

すためには、或は犠牲を捧げ、或は管楽器を吹奏し、或は口笛を鳴し、或は歌ひ、或は舞ひ、或は其の他の呪ひを爲し（此處に書いたやうなことは、多少の相異こそあれ、後印度のどこにでも行はれてゐる）病氣を惹起したと想像さるゝ所の悪靈を祓ふといふのが常例である。死者の屍は、必ず埋葬せられる。埋葬の場所は概して、村落を設置するため伐り開かれた開拓地のふちに近きチャングルである。埋葬に附帶せる儀式は簡單で、屍體から悪靈を祓ひ、屍體に對し敬意を拂ふ一の方法として、鯨飲し、馬食する。是等が儀式中の重なるものである。カチャーの支族は、何れも森林に覆はれてゐる山の側面を一時開拓して農場を造り、其處に玉蜀黍、米、黍、少許の煙草、其の他の農産物を作る。主作物は米である。開拓地には一回、時としては二回作するのが常で、其の後は耕地を他に變更する。彼等は巧妙なる漁師で、又係蹄で鳥獸を捕へることに巧みである。

(チ) チョン族

チョン族は、チャクタブーンの北に横はれる山脈中に住んでゐる小さな部族である。而も、彼等は各方面に散在してゐる。生活は、甚だしく原始的の状態にあり、彼等は定住地を持つてゐない。樹脂、蜂蜜、木油、籐の如くチャングル中に於て發見せらるゝものを集め、暹羅人を通じて是れを食料品と交換すること主として生計を立てゝゐる。彼等の習慣、信仰、言語には、カチャーの其れと共通なるものが澤山にある。或著述家は、彼等をネグリットーと同一だと言つてゐるが、モン・ア

ナムの一部族とした方が恐らくは當を得てゐる。

第五節 西藏—緬甸族

(イ) メアオ族(メオ族)

メアオ族の人民に始めて出會して、吾々の受くる印象は、彼等が後印度の他の山地住民と頗る其の趣を異にしてゐるといふことである。即ち此の地方を旅行する人の眼に馴れた、裸體に近い格好をしてゐる男子、一般に不潔で、唯僅かばかりの衣類を身に纏ひ、汚れたるモンゴリア的特色のある顔と、だらしなき様子とを有する婦人の代りに、清潔で、はつきりした、かしこさうな顔と、孜孜として勞働に従事する習慣とを有する、モンゴリア的特色の割合に少ない人間に邂逅したやうな氣がある。メアオ族は、十一の支族（或學者は十二といふ）に分たれてゐるが、此等支族中の大部分は暹羅にはゐない。彼等は、長い間接近してゐたためか、雲南の支那人とは、多數相似の點を持つてゐる。其の最も重なるものは、彼等の使用する言語、簡略せる辮髮、衣服等である。婦人の衣服は、支族を異にする毎に、非常な相異を持つてゐる。特に支那婦人を模倣してゐると思はれる點がない。男子は、ぶたくしたズボン、短かい上衣、腰帶（腰帶には、時として刺繡を施せる總が付いてゐる）大型の青色頭帕布（是れは、きつちり頭にはまるキャップに代ることがある）を身に纏ひ、大な

るポケットの代用たる刺繡付きの袋を下げてゐる。多くのメアオ族は、刀と弩(いしゆみ)とを携帯してゐる。婦人は、下は膝の邊まで隠れる襪あるスカート、縁に刺繡を施し、袖口は手首まで達する前疊みのコート、種々の色彩を配合せる頭帕布を身に纏ひ、棘の刺さるのを妨がんだため、足を布で捲いてゐる。婦人は又、彼等の頭髪を丸めて頭上に戴いてゐるが、普通は頭帕布に隠れて見えない。マツ



第二五圖 パーバ縣に於けるメア族の男女

カーシー(Me Carthy)の語る所に依れば、一支族中の婦人は、結髪に多大の注意を拂ひ、蜂蜜を毛髪に塗り、兩三年崩れることのないやう固く結ぶといふことである。婦人は貴金屬を身に纏ふことが少ない。併し男女共、支那文字を刻める下げ飾りを有する首飾りを付けてゐることが往々にしてある。

佛領が、メーコーン

河を超えて暹羅の方に延びて來たので、暹羅は以前持つてゐたメアオ族の一部分を失つた。然しナオン縣及び北部暹羅の地方には、尙ほ少數のメアオ部落が残つてゐる。加之、メアオ族に屬する諸支族の西南下運動は、既に久しく行はれて居り、尙ほ引續き行はれつゝあるから、暹羅の境内には絶えず新しい彼等の部落が出來つゝある。

メアオ族は、概して彼等の達し得る最高の山嶺、又は其の附近に家を構へてゐる。家は、木材壁又は土壁を用ひ、石疊みの床を有する堅牢なる建築である。彼等は、ぞんざいな寢床架、腰掛、卓子を持つてゐる。此等はカチャー族の屋内に於ては普通見ざる所のものである。彼等は、彼等の村落のある山の側面になる森林地を伐開いて、其處に米、玉蜀黍、煙草、大麻、阿片、各種の野菜を作る。彼等は、牛、山羊、數頭の小馬を所有する。婦人は、家庭内にあつて、大抵は機織、刺繡等に追はれてゐる。此等勞作の賜物中には、藝術的價值あるものが少なくない。メアオ族は、一夫一妻主義者である。彼等は、結婚前不規則的に同棲するを以て原則としてゐるが、彼等の結婚は、複雑入念の儀式を伴ふを常例としてゐる。彼等の宗教は、未開人に能く見る精靈崇拜である。儀禮としては、犠牲を精靈に捧ぐることに、其れに引續いて暴飲暴食が行はれる。斯の如き場合に飲む酒は、米を原料として醸造された頗る強烈にして、當りのひどいものである。死人に對しては葬禮を行ふ。彼等は、屍體の側に白色の雄禽を置く。是れは、死者の靈が極樂に行くを妨ぐる大蜥蜴を驅逐する

ためである。此の迷信は、吾々をしてメアオ族が、遠く西に、緬甸の向側に棲んでゐるチンボク部族 (Chinbok Tribes) と古代に於て種族上の關係を持つてゐたのではないかと疑はせる。メアオ族のいふ所に従へば、彼等は祖先の時代に文字を持つてゐた。然し時代の經過と共に失はれた。彼等が現に持つてゐるのは支那文字で、小数の物知りが是れを利用し得る。彼等は又、支那曆を用ひてゐる。メアオ族をモン・アナムの分派であると論斷するに就ては、何等の理由も發見することは出来ぬ。反是、彼等の言語、習慣、或程度まで彼等の外見は、彼等が西藏—緬甸族に何等かの關係を有するものではないかといふ想像を吾々に抱かしむる。其れで、今日學者は、彼等を西藏—緬甸族の一部族としてゐるが、尙ほ調査を進むれば、此の如き結論が全然間違つてゐたといふことになるかも知れない。

(ロ) ムーソー族

ムーソーも、メアオ族と同じく西藏—緬甸族の一分派と看做されてゐるが、其の居住區域は非常に廣漠たるものである。彼等は、自らを呼んでラフー又はラフーナと言つてゐる。ムーソーといふのは、多分此の部族に附けられた支那名の一つが傳訛したものである。彼等が搖籃の地は、恐らく西藏であつて、彼等の傳説に従へば、彼等の祖先は雲南省大理府の南、西藏の國界から程遠からざる所にムーソー王國を樹立した。種族間に於ける内部の軋轢、異種族の攻撃、人口の激増

等種々の原因が、彼等をして後印度の北方に移住し、大面積の地域に亙り、此處彼處に集團を作らしむるに至つた。此等の集團は、更に集まつて一種の聯邦を形成し、聯邦の發達及び勢力の増加は遂に支那本國の嫉視を招くこととなつた。ムーソーと支那とは、遂に干戈の間に相見ゆることになり、兩者の間に長年月に亙る争闘が行は



圖六十二第 女男の族—ソームるけおにンフ・ンアム

れた。而して、其の結果は、十九世紀の初頭に於けるムーソー聯邦の破壊、住民の南下、(住民は、征服者の執拗なる追及壓迫を免れんがために南下したのである)となつた。南下運動の際、相當数のムーソー部族が暹羅に流入し、特にチェン・マイ地方(バーヤップ州ともいふ)の極北部ムアン・ファン (Muang Fang) に腰を下すことになつ

た。ムアン・ファンに於ては、有力なる一酋長が多年其の地方に勢力を張り、彼の威令は遙か遠隔の地にまで及んでゐた。

ムーソー種族の特徴を見ると、はつきりと蒙古人的で、骨格は頑丈で坐り善く出来てゐる。男子の服装は雲南人の其れと殆んど同一で、即ちぶた〜したズボンと上衣、褲(此の三者は總て暗青色又は



第七十二圖 ムアン・ファンにおけるムーソー族の子

黒色である)、頭帕布から成立つてゐる。婦人は腰部の廻りにスカートを結び著けてゐる。スカートは暗青色の布で作られ、雑多なる色の線が織込まれ、長さは膝の頭を充分に隠してゐる位である。盛装の際、婦人はアンダー・スカートを用ふる。彼等は又長い袖を有する暗青色又は黒色のジャケットで、體の上部を或程度まで包んでゐる。

此のジャケットは、襟の部分以外に刺繡を施してない。或支族の婦人は、右のやうなジャケットの代りに、前後に長い引きずりを有する上衣を纏うてゐる。ジャケットの前面は、一乃至二箇の大なるボタン(圓盤と言つた方が可なるほどの)で締められてゐる。此等のボタンは、祖先傳來のもので、非常なる貴重品であると考へられてゐる。(女も)暗青色の頭布を纏うてゐるが、頭布の部分には巧妙にこなして、如何にも大きな高い帽子でも被つてゐるが如き、一種特別な印象を與へるが如く仕組んでゐる。後印度の殆んど總ての山地住民に見る如く、男女共外出の際には、刺繡を施せる糧嚢を持ち歩く。其の中には通例、煙草、煙管、マッチ(マッチでない場合には燧石)、鏡、櫛、剃刀、毛抜、咀嚼用にする赤色石灰、檳榔子、カッチ、一二回分の握飯、その他體面を重んずる山中住民の生活に必要な品物が入れてゐる。男子は、貴金屬を體に著けてゐない。然し、婦人は、彼等の手首に銀製の腕飾り、大型なる銀製の耳飾り、少なくとも一箇の銀製首飾をなして外出するが如き不見識を敢てしない。加之、此等の諸飾——此等の飾物は、皆一定のモデルに依て製造されてゐる——を身に付けてゐないと、彼等は、敵の不意打、又は害悪を加へんとする悪靈の攻撃を豫防することが出来ないと思へてゐる。此等は即ち彼等に取つて有力なる護符である。此等の飾、前述の如き衣服を著けてゐる様子を見ると、稍々陰氣には見えないこともないが、藝術的快感を起さしめられるやうである。

ムーソー族が、最も普通に使用する武器は、劍と弩である。弩は竹製の毒矢を放つやうに出来て居り、矢は百ヤード内外の距離に於て能く虎、熊、其の他の猛獸を斃すことが出来る程有效である。

ムーソー族は、彼等の部落の附近にある山脊、山側の適當なる部分に耕作をなす。彼等は有能なる農夫である。而して米、玉蜀黍、黍、煙草、阿片の相當數量を收穫する。就中、彼等の製造する阿片は、禁止地點を通過して、政府の專賣阿片と競争することもあると言はれてゐる。彼等の家屋は、木材と竹とを用ひ、頑丈に建築されてゐる。彼等の宗教は、活力崇拜^{アニミズム}で、幾分佛教を混入してゐる。彼等は活力崇拜を宗教とする多くの他の種族に通有なる儀式は、大抵取行つてゐる。然し彼等は、新月の第八日目と、満月の夜と、月が全く虧けてしまふ前八日目の夜と、全く虧けてしまふ夜とに、特に其のために設けられてゐる家屋内に於て、祈願祈禱を爲す習慣を有する(禮拜するのでない)。彼等は割禮を行ふ。彼等の活力崇拜は、一年一回取行ふ所の宗教上の儀式に於て最も能く特色を現はす。即ち該儀式の際彼等は鳥、豚、牛等の犠牲の外に、必ず強烈なる酒を精靈に捧げる。後印度の各部分に於て、ムーソー族を調査せるサー・ジョージ・スコット(Sir George Scott)は、ムーソー族は、北方の居住地に於ては、一種の佛教徒であるが、彼等が植民地の連鎖を辿つて南方に進むに従ひ、活力崇拜に轉じてゐると言つてゐるが、彼の説は慥かに暹羅に於けるムーソーの宗教上の習慣の混合的な特色を能く説明してゐる。彼等は多くの精靈崇拜者が爲すと同様な複雑鄭重な

る儀式を以て、死者の屍體を木製の棺に入れて埋葬する。

ムーソー族中の男子の持てる糧囊中には、既に列記せる品物の外、ハーモニカ様の樂器が大抵發見される。該樂器は細長なる首を有し、乾燥せる瓢箪の中に、蘆の幹を幾本か挿入して造つたものである。樂器は、其の細長い首の尖端に氣息を吹込み、指を以て蘆の上に明けてある穴を開閉することに依て音符通りに吹奏せられる。低く、氣持良き音が此の樂器に依て作り出される。ムーソー等が或は市場に往來するとき、或は作物を見廻るときに奏する、不思議な音律を有する小曲は、嘗て聞いたことのない人の耳にでも、えも言はれない快感を與へる。此の樂器は、ムーソー等に依てケン(Ken)と名付けられてゐるが、彼等が好んで踊る舞に合せて吹奏せらるゝこともある。ケンは、諸種の形態構造に於て、後印度の各方面の部族に知られてゐる。遙か北方なる山地住民の間に於て用ひらるゝものは、八吋ばかりの唯一本の蘆が小さな瓢箪の中に挿入されて、僅かに三・四種の音符に適合するやうに吹奏せらるゝに過ぎない。然るに、暹羅のラオ族間に於ては、此の樂器は非常なる發達を遂げ、頗る大仕掛なるものとなつてゐる。即ち長さ一呎六吋から十二呎内外に達する十四本の蘆竹を木製の吹口に挿入して作つたのである。

ムーソーは、文字を持つてゐない。併し、彼等の中の或者は、覺束なげながら支那文字を讀む力を持つてゐる。

(ハ) カウキ族

カウキ族は、クウキ(Kwi)、ラフー・シ(Lahu Hsi)とも稱へられ、ムーソーと頗る密接なる種族的關係を有する。即ち、此等兩者は、同一國語の二つの異なつた方言を使用し居るに過ぎない。其れで互ひに方言を用ふる場合に於てすら相互相當に了解する。カウキには屍體を火葬にするといふ習慣ある外、彼等の習慣はムーソーの其れと殆んど異なる所がない。

(ニ) カウ族

カウ族は、他の地方で、アカ(Akha)として知られてゐる部族と同一であつて、暹羅には澤山はゐない。唯數年前暹羅領から佛領に編入せられた、ルーアン・ブラバンの東北地方には相當數の彼等の仲間がある。バーヤップ州のムアン・ファン、チェン・セン、チェン・カウ諸郡に於て、彼等は此處彼處に村落を形作つてゐる。併し、其れでも其の數は二千人以上に上らないであらう。學者は、從來彼等を西藏—緬甸族の中に編入してゐる。ウォーリングトン・スミス(Warington Smyth)氏は、カウ族とムーソー族との間には、非常なる人種上の類似點があると言つてゐる。然るに、カー・ジョーヂ・スコットは、緬甸人は、ムーソーと人種學的に比較的似てゐるが、カウ族をムーソーの仲間に入れることには、何等合理的の根據を發見することが出来ない。(サー・ヂー・グリーアスン Sir G. Griegson)が爲せる如く、便宜上同一種族として取扱ふのは別であるが)と言つてゐる。兎に角、容貌が

一般に見にくく、且つ身長が少し高いといふことを取除いては、吾々は、カウ族の人間と、唯外觀の上の見地から、ムーソー及びカチエー部族中の最も進歩せる者とを區別することは出来ない程である。カウ族は

一體の様子が粗野で、頤が少々飛出てゐる。而してメアオ族と同じく、其の短かい辮髪を頭帕布の下に隠して居る。男子はさうであるが、カウ族の女は、直



人婦の族ウカ 圖八十二第

ちに其れと分る。第一、頭飾りが一種特別である。彼等の頭飾りは、昔南洋婦人がスカートを伸縮するために用ひた硬布、又

は簾骨を小形にし、其れに布片を掛けたものに似てゐる。而して銀のべがね、貨幣、貝殻、珠數玉に似たる種子等を以て、ごてくと飾られ、頭の全體を包み、時としては、眉毛を隠すほど深く

被はれてゐる。帽子以外の婦人服は、腰部より一二吋上の部分に達し、短かい袖を有するチャケツト腰部の少し下より上脚の半分を包む腰巻、下脚の腓を廻る布製のゲイトルからなつて居る。而して、何れも皆澤山に刺繡を施してある。

カウ族は、精霊の崇拜者である。精霊の中、特に彼等の注意を呼ぶものは、祖先の靈である。彼等の想像する所に依れば、祖先の靈は、西方にある幽玄界から折々現世に出て来て、在世當時の住家を訪れる。其の際適當に宥慰せられなければ、種々雑多の不幸を彼等の子孫に齎すといふのである。カウ人の家には、何れも幽霊の出這入りする口が設けられてゐる。而して、彼等の中の男子は決して其の口から出入しない。特別な場合に於て、婦人が其處から出入するのみである。總て宗教上の儀式を行ふ場合に、彼等は多數の犠牲を捧げ、盛んに食ひ、泥酔するまで酒を飲む。死者の屍は、丸太に孔を穿ちて作れる棺内に納め、然る後埋葬せらる。カウ族は、結婚前に自由戀愛に耽ることを許される。彼等の支族中の或者は、一夫一妻者であるが、或他の者は、彼等が支へることの出来るだけ多くの妻を要するといふ習慣を持つてゐる。村の入口には、大きな竹を以て造つたアーチがある。是れは悪霊の村に侵入するを防ぐ力あるものと信せられてゐる。

(ホ) リシヨウ族

リシヨウ族といふのは、諸方に散在してゐる種族であつて、雲南の西南部、緬甸のカチン地方

(Kachin Country) 大多數のシャン棲住區域に生活してゐる。但し、暹羅に於ては、唯僅かに二、三百人生活してゐるに過ぎない。彼等は、多分、ムーソー族と人種上の關係を持つてゐる。然し、其の風俗、習慣等の點に於ては、最も原始的な生活をしてゐる部分の在雲南の支那人と殆んど異なる所がない。彼等は土製床の家屋に生活し、男女共ぶた／＼した青色の上衣、青色のズボン、同じく青色の大きな頭帕布を身に付けてゐる。而して、言語はムーソー族のそれと甚だ似てゐる。彼等自身の言語の外に、彼等の多くは支那語を話し得る。彼等は、有能なる農民であり、且つ鍛冶屋、銀細工師としても相當の手腕を持つてゐる。

(ヘ) ヤオ族

ヤオ族は、ヤオ・イン(Yao Yin)とも言ひ、暹羅の遙か北方と、メーコン河の東方から最近暹羅に移住して來た種族である。ヤオ族に屬する多數の支族中の分派が、チェン・セン、チェン・カウン及びブナーン縣に入り込んでゐる。而して、其處で彼等は見渡す限り鬱蒼たるチャングルを斫り開き、一大開墾地を作り、米、阿片、棉花其の他の作物を作つてゐる。ヤオ族が果してどの種族に屬するかといふことは、今日確定的には言はれないのであるが、一層有力なる反證が擧るまで、メアオ族との類似點に徴し、彼等を西藏—緬甸族と看做すことが適當であらうと考へられる。附近に棲む他の部族と同じく、ヤオ族も在雲南支那人の生活様式を模倣し、家屋の建築、ヤオ人男子の服装、農耕

の方法に於ては雲南人其の儘である。婦人の服装、殊に頭髮の處理法は支族に依て異なつてゐる。結

髪法中特に眼

に立つのはヤ

オ族中に於け

る主なる支族

と考へられて

ゐるティン・バ

ン・ヤオ (Tin

Pan Yao) 族

の其れであ

る。結髪の方

料は、中央に

孔を穿てる四

角な鞍敷から

べた孔から通し、



第二十九圖 于男のオヤ・ンラク・ンセるけ於にオカ・ンコ・イド

なつてゐる。

此の鞍敷は頭

の廻りにしつ

くりと結び付

けてある紐と

其の鞍敷の四

隅に附著して

ゐる固い紐と

で大丈夫に頭

上に支持され

てゐる。結髪

の際、婦人等

は髪を右に述

べた孔から通し、鞍敷の上に樹脂を以て抑へ付け、上に様々の色彩を有し、且つ四隅に總を有する

布片を戴いてゐる。此の結髪を解いて結び直すといふことは少なからざる手数を要するが故に、一度結つた髪には、幾週間となく手を觸れないやうにする。現に多數暹羅に住するランテン・ヤオ

(Lanten Yao)

族は、暹羅の

百姓が被つて

ゐる日除帽子

のやうな帽子

を婦人に被せ

てゐる。ヤオ

婦人の帽子以

外の服装は

ぶたくした

せるため兩側を割いてある。



第三十圖 結髪せざるヤオ族の婦人

長袖の長寛衣

と、ペティコ

ート(下袴)で

ある。長寛衣

は、大方足首

に達する位長

く、腰から膝

に達し綺麗に

刺繡せるペテ

イコートを見

ヤオ支族の大多數は、或程度まで支那文明の恩澤を受けてゐる。其れがため、彼等は山地に住する他の種族よりは、多くの點に於て優越せる位置にある。男子の中、多少の程度に於て支那文字を

讀み得る者が多数にゐる。眼に一丁字ない者でも、書籍其の物(内容よりも)に對しては、非常に尊崇の念を有ち、ヤオ族の家屋中に於て、其の壁上に、何人も眼に付く場所に、少くとも一冊の本が飾付けてないと、其の家は完全に家財道具を備へてゐるものとは考へられない程である。

家は割り材で出来てゐる。床は土間である。家屋の内部は暗く、屋内の此處彼處に設けてある二三の土製爐から、間斷なく立登る燈のために、到る處煤けてゐる。ヤオ族は、米、煙草、棉花、玉蜀黍等を耕作し、牛、二、三疋の山羊、多数の豚及び鶏を飼養する。彼等の宗教は單純なる精靈崇拜である。それで、種子蒔、收穫、病氣等の場合には、種々精靈を宥慰するために様々の方法を講ずる。宗教上の儀禮の中、特に重要なものは、彼等の家ぬくめと稱するものである。彼等の信ずる所に依れば、家屋を新築して、精靈をして爲すが儘に放任せば、家全體彼等の侵す所となり、あらゆる不幸を家族に齎すのである。そこで、家長は、新築せる家屋の中心に、一の祭壇を設け、種の食物を其處に置き、精靈が祭壇に坐り供物を食ひ終つたと思はれる頃、彼並に彼の友人等は食物は勿論、祭壇までも屋外に運び出して、悪靈が再び戻り來らざる遠方の森林中に棄て、大聲を發して叫ぶと共に鐵砲を放つ。數百哩隔たり、且つヤオ族とは、人種的其の他何等因縁なき馬來人の中に、悪靈をおびき出す同一の計略が行はれてゐるといふことは、不思議と言へば不思議である。ヤオ族の約婚、結婚には、少からざる手数を伴ふものである。約婚をする場合には、男女雙方の星

占を比較し、親族の面前に於て男女雙方が贈物を交換し、新郎たるべき者より新婦たるべき者に聘金を拂ふ、其れで約婚が成立し、其の後數日に互り、關係者の間に酒宴が開かれる。其の後暫く時日を經過し、婚約の時と同じやうな手数を盡し、娘が始めて形式的に新郎に與へられる。其の後新郎の家に於て宴會が行はれ其れで結骨を埋葬する。ランテン・ヤオ其の他の支族は、單純に死體を埋葬するのみである。犠牲として豚を殺す。



第三十一圖 サイドラに於けるヤオ族夫婦

婚の式が完了するといふ次第である。ヤオの總ての支族は一夫一妻者である。テイン・バン・ヤオといふヤオの支族は、死體を焼き、遺葬の際には

第六節 ラオ・タイ族

(イ) 暹羅人

暹羅人、即ちタイ人が、一種特別な事情の下に、色々交ざつて出来た種族であること、今日と雖暹羅の婦人が、外人殊に支那人などと自由に結婚するといふことに依て、少しくづつ種族上の變化を蒙りつゝあること、然し、雜婚に依て出来た雜種が、大體に於て優勢なる種族たる暹羅人中に速かに汲收同化されつゝあるは、前に述べた通りである。暹羅人は、かく雜種であり、今日も尙ほ他の種族と交ざりつゝあるが、其れにも拘はらず、暹羅人は一種特別な人民である。世界のまるで違つた各種の方面から、彼等の血管内に注入される外國人的要素が如何に速かに外國的特色を失ひて、暹羅國民に通有なる特性に變化せるかを見てみると驚かざるを得ない程である。然るにも拘はらず、暹羅國民に通有なる特性といふものは、昔の著述家の記録を一瞥して見ても、數世紀間餘り變らないものである。即ち、ドゥ・ラ・ルーヴェン (De La Loubere) は二百年以前に「日常生活に必要なる品物を安價に入手し得る等、生活について多大の氣樂さを感じてゐる所から、苦しい勞働の付纏ふ貧困や、又は安閑として時のやり場に困るやうな境遇にあるよりは、世間普通の氣樂さに満足を感じるのが、安南人の一般的傾向で、是れに依て見ても彼等安南人は、善良なる國民であると

斷言することが出来るであらうと思ふ」と言つてゐるが、彼が半島土人の一般的特性、並びに此の如き特性を作るに與つて力あつた原因に就てなした右の斷定は、大體に於て、今日の暹羅人にも適用出来ると思ふのである。

普通暹羅人氣質の特徴は、愛想よき鄭重といふことである。唯其れが、洗練されてゐないために目下の者に對しては横柄、目上の者に對しては阿諛するといふことになつて、折角の美德が大に傷けられてゐる。彼等の行儀は、大體に於ては宜しいが、其れは彼等が子供の時分から、兩親、學校、教師、僧侶等を敬ふことを教へられてゐるがためである。上流階級に於ては、落付いた威嚴と、平靜なる慇懃さとに遭遭すること稀れでない。此の點に於ては、世界で最も鷹揚丁寧なりとせられてゐる國々で、暹羅に勝るものは少ないであらう。行儀作法の點に於ては、又、暹羅の農民は、東洋に於ける他諸國の農民と同じく、歐羅巴の農民勞働階級の者より遙かに勝れてゐる。然し有體に言へば、暹羅人の對歐洲人態度には、多少改良して貰はねばならぬ點がないことはない。而して、是れは、全、暹羅人が、他に比類なき國民であるといふ點から、唯其の點のみから、歐洲人のみならず、總ての他の外國人に勝つてゐると自信してゐるがためである。元來、外國人の顔さへ見れば、煉瓦のかけらを投付けるといふのは、或一つの國民に限られてゐる感情ではない。而して、暹羅人も、此の感情が他の國民に於けると同じく著しく發達してゐる。然るにも拘はらず、暹羅に居住す

る歐洲人は、歐羅巴諸國に在住する他の諸國人が經驗するより、より少なく排外的感情の影響を受けてゐるといふのは、其の一半の原因を彼等暹羅人の善良なる行儀作法に歸せなければならぬ。吾等は、同時に、暹羅に在住する歐羅巴人が、暹羅人に對し、往々輕侮の態度を示すを目撃し、左様な態度は、暹羅人をして其の特長たる丁寧感勸さを發揮せしむる所以でないことを注意せねばならぬ。

暹羅人は、長上であると認めてゐる人々に對しては、自然的に服従する。然し、對社會の種々の問題に對しては、可成りの獨立心と自依心とを示すを通例とする。彼等は一般に氣輕で開放的で淡白で、親切で、接待上手である。時として他人の苦痛に冷淡で、殘忍ですらあることがあるが、一般的に憐れみ深い。彼等は平和を愛好する性質を持つてゐる。而して、暴力的犯罪を犯さうと思へば犯し得る自由と便宜とを與へられてゐるに拘はらず、是れを犯すことは少ない。

暹羅の下層社會には、盜癖が旺んであるといふ香ばしくない評判は、事實に依て支持されてゐると思はれない。此の點に於て、暹羅國の統計と、他の東方諸國の統計とを比較して見ることに必要だ。比較の結果は、必ずしも暹羅に不利益でない。殊に犯罪防止に關する機關が新設改善せられたから、此の點に關する暹羅の狀況は著しく良好になつたのである。

暹羅にゐる外國人は、暹羅人は成程百姓としては有能で、物の分りが早く、學校生徒としては模

範とするに足り、官廳會社のクラークとしては勤勉であるが、一般には濟度すべからざる懶け者であるといふ極印を押してゐる。此の外國人の觀察は、少しく説明を要する。或保留なしに其の儘承認することは出来ない。暹羅に來る外人は、盤谷以外の地を視察すること稀れである。盤谷に於て此等の外國人は、商賣に従事する者は勿論、手工業に携はる者、人力車夫、道路修理夫、精米所使用人、大工、靴屋、建築師、其他が悉く支那人であることを見る。そこで、彼等は、一躍して勤勉なる支那人が、暹羅人の生活を奪ひ、暹羅人を國外に驅逐しつゝあるといふ斷案を下さんとする。然し支那人が、暹羅人を暹羅から驅逐してゐるといふのは間違ひである。暹羅人は、盤谷市の勞働市場に於て、支那人と競争しようと思つたことがない。彼等は元來田舎漢である。彼等が盤谷にゐるのは、彼等、又は彼等の祖先が、國王又は貴族に使役せられんがため其處に引張り出されて來たからである。彼等は、卑近簡單なる仕事に従事する外、何等爲す所なく懶惰なる生活を送つてゐた。彼等は盤谷に於ける諸種の産業が、支那人の手に依て又大部分支那人のために創始せられ、促進せらるゝのを袖手傍觀してゐた。既に職を得、祿を食んで王侯に事へてゐる彼等の頭には、仕事を見付けに首都に蝟集する支那苦力などと競争しなければならぬといふ自覺が浮んで來ないのである。盤谷の産業界に於ける彼等の憐れむべき位置は、此の如くにして生じた。其れにも拘はらず、王侯の侍臣従者、鬼面人を嚇すことを職業なりと信せるが如き者の末裔たる今日の盤谷暹羅人が、今日

見るが如き善良なる市民でゐるといふことは、結局彼等の素質が悪くないといふことに歸著すると思ふのである。社會生活上の大變化は、侍臣從者等の一群より彼等の職業を奪つた。然し彼等の大多数は、政府又は外國傳道會社の提供せる教育を受け、或は官廳の雇員となり、或は小商人となつて生活の道を立てゝゐる。而して彼等の中には、地方に歸還し農民として生活してゐる者も少なくない。かゝる際に當つて、懶怠者、無賴漢、犯罪常習者といふが如き殘滓が、彼等の中より餘り多く出ないといふことは、多としなければならぬ。普通の境遇に置かれたる暹羅人は、勞働のために勞働するといふが如き勞働熱心家ではないが、彼等並の生活を送るに必要な仕事だけはして行くといふ風であつて、決して懶けたために乞食になつたとか、非常なる窮境に陥つたとかいふ風には見受けられないのである。暹羅の婦人に至つては、都にある者も鄙にある者も、或は家政の始末をなし、或は子供を世話し、或はバザーに出ておきなひをし、田畑に出て軽い勞働に従事する等、絶えず忙殺されてゐる。暹羅の婦人が、品物を市場に於て賣らんがために船を漕いで行つてゐるのに、彼等の夫が天下泰平だといふ顔付で寝ころがつてゐるのを見る者は、暹羅の男子に對し、世界に於ける最大の怠者といふ悪名を被せるに躊躇しないが、吾々は同様の事象をば、歐羅巴の總ての田舎町に於ても發見するのである。即ち田舎町のマーケット・デイに妻が重い物産の籠を負ひ、よろめき乍ら歩いてゐるのに、夫は煙管やステッキを持つだけで、ぶら／＼して其の後に付いて行くといふやうなことは決して稀にのみ見る現象ではない。

暹羅人は、緬甸人と同じく大の浪費者である。而して、ビジネスライクでないといふ點に於ては他に類を見ざる程である。彼等は快樂を追求するためには、持つてゐるだけの金を全部ぶち撒く。現在面白可笑しく遊びさへすれば、あすのことなどはどうでも良いと考へる。其の結果として、結局彼等を破滅に導くやうな、身分不相應な借金をすることになる。暹羅人は、男女共、慢性的の博奕打である。それで、政府が公設賭博場を閉鎖してから後は、賭博慾を満足せしむるために、鬪鶏、富籤、其の他一攫千金の事柄に手を出す。暹羅人は、全體として藝術的傾向を多分に所有してゐる。彼等の同胞は、一人残らず、演劇の熱心なる愛好者である。其の外、歌を歌ふこと、踊りを踊ること、各種の樂器を弄ぶことは、たしなみとして何人も心得てゐなければならぬことになつてゐる。暹羅人は又、甚だしく迷信的である。で、彼等の想像出来る、あらゆる害惡に對して護符を所持してゐる。此等の護符が信用すべきものであり、且つまじなひの結果、前兆が宜しければ急に大膽になる。其の代りに幸先きが悪いやうな時は臆病で、命を棄てるやうなことは爲し得ない。其の癖、死の前には割合に冷淡である。

暹羅人の身體は、甚だしく蒙古人的特色を有してゐる。幅廣く且つ後頭部の平たい頭、出張つた顎、鼻孔の邊に於て甚だしく廣くなつてゐる鼻、長く且つ少しく斜めなる眼、大きな耳、高い頬骨

此等が彼等に通有なる肉體的の特色である。此等の特色に依て得る印象は、後印度地方の標準から判断しても餘り美でない。加之、最近まで弘く一般に行はれた、頭髪を短かく刈り、刷毛のやうに直立させて置くこと、間斷なく檳榔子を噛み、或は椰子實の殻を焼炭にせるものを用ひて齒を黒く染めることは、少ない愛嬌を更に少なくするものである。暹羅人の顔色は、大體に於て、印度支那の他の種族よりも少し黒い。然し顔色は、人に依て非常なる逕庭があり、殆んど純白なる上流婦人から多くの階段を経て、郊外農夫の濃厚なチョコレート色に及んでゐる。彼等の體格は概して佳良で、能く發育してゐる。但し、市街地に住んでゐる者の體格は田舎者の其れに劣る。彼等は、皮膚に文身を施さない。唯體の此處彼處に魔除けのために、簡單な印を付けてゐるだけである。下肢は身體の他の部分の如くに、能く發育してゐない。是れ、恐らくは、彼等の祖先が幾世代となく船上生活をなし、下肢を使用しないのに反し、腕や肩は、漕水操艇の結果、普通以上に發育したことに依るものであらう。多分同一の理由の下に暹羅の婦人は、普通肩がいかつてゐる。それで、彼等を後方から見ると、全く男子のやうに見える。暹羅人の平均身長は、男が五呎一時、女が四呎十一吋である。

昔のラオ・タイ族は、彼等の同類は、南下すればする程、身長を縮めるといふことを認めてゐたやうだ。而して彼等の中には、同族の者が海岸に到着する頃には、兎と等大位に小さくなり、遂には

全然消滅するに至るであらうといふ豫言が行はれた。然るに暹羅人は、ずつと以前に海岸に到着したが、彼等は彼等の種族中體軀の最も小さいものとして知られてゐても、消滅するどころか却つて種族中に於ける最重要の要素となり濟したのである。

(1) 暹羅人の服装

重なる服装は、男女子共、長さ約七呎、幅約二呎半の長形の布を其の主なる構成要素とする。是れを著るとき



第三十二圖 暹羅婦人 (背に中引るため端のノミを見よ)

には、腰から膝の直下位の高さに持ち、體に巻き付けて前に持つて行つて結ぶ、然

るときは、餘つた兩方の端は前に垂下する。暹羅人は、垂下した布片を燃つて一本の綱とし、兩股の中間を通じて脊中に持て行き、巻付けた布の中に嵌ち込むのである。斯の如くにして著込んだ格好は、前方より見れば恰度半ズボンの如くであるが、更に是れを後方より見れば、燃つて後方に釣上

げてゐる關係上、太股が大分露出してゐることになつてゐる。此の著物は、土語でバヌン(Panung)といひ、印度に於て最も弘く行はれてゐる體つゝみに、形といひ、用ひる方法といひ、非常に能く似てゐる所を見ると、明かに印度から渡來したものである。昔、婦人はバヌンをスカートの如くにして身に付けた。いつ頃から、彼等が後ろに振ち込むやうになつたかは明かでないが、傳統に依れば、十六世紀にアユタイア(能く包圍せられた昔の首府)が、一度敵に包圍せられたとき、女共が身方の兵力を多く見せ掛けんがため、男子と同じやうなバヌンの穿方をした。其れが女がスカート式の穿方を變更した抑も原因であるといふことである。男子は、バヌンがすり下らないやうにベルトを用ふるを普通とするも、婦人は是れを用ひない。農夫などがふだんばきとして用ひてゐるバヌンは、綿製で現今に於ては悉く輸入品である。市街地の住民、殊に上流階級者のバヌンは品質良く且つ美的價値に富んでゐて、絹布又は入念に織りなした綺麗な綿布で作つてゐる。バヌンに使はれてゐる模様は、種々様々である。然し、古來習慣上、各日使用せらるゝ色合は決つてゐる。即ち日曜は薄赤色、月曜は銀灰色、火曜は赤色、水曜は綠色、木曜は雜色、金曜は薄青、土曜は濃青を用ふるといふのが古來の習慣である。田舎の百姓等は、衣服に頓著しない。或者はバヌンの外にモスリンの短かいジャケットを着用してゐるが、多くは、腰から上は丸裸體で外出するを常としてゐる。唯帽子に就ては、一種特別な考へを持つてゐる。一體後印度に住する各種族は、必ず何等かの

形の頭帕布を頭に戴いてゐるが、暹羅人はそんなものを被つてゐない。其の缺を補足せんがため、彼等は外國製の帽子を被つてゐる。田舎の間人は、色々な形、様々な種類の帽子を被つてゐるが、彼等が最も好むものは、頭が高く、縁の深い黒色又は褐色の麥稈帽子で、歐洲戰爭前は奧太利から輸入したが、最近では毎年多數支那から輸入してゐる。市街地に住む男子は、歐洲式に仕立てた白綾金巾の上衣、意氣なホームブルグ帽子、綿製の靴下、煙泥管で漂白した靴を著けたがる。此等をバヌンと取合せると、小ざつぱりとして、相當見ばよきコストュームとなる。以前婦人は、バホム(Hom)と稱する軽い絹製スカートの外にはバヌンを纏ふのみであつた。バホムといふのは、稍々不充分ながら、乳房を隠すために、胸の部分に寛く捲付けらるゝものである。バヌンとバホムとは多數の暹羅婦人の常装であり、且つ上流社會の室内服装又は略服も是れに過ぎないのであるけれども少ししやれ氣ある婦人の間には、固く身に喰ひ付くやうに作り、且つ澤山のボタンを付けたものか又は、腰の廻りをぶたく／＼させたジャケットを着用することが流行してゐる。上流階級の若い婦人達は、歐洲式のブラウズ、薄い絹製靴下、踵の高い靴を穿くやうになつた。元來、此の種の暹羅婦人は衣装の點に就ては、なか／＼高尚なテーストを持つてゐるから、吾々から見ても彼等自身に誠に能く似合ふ恰好の良い歐風の流行を形作つてゐるのである。

一九二一年中、宮中の婦人達はバヌンを棄て、シン(Sin)と稱するラオ人式のスカート、歐羅巴

式のブラウズ、上衣等を用ひ始めた。帽子を被る婦人さへ出て來た。暹羅式と歐洲式とを半々にして服装を始めてから二、三箇月躊躇した後、彼等は暹羅の服装をかなぐり棄て、全部歐洲式に變へてしまつた。宮中に於ける婦人連の服装上の此の冒險は、一般官吏夫人連の模倣する所となつた。多くの他の婦人は、どうかといふに、彼等は上流婦人の此の如き革新をば、啞然として見てゐる。婦人間に於ける服装改良が、將來どんな経過を取るかは興味ある問題である。

淡黄色の顔白粉が、婦人に依て多く使用されてゐる。彼等は又、花を耳に飾り、頭髮中に挿込み花環の形にして、身に著ける。熱帯諸國の通例として、子供等は、或特別の場合を除く外、衣服を用ひない。俗にチャピン(Chaping)と言つて、小娘の體の前面に絲で吊されてゐる、小さなハート形の銀製金製の圓盤が衣服だと言はるれば、それは別である、或場合に頗る藝術的に見ゆる貴金屬が、婦人子供に依て好んで身に著けられてゐる。

昔は、髪を短い分厚い束にして、頸の天邊に戴き、頭の後から耳の上に掛けて剃る(男は綺麗に剃り、女は額縁の邊に垂毛を蓄へて、あとは短かく刈込む)といふのが、國內を通じ、男女に共通な習慣であつた。然し此の習慣は次第に廢れ、暹羅人は、男女共頭の全表面を通じ髪を一寸半乃至二時に伸ばさなければならぬといふことになつた。斯の如くにして得た頭の外観は、丁度黒い筈のやうである。以前、髪を充分に伸ばすといふことは、暹羅人男子中には全然なく、婦人中には餘り感

心したことを考へられてゐなかつた。在暹英、佛、モン、クメルの婦人、其の他外國の婦人がふさ／＼した髪毛を暹羅の婦人に見せてゐても、彼等は髪を裕に伸すこと齒を白くすることは、貞淑な女道に背くもの、否、そんなことは花柳界の女のみ敢てするものと考へてゐたのである。然るに歐羅巴婦人が、花柳界と競争して、破戒無慚な容姿をすると同じやうな社會的風潮が、暹羅の婦人界をも風靡するやうになり、現今に於ては、青年暹羅の婦人は、娘も令夫人(貴族、高級官吏の夫人、令嬢をいふ)も、共に長い黒髪と、目ばゆき皓齒とを有し、新流行の結髪法、上等な齒磨粉を研究するため、外國婦人雜誌を精讀耽讀するやうになつた。然し田舎の婦人は一般に一、二吋の長さで頭髪を剪み切つてゐる。而して、ずつと場末の地に於ては昔流行した様に束にした髪を戴き、額縁の邊に可愛ゆい毛を下げるといふ習慣が尊重されてゐる。農家の女等の被る帽子は、百姓の男が野外勞働に従事する時に被る固い圓い日除帽子である。

以前、富裕者は、手の指の爪を長く伸す習慣を持つてゐた。是れは支那人の習慣を眞似たものであらう。然し、此の習慣は今日廢れ始めて、青年などで爪を伸してゐるのは、放蕩者の證據であると考へられてゐる。

(2) 住居

盤谷は、十五年前までは、運河の畔に、草葺木造の家屋と、蓆作りの小屋とが、言はず味増も糞も一緒といふ形で、最も亂雑に集合してゐた大きな町に過ぎなかつたが、最近

は石造煉瓦造の家屋を以て、秩序整然と敷詰められた市街にならんとしつゝある。然し、此の如き變化の氣運は、唯盤谷のみに限られ、地方には殆んど及んでゐない。地方では、暹羅人は、古來の習慣といふ動かすべからざるドグマに聖められた家屋のモデル、建築の方法を持つてゐて、其れに依つて住宅の建築をなさねばならぬと考へてゐる。暹羅特有の家屋は、概して河又は運河の畔、八方に枝を擴げてゐる竹叢の涼しい蔭に建てられてゐる。家屋は正方形の三方面に於て、三つの長方形の家を繋ぎ合せて造つたものである。開いてゐる一方には、板又は割竹を以て作つた中央のプラットフォームがある。而して、全體の建物が、地上五、六呎位の高さある杭の上に載せられてゐる。而して、上り下りは、一方開けてある部分に掛けてある梯子を以てなされる。時として、此の開けてある側は、板壁を以て覆ひ、其の板壁には梯子の丁度天邊に當る處に、重なる出這入口を設けてゐることがある。然し、以上述べた所は、充分に出來上つた家で、家を持たんとする若者が、一な家を建てる前には、先づ一つの長方形の家、換言すれば、前記の如く完全に出來上つたものゝ一部を以て最初數年間は満足し、家族が殖え、家産が膨脹するに連れて是れを擴張するを常とする。家屋の一部たる長屋(一側面)は、家の内側に向つて出入口を有する、一つ若くは一つ以上の部屋からなつてゐる。出入口は、狭い縁側に連なり、縁側は前記家屋内のプラットフォームの周圍を取巻いてゐる。儀式を取行ふ時の都合で、椽側はプラットフォームより高く、屋内の床は縁側より更に高

く出來てゐる。尙ほ、主人の寢所たる内部の密室の床は、屋内の床より更に高く出來てゐることがある。臺所としては別に一室の設けがあり、其處には隙間が設けてあつて、其の隙間からは食料品の廢物、殘物が不潔極まるどぶの中に間斷なく投げ込まれてゐる。家屋の下には、家畜が飼養せられてゐることが屢々ある。建築材料は、薄弱なる竹蓆、草葺から頑丈なるチーク材瓦にまで及んでゐる。中間どころで最も普通に見る家は、チーク材の床、根太、割竹を編んで作つた壁、ニッパ椰子の葉状態を以てした家根で出來てゐる。草葺であると、ニッパ椰子であると、瓦であるとに論なく、屋根は必ず高く、けはしく、従つて尖つてゐる。

吾々は、次に平原に流れ、其れがために潮水の干満に影響せらるゝ河又は運河の畔に建てられた盤谷其の他の町に於ける浮家屋に就て一言せねばならぬ。此等の家屋は、普通チーク材を以て作りニッパの家根を以て覆はれてゐる。家には切妻壁を有する二つの長方形の屋根があつて、家根と家根とは桶で結び付けられてゐる。屋根間には、後方に當つて、更に一つの小さな家根がある。此等の屋根を有する家は、四十呎平方位の面積を占め、二乃至三艘の平底船の上に載せられてゐる。屋内は、前後二室に分たれ、別に後方に臺所、物置がある。前面には一寸した縁側がある。壁は普通チークの鏡板で出來、蛇腹、戸の枠の周圍には、彫刻物が飾付けられてゐる。前面の室は、普通店舖の構へになつてゐる。家は河の方角に向つて繫留せられ、其の方面から出這入りされるが、後方の

出入口は、渡板で、陸上と接続せられてゐることがある。

暹羅人の主食物は、米と魚である。海岸又は内陸の漁場附近では、生魚が食べられる。即ち、普通日光乾燥を施したのから、悪臭鼻を突く、半ば腐敗し掛けた魚肉の煉物——是れはカピ

(3) 食物

其の他の場所でも、色々な方法で處理し鹽漬にした、魚肉が到る處に於て得られる。即ち、普通日光乾燥を施したものから、悪臭鼻を突く、半ば腐敗し掛けた魚肉の煉物——是れはカピ (Kapi) と稱し、一種の藥味、味附として使用せられる——に至るまで何でもある。新鮮なる飯は到處に得られる。米は普通籾の儘にして置き、必要な場合に臼と杵を用ひて剥皮する。粗造なる取臼を用ふることもある。獸肉も亦用ひられないことはない。唯生物の命を取つてならぬといふ宗教上の考慮から、獸類を殺さないの、老衰し又は病氣に罹つて死んだ牛などが無い場合には、是れを得ること容易でない。然し支那人は豚肉を賣つてゐる。野菜物としては、胡瓜、南瓜、各種の葫蘆、種々の豆、無数の灌木、普通木の軟かい芽葉等が用ひられる。諸々の熱帶果物が食物として使用せらるゝことは勿論である。食物は總て、小皿に盛り、盆の上に竝べ、床の上で指を用ひて食せられる。食事の際、女は男の後方に席を占め、男子より後に食し始める。食事中は、一滴の飲料も用ひないが、食後は可成り多量の水を飲む。きまつた食事は、朝と日没時に於て行はるゝのみ。然し、閑暇の際には、朝晝の區別なく屢々食物を食ふ。而して此の頃では中食といふものが盤谷に於ては一般的になりつゝある。暹羅人は、何れも皆、飯を炊く事と簡単な料理法とを心得てゐる。

而して、市街地に住する上流階級の人々は、料理法を一の技術として稽古してゐる。其れがため、料理法は、此等階級の人々の中では、藝術的技巧となつてゐる。最上流階級の婦人は、料理法の講習を受け、料理が出来ることを、無くてならぬ一つのたしなみとし、自慢にしてゐる程である。彼等は、各種カレーの調合、糖菓の製造には、特別の注意を拂ふ。良く出来た暹羅人のカレー物は眞に美味で、歐羅巴美食家の舌に對しても快感の數々を興へる。

(4) 誕生・少年時代、青春期

暹羅嬰兒の出生は、家屋の下に特に其のために設けられた小部屋で行はるゝこともあるが、多くは、屋内の部屋の一つに仕切りを施し、其處で行はれる。出産前、此等の部屋には、惡魔が寄付けないやうに、魔除け、惡魔祓ひが注意深く行はれる。取上げは、物知りとして一般に認識せられた二、三の老婦人に依て行はれ、生れたる嬰兒は、注意深く行水を施され、豫言者が彼の將來に就て言ひ得べき何等かの印、又は特徴が體にありはしないかと蒼りに搜索せられる。出生後一通り手数が済めば、赤坊は其の爲すが儘に放任せられる。産婦の方は、是れは幅廣い一枚の板の上に打臥した儘乗せられ、焚火の熱で旺んに暖められる。此の手荒い方法は、前印度中到的處で、産後に於ける健康恢復上最も有效確實なる手段なりと考へられてゐる。然し、此の療法には、美點があるかも知れないが、缺點に依て打毀されてゐる。世界の此の部分に住する婦人の美容が、年若い時分に喪はれるのは、主として此の野蠻なる産婦の

療法に由るのではあるまいかと考へらるゝのである。

英國で、幼児がベビーと呼ばれると同じく、新生児はデン(Denn)赤い兒といふ意味である)と呼ばれ、其れが男の兒である場合は、其の前にアイ(Ai)とかパウ(Pau)とかくつ付け、アイ・デン等と呼び、女兒の場合には、イー(Ii)とかメー(Mei)とかいふ接頭語を附加してメー・デン等と呼ぶ。生後二、三週間を経過すれば、換言すれば、赤ん坊が約一箇月の年齢に達すれば、面倒なる儀式の下に剃髪を行ふ。而して、易者を呼んで、運勢を卜し、縁起の善いやうなことを言はせる。然る後赤ん坊は、自慢顔なる両親に依て、剃髪式に参加した親戚知己に示される。参列者は一同赤ん坊を賞めたゞへる。赤ん坊が歩き出る頃には、唯アイ・デンとかイー・デンだけでは善くない、固有名詞を付けてやる必要がある。其の時には、又易者を呼び、運勢を卜せしめ、吉凶を占ふに足る他の材料があれば、其れに就ても考慮する。而して遂に、赤ん坊の生れた年、月、日に差觸りのない多くの名の中から、一を選んで付ける。易者は、命名式を行ふ前に、縁起のよいことを豫言するやう、豫め依頼を受け、彼が附した名に對し、両親が希望する通りの運勢が出て来るやうに取計らう。彼は勿論、其れがために謝禮を受けるのである。最近では、卜者を頼まず、運勢の如何に頓著なく、好きな名を付けるといふことが次第に流行して來た。暹羅の赤ん坊は、極度にあまやかされ、彼の家庭に對して一種の專制政治を布く。父も、母も、一族も、彼に對しては從順なる奴隸である。かりそめ

なる彼の希望が彼の家庭に對しては嚴格なる法律である。彼は、彼に接する總ての人から、あやかされ、あまやかされ、我儘にさせられる。二歳前後の時、專制君主たる彼は、眞妙に乳離する。而して、丸々肥つた、黄ばんだ、快活なる一個の人格として外界に、ひよこ／＼出歩く。彼は膚に寸尺の布片をも付けずして自由に出歩き、運河に這入つて水遊びに耽り、髪を剃り落した、くり／＼坊主の頭を、熱帯の日光に照らされながら、往來で塵埃だらけになつて遊ぶ。四、五歳に達した頃、剃髪は一部分中止され、頭の頂きに毛を伸し、其の毛は、母の手に依て注意深く油付け、櫛梳られ固く結び、多少飾りを有するピンで止められる。其れから暫らく經過すると、彼は衣服を纏ひ始め、數限りもないお伽噺が彼に聞かされる。是れが教育の始めである。七、八歳に達すれば、彼は寺院附屬の學校、近所に近代的の小學校があれば、其の小學校に通學することになる。此處が男の子と女の子との分れ道である。大方の女兒は、學校に行かず、従つて書物、教育の歡樂、悲哀を知らず、家事の手傳ひを爲し、不知不識の間に是れを覺える。而して、將來に於ける家政婦としての素地を作る。十歳乃至十三歳の頃、嘗て伸し始めた黒髪も大分長くなつてゐる。其の結節が其の頃、子供が青春期に入つたといふ一の印として切落される。結髪の切落しは、男女子の雙方に對して行ふもので、佛教、婆羅門教兩者の要素を混合する複雑なる様式の下に行はるゝのである。髪を切落した頃からも、女子は以前と同じく、否以前よりは一層熱心に家事に携はり、速かに一人前の女になり

結婚といふことに依て、彼等が女として生れた以上、到底避け難い宿命の門に入るのである。男子の方は上記の式後、依然として教育を繼續し、二十歳前後に、佛教に對し堅き信仰を得たといふ意味の、基督で所謂堅信禮といふが如きものを受ける。其れに引續いて、彼等は、彼等の宗教に於て所謂成人團(Holy Order of Manhood)に編入せらるゝ。佛教の教理に依れば、如何なる人間でも、修道院生活のために現世を棄て、托鉢僧の仲間入りするにあらずんば、完全なる成人の域に達せないのである。其れは兎に角、聖團に加入する際に於て爲す暹羅青年の宣誓は、撤回出来ない程に彼等を拘束するものでなく、各自随意に取消すことが出来るものであるから、假令彼等が俗人として一生を送る覺悟でゐる場合でも、人間生活上避け難い一の形式として、宣誓を敢てすることに躊躇しない。成人團に参加する式をば、多くの青年等が一度に受けることが屢々ある。かゝる際に於ては此等青年の家族縁者等が相集つて飲食を共にし、充分に歡を盡して入團者に對し祝意を表する。傳説に、釋尊在世時代に於ける王侯の正装だと言はれる、奇妙な、然し光彩眼を奪ふやうな衣服を身に纏ひ、成人團に加入せんとする青年達は、其の親戚、知人、近傍に住する美しい娘等と共に行列を作つて街路を練り歩き、寺院に至り彼等に入團の式を施さんがために待受けてゐる主僧と待僧の前に出る。其處で、嚴格なる教義問答が行はれ、其の後青年等は、華麗なる衣服を聖團に屬する黄色の法服に変更し、物乞ひに使用する椀、扇、其の他の徽章を付與せられ、僧院の境内に彼等の住居

を定める。此の儀式は佛陀の一生を模寫徵象するものであつて、青年達の華美なる衣服は、悉達太子時代の釋迦の榮華を物語り、美人の一團は誘惑と諸行無常とを意味し、法服に変更するのは、一切を厭離する釋迦の一大決心を徵象するものであるといふ。

新に聖團に加入した若き出家が、否多くの場合に於て、彼の両親が適當だと信する時に、宣誓解除の式が行はれ、若き出家は一時逗留した僧院を出で、再び婆娑の人間になる。一生僧侶として起つのでない。此等青年の僧院に滞留する時期、換言すれば、彼等が黄服を纏うてゐる期間は、普通三箇月だとせられてゐるが、最近では一月とか二週間に短縮せられ、甚だしきに至つては二、三日とせらるゝことがある。

(5) 結婚 暹羅の男子は、普通二十一、二歳、女子は十五、六歳で結婚する。未婚の婦人といふのは

滅多に見られない。結婚と是れに對する準備には、多大の形式、式典を必要とし、且つ多くの結婚は、當事者の感情に頓著なく、身内の者に依て決定せらるゝが、愛情とは言はれないまでも、少くとも好きだとか、嫌ひだとかいふ一種の傾向に基く結婚を最も普通なるものたらしめんがため、嚴格なる禮儀と形式の下に、相當の交際が男女間に於て許される。暹羅の娘は、物靜かで、慎ましやかで、行儀の善い小柄な女である。而して、時として、容貌の麗しい女をすら彼等の中に發見することがある。然し、男子の心を奪ふと云ふ點に於ては、緬甸の娘、彼等の分れであ

るラオ族の娘には到底敵はない。男の魂を奪はんとするには彼等は餘りに禮式上の末節に捉はれ過ぎてゐる。其れで、暹羅の娘達の中に於て、猛烈なる戀愛事件を見ること少なく、危険に瀕するまでに愛情關係を持運んで行く者も少ない。

彼が知合の或娘に對し、或程度の興味を覚え、試みに其の娘を追ひ廻して見て、其の娘が彼を廻避するが如き態度を示さず、且つ、彼が妻を求めてゐる際であれば、彼は彼の兩親に其の娘を娶りたき意向あることを物語る。斯く第一歩を踏み出せば、娘と彼との關係は、兩親其の他の者の手に移る。兩親の考へで、問題の娘が、社會的に自家と釣合つた家のものであり、且つ總ての點から見ても適當であれば、兩親は求婚に關する一切の事柄を、娘の内とこちらと、兩方で知合つてゐる、尊敬すべき年寄の婦人に一任する。此の婦人は、男の兩親の訓令を受け、巧妙なる外交的駈引を用ひて、娘の兩親に於て娘を呉れてやる意志あるや否やの事實を慥める。取調べの結果、兩親に娘を遣る意志があることが明瞭になれば、分別盛りの年配で、兩家の知合に當る者が、縁組に關する諸般の協議を遂げ、其の結果是れを纏めるのに何等の障害もないことが明かになれば、娘の兩親を訪れて結婚の取極めをする。愈々婚約を爲す際には、占師を呼んで、新郎新婦たるべき者の運勢を占ひ、兩方が合性であるか否か、誕生日等に故障がないか否かを確かむる。結婚式の際に於ける費用、新郎新婦が世帯を持つに必要な資産を、兩方の家で如何なる割合で負擔するかといふことは大なる

問題である。結婚式並びに是れに伴ふ賀宴は、花嫁の家で、普通二日間に亙つて行はれる。式に參列する際、花婿は、彼の友人と樂隊とに伴はれて花嫁の家に行き、花嫁と其の父に適當な贈物を送る。花嫁の家に於ては、彼(花婿)の費用に依て、其の家に臨時に附設された住居——其處に密月を送る——に入る。其れから、花婿と彼の兩親とは、花嫁の兩親に、曩に取極めた、新郎新婦の當分の生活費たる持參金を呈上する。此の持參金(Thim)の獻呈式は、結婚式中に於ける最重要の部分で、カーン・マーク(Kan Mark)と稱せられる。此の式典の際、檳榔子を噛むに必要な諸道具も同じく申進められる。此の式と相前後して、主屋の方では、結婚の賀宴に案内された親戚、知己、友人が旺んに飲み、食ひ、歌を唱うてゐる。而して、僧侶が別に頌讚詩を合唱し、結婚の盛典にふさはしき佛教の經文を繰返す。持參金が注意深く勘定せられ、其の處分法に就て、周密なる意見の交換を行はれる。暫らくすると、神聖なる縁の絲に依て繋がれた新郎新婦が宴席に現はれて膝まづく、會衆一同は米と、貝殻に入れた水とを新郎新婦に振り掛ける。其の後新郎と新婦とは引分けられ、新郎は其の夜に於ける時間の残りを、妻戀ひの歌を歌ひて——樂隊の助けを藉りて——過す。翌日(第二日目)には、式典を取行つた僧侶に對して御馳走が出、別に前日に比較して遙かに力なき騒ぎが行はれる。其の日の夕方、新婦は始めて、特に彼女と彼女の夫のために設けられた部屋に入り、婚約後に於ける始めての共同生活を爲す。新夫婦は、數箇月間、新婦の家に密月の日を送る。否、或場合に

は最初の赤ん坊が生れるまで妻の家に滞在する。

結婚式の費用を少くするため、上述の様な、正式の結婚式を行はず、花婿が持参金と檳榔子の盆を花嫁の両親に提出する所で式を打切り、直に花婿花嫁を一緒にすることも屢々行はれる。又女の方が、社会的地位が男に比較して遙かに低い場合には、何等式を行はずして結婚を完了することが多い。親の許諾を得ず、男女が駈落する場合には、結婚式を挙げないこと勿論である。駈落結婚といふことは、暹羅人の間に於ては有り勝ちの事柄であつて、従て其の間に生れた子供は正式の結婚に依て生れた子供と同じく法律上正出である。

佛教の教へは、一夫多妻を積極的に禁止してゐない。従て、男子は經濟的に支持しきへ得れば、如何に多くの婦人をも娶ることが出来ることになつてゐる。唯最初の妻のみが、一定の儀式の下に結婚し、彼女は自らの子供に對しては勿論、後で出来た多くの妾に對しても統制權を持つてゐる。屢々本妻も妾も同一の家屋内に住居してゐる。第一夫人が、年既に老ひ、夫の満足を買ふ力なきに至るとき、彼女は、夫が女を求め、内を外にして徨ひ歩くのを防止せんがため、或は家族の數を増加し、其れに對して權力を揮ひ、家庭に於ける自己の位置を高めんがために、政策的に第二、第三の夫人を夫に薦めることがある。第一夫人を離婚せんとする場合は、夫人の同意を得、同時に財産を分與しきへすれば宜い。斯く離婚するのは何でもないが、離婚する者は世間の信用を失墜するから、成

るべく離婚しないことになつてゐる。第二夫人以下は、夫の都合に依て、何時でも離婚出来る。然し總ての子供が遺産の分配に關與する。唯、第一夫人の子供が多くの遺産を受取るだけである。家庭内に這入つて第二夫人、第三夫人として勤めをするといふことに何の不思議もなく、本人も其れを汚辱だとは思つてはゐない。貴族富裕者は、多くの妻を持ち、従て大なる家族を抱へてゐるけれども、下等社會は、經費の關係上、餘り一夫多妻主義を實行しない。

(6) 死 人間の靈が、過去未來を通じ、連續的に存在するものであり、其れに對し、天國地獄など

いふものは、暫有的存在を有するものに過ぎないといふ、佛教に依て得た堅い信仰は、暹羅人をして死を恐れざるに至らしめた。それで、彼の死を眼前に見て、歎き悲める一族が、死に行かんとする彼の心を淨土の至福といふことに向けんがために、繰返して彼の耳に叫ぶ Phru Aralang (Phru Aralang) (基督教に於て主よ〜といふに對す)といふ語は、假令彼に向つて死が眼前に逼つてゐることを暗示するにせよ、彼が想像を寧ろ將來に於ける再生といふことに轉じ、現在肉體が瓦解しつゝあるといふことを恐怖せしめざるに至るのである。此の如くにして、彼は、全生涯を通じて彼の行路を安穩にして呉れた彼の哲學に依て、今はの際に於ても能く慰められ、死の苦痛を忘れ得る。息を引取つてから、死者の體は、水にて洗はれ、白布に包まれ、極樂淨土の門に於て通門料を拂ひ得るために口に硬貨を啣へさせられ、棺中に納められる。此の式を取行ふ間、佛僧侶は經

文を合唱し、生き残つた者一同に對し、諸行の無常なること、人生の迷妄なること、悲痛多きことを説く。別に樂隊の備へがあつて、惡靈を驅逐せんがために音樂を奏する。棺側に居竝ぶ者が思ひ出したやうに時々泣く。或場合には泣手を外から備入れることがある。棺は黒色に塗り、銀紙金箔を以て飾つてあるが、手数が濟めば棺架に乗せ屋内に於ける最も重なる部屋中に安置せられ、近親者に依て一日一夜、若くは二日二夜其處に於て見守られる。其の間、時々音樂を奏し、死者の幽靈を怒らしめざるために經文を口ずさむ。棺側に見張りをしてゐる時は、遺族に取つては、言はずアット・ホームの時期で、弔慰に来る知人に一々挨拶し、茶菓の饗應をなす。見張りが終れば、棺は寺院に運搬せられ、其處で直ちに火葬に附せらるゝが、身分相當の火葬資金が集めらるゝまで、其處に預けて置かれる。時として、暹羅人は、屍體をば數箇月間自らの屋内に安置することがある。棺を屋外に運び出す時には、幽靈が再び自己の家に舞ひ戻り得ざるやう、方角が分らぬやう、幽靈をして混亂せしむるやうな手段を取る。棺はいつもの出入口からではなく、特に其のために設けられた孔から屋外に運ばれ、棺擔夫は寺院に向ふ前に、家の廻りを數回回轉する。而して、愈々火葬に附する際にも、棺架の周圍を三回廻す。斯の如くするときには、死者の幽靈は、自らの家に歸る道を見付け得ず、在世中に積んだ功德の高に應じ、直接或は天國に行き、或は地獄に落ち、或は天國地獄以外の所にて、再生するのである。自らの死後、可及的に大仕掛なる火葬をして貰ひたいといふの

は、總て暹羅人の希望する所で、此の希望は、多くの場合、彼の死を悲める遺族に依て或程度まで達成せられる。盤谷市では、四、五月が火葬期であつて、其の時期には、前一年に死んだ人々の葬式が一時に行はれ、是れがために巨額の金が消費せられる。死んだお歴々の近親者は、火葬の場所に出來得る限り多くの知人を案内し、屍體を取出し、周到なる注意を以て按配されたる儀式に依て棺屋に安置する。棺屋の大小、高低、美觀等は一に遺族の富力身分の相違に依て異なる。宴會、音樂、芝居が、二日間に亘り、特に其のために設けられた假小屋に於て行はれ、二日目に棺屋に點火する。點火の際遺族並びに其の知人が、小蠟燭、香料入りの可燃物を以て火事を助ける。料金なしの抽籤が其の際に行はれ、籤に當つた者には、景品が與へられ、蝟集し來る貧乏人には金がばら蒔かれる。夜分には、煙火が打揚げられる。總て此等のことが行はれる間、僧侶の一隊が經文を誦し、聖歌を歌ふ。名家の葬式の際には、成るべく多くの僧侶を招請し、出來るだけ彼等に饗應するといふのが一門の名譽だと信せられてゐる。兎に角、遺族は出來得る限りの金を使ふ。其れで、大仕掛の篝火、煙火で死者の靈を慰めるために、彼の遺族が使用する金額の大なるがために、遺族は財産の全部を蕩盡する場合がないとも限らない。皇族中の死者に對する火葬は、最も大なる社會的の出來事であつて、二、三年毎に一回行はれる。皇室火葬の際には、皇族中の死者は勿論、前回の皇室火葬以後に死去し、國王が特に皇室火葬の禮を以て葬ることを好む者をも此の儀に附する。此等の人々の屍

體は、壯麗眼を奪ふやうな棺屋に於て次々に火葬に附せられる。皇室火葬は、暹羅に於ては一種の社會的祭禮で、或場合には、一箇月に互つて行はるゝことがある。其の間、無数の人々が、皇室の費用で食事を供せられ、種々種々な娛樂を與へられる。死んだ皇族又は貴族の屍體は、寢棺に入れられな
い。金製の殼中にある葬のため運び出さるゝまで、死者の有せる各種の徽章、所持品、記念のために贈られた花冠に取繞かれて止め置かれる。葬式の最後の段通りたる、屍體を行列を作つて火葬場に持運ぶこと、棺屋の



圖三十三第 靈柩安置せらるる光景

大型の銅製甕中に安坐せるが如き形に於て納められ、死者の家屋中、最も重なる部屋の中に於て、文飾を施せる臺の上に安置せられ、參觀に供せられる。其處に屍體は火

中に其れを安置すること、燃料に點火し、屍體を焼くこと、骨を拾ふことは、何れも別々の日に於て行はれる。此等總ての式に於て、國王は最も重要な役割を勤める。即ち、國王は、王立寺院の一より取寄せた聖火を以て、王自ら棺架に點火する。宮中の重立者は、一つの儀式に一同揃つて参加する。遺骨は、皆金甕に納められ、永く保存せられ、定期に取出され、敬虔の意を表する目的物とせられる。一般世俗の遺骨も、火葬後拾ひ集められ、小形の甕中に丁寧に保存せられる。大方の暹羅人の



圖四十三第 葬列

家庭には、此等の甕が一二備へ付けられてゐるのを見る。虎列拉其の他急病にて斃れた者の屍體は、一應土中に埋められ、後日發掘燒棄せられる。以前には乞食、犯罪人の屍體を、公共火葬場に曝し、兀鷹、野犬に食はせるといふ習慣があつて盤谷を見物する外人は、盤谷名物の一として見物したのであるが、最近此の習慣は廢止され、屍體は總て火葬に附せらるゝことになつ

た。公共火葬場は盤谷市城壁の外にあり、壁上の罅隙から其處に出入することが出来る、其の罅隙を人は呼んでプラトウ・ヨ(Pra-tu Phiu 幽霊の門の意)と言つてゐる。

(ロ) ラオ族

ラオ族は、タイ族たる暹羅人と其の外見、習慣に於て甚だ似て居り、爲めに、政府其の他の統計書中には、暹羅人の中に入れてある。今日、今後鐵道の便は益々増加し、風俗習慣を異にする諸々の地方が互ひに連絡せらるゝ一方、タイ人たる暹羅人の文化的勢力が一般に普及するに連れ、タイ人ラオ人は、遂に全く同一の部族に分れてゐる。此等二つの部族を見分ける標準は、腰から股に掛けて、劊青がしてあるか否か



第三十五圖 故皇太后の屋

種族になるであらうと考へられる。兩種族混合の趨勢は、ラオ人が其の附近の住民に依て、ラオ人と呼ばれることを以て一種の侮辱なりと考へ、屢屢タイ族たる暹羅人と同一種類中に編入せらるゝことを主張する傾向に依て、益々促進せらるゝことと思ふ。

ラオ族は、二つの大なる部族に分れてゐる。此等二つの部族を見分ける標準は、腰から股に掛けて、劊青がしてあるか否か

にある。劊青を施してゐるラオ人は、ラオ・ブン・ダム(Lao Pung Dam 腹の黒いラオ人の意)といひ其の住居は北部暹羅の全部に亙り、下はナコン・サワン州に達し、アユタイア、ナコン・チャイ・スリー(Nakon Chai Sri)地方にも、此處彼處に部落を爲して生活してゐる。劊青を施さざるラオ人は、ラオ・ブン・カオ(Lao Pung Kao 腹の白いラオ人)と呼ばれ、東部暹羅の大部分をなすメーコーン河の中流地方及び其の支流地方に住し、ピットサヌローク州に於ては、一の廣き带状地に生活し、ナコン・サワン州、ラーヂブリー州の山麓の丘には、部落をなして此處彼處に散在する。ラオ・ブン・ダム族の劊青は、普通有りふれたる動物、神話の怪物よりなり、足首の少し上、否、多くの場合に於て膝から腰にまで達してゐる。各動物は、幅廣い神祕的文字にて圍まれ、斯の如くにしても尙ほ餘りある場所は、空想的石造花形模様で填められてゐる。腰の模様の端の部分には、呪の文字が書き連ねられてゐる。劊青を施すには、非常なる手数を必要とし、同時に多大の苦痛を忍ばねばならぬ。然し緬甸人と同じく、ラオ人も、劊青は壯年のラオ人に無くてはならぬ裝飾であると考へられてゐる。文身を施せるラオ人を遠眼に見ると、身にくひ付いてゐる衣服でも著てゐるかの如くである。劊青の材料として用ひらるゝは、椰子油を燃したあとに出來た残滓を基として造つた炭素である。體軀の上部に掘り込んである不思議なる方形配數(Magic Squares)其の他の護符には、朱砂を材料として用ふることもある。

上述せるラオの二部族は、其の昔、西部支那に住居せるラオ・タイ種族から出てゐる。右の中メーコーン河のラオ族は、北部暹羅に於ける彼等の同胞よりは、遙かに長く現在の場所に立籠つてゐる。北部暹羅のラオ族は、緬甸のシャン族と人種上の連絡を有し、現今吾等の見る暹羅人は、主として此の部族から出てゐるのである。

昔ラオ人の國は、多くの小藩に分れてゐた。而して此等は、何れも皆或時は柬埔寨、或時は緬甸、或時は暹羅の政令を奉じてゐたが、各々小さな藩主に依て支配され、此等藩主又は會長の館は後印度地方に於ける王族の宮殿を縮小せるが如きものであつた。「縮小」なる文字を用ひたが、これはどの藩の場合に於ても妥當だといふのではなく、或藩主、例へばメーコーン河に於けるウキエン・チャン、メピン河に於けるチェン・マイの如き、近傍に蟠居せる諸々の國王とは比較になる程ではないが、尙ほ堂々たる王國の觀を呈してゐた。然し、現今に於ては、昔暹羅にあつたラオ藩の獨立は、全然無いものである。例へばウキエン・チャンの最後の藩主は、百年前盤谷に於て捕虜として死んだ。其の後メーコーン河の向岸並びにメーコーン河の兩岸に跨つて存在するルーアン・ブラバンは、其の後佛人の手中に歸し、政治的に見て、現に暹羅に住するラオ・ブン・カオ（腹の白いラオ族）は、全く暹羅人と同化してしまつてゐる。北方の、ラオ・ブン・ダム人藩の重なるもの、即ちチェン・マイ、ナン、プレー(Pre)、ラコン・ラムバン(Lakon Lampan)の會長は、今日尙

は會長といふ名前を保持してゐるが、何等政治的特權を有せず、各藩に於て任命組織せられてゐる會議(Council)といひ、重なる官吏を以て組織すの議長として、名目上の權力を保持するに過ぎない。此處にいふ「カウンシル」は、有力なる部下を以て、附近に本據を構へ居る暹羅總監の指揮監督を受けてゐる。

暹羅人と、ラオ人とは、互ひに酷似してゐる。ラオ人の方が、暹羅人より幾分どつしり出来、且つ膚色が少し白いといふことの外は、兩者を唯外觀の點から區別することは困難である。然し話をさせて見ると、ラオ人と暹羅人とは直ちに區別出来る。成程、ラオ人の語は、大體に於て、現在暹羅人の用ひてゐる語と同一である。然し、發音法、クメル語から出た語がないこと、暹羅語には既に使はない語を現に使用してゐることの諸點に於て暹羅語と異なつてゐる。服裝の點も、暹羅、ラオ殆んど同一である。唯、暹羅人が近來殆んど棄てた、頭の天邊に、房々した髪を残し、後ろと横とを剃り落すといふ習慣が、ラオ人の間に保存されてゐる。ラーヂブリーの西に當る山麓には、其の地方で、ラオ・ソン・ダム(Lao Song Dam 黒服を着けたラオ人の意)として知られてゐる部落がある。此等はラオ・ブン・カオ族から出たもので、服裝は大部分ラオ・ブン・カオと同一である。然し、男子は、體にくい、ついたやうな、短かい黒股引と、銀製のボタンある黒上衣と、黒の麥稈帽子とを著けてゐる。又女は幅廣の線の這入つた、膝まで達する黒のスカート、黒のスカーフ（胸や胴に巻

く、黒の頭布を纏うてゐる。特別の場合には、ラオ・ソン・ダム人は、
された長い上衣を著る。彼等は百五十年前に東方から
現在の場所に這入り込んだと言つてゐる。

ラオの本國といふべき北部ラオの婦人は、腰から足首に達する有線のスカート胸から一方の肩に掛けるスカーフ、時としては身に、いついた、ジャケットを身に著ける。然し、彼等は、往々にして胸部から上は、裸體でゐることがある。彼等は髪を長く伸し、殆んど頭



第 六 十 三 圖 第 三 十 六 號 人 婦 の ム ダ ・ ソ ン ・ オ ラ

男女共重に赤で綺麗に刺繍の頂上に戴き、普通其れに花を挿してゐる。彼等は、暹羅人よりはふくよかに、且つ容貌も勝つてゐる。而して、服装の點に於ても優つてゐるせいか、暹羅婦人よりは見て氣持良く、何處までも女らしい。
北部ラオの劔青を施せるラオ種は、暹羅人の長所を澤山に短所を唯僅か持つてゐる。即ち、彼等も暹羅人と同じく、慇懃で、愛想よく上長を敬ひ、其の命に従ふ

けれども、南の暹羅人よりは正直で、靜肅で、落著いてゐる。加之、暹羅人よりは概して勤勉で、本當の意味に於て宗教的である。此等の言説は東方の劔青を施さざるラオ人には適用せられない。此等東方ラオ人の道徳は、北部の人間の其れの如くに高くない。

緬甸の婦人が、全く獨立自由であると同じく、ラオ族の婦人も、不羈獨立である。一體、ラオに對する緬甸のといふべきである。ラオ語とシャン語との相異は、要するに方言の上に於て見らるゝに過ぎな



第 七 十 三 圖 第 三 十 七 號 北 部 ラ オ 族 の 概 況

甸の影響は、ラオ人の風俗、習慣、建築様式、宗教的儀禮の上に於て多々認められる。是れはラオの小藩が、アツア(アツミ)、ペグの王(緬甸の)に依て、昔征服せられ、其の土地を占領せられてゐたからである。ラオの文字は、シャン人の其れに酷似し、クメルから出たと言はんよりは昔のモン族から出たも

い。其れで、暹羅の北境に面せる緬甸のケン・トウと稱するシャン人地方に使用せられる言語は、ラオ語が、いつの間にかシャン語になつたといふ底のものでどの地點に於てラオ語がシャン語に代つたといふことを明瞭に指示し得ない程である。然るに、ラオ語と暹羅語との相異は遙かに明瞭である。即ち、暹羅語には、クメル語の影響が明瞭で其れがため、東埔寨語が澤山に暹羅語に這入り、發音も



第三十八圖 東部暹羅のオラ婦人

非常に違つて來てゐる。

ラオ人が、どこから彼等の宗教を取入れたかに就ては、學者間に定説がない。一時は紀元五世紀に、錫蘭の傳道隊が、南方から後印度に這入り込み、其の結果、佛教がラオ族に依て受入れられたと考へてゐた。然し、ラオ族が五世紀より遙か以前既に佛教に歸依してゐた事實、ラオ・タイ

族は、彼等の佛教をば北部佛教の形式で、北部印度から最初に取入れたといふことが、最近明かになつたこと、彼等が後印度に侵入した時には既に其の佛教を持つてゐたこと、其れで多分錫蘭から輸入された佛教に接すると共に、錫蘭佛教の教義の彼等に有利なる點を取入れ、多くの古いものを捨てたらしいといふことで、右の考は維持出來なくなつた。

北方のラオ人は、何れも



第三十九圖 北部暹羅のラオ族

皆佛教信者である。而して、彼等の佛教は、暹羅人のよりは、遙か多分に活物崇拜に依て彩られてゐる。暹羅・ラオ兩部族に共通で、昔各地に行はれた蛇族崇拜（Snake）、精靈崇拜の痕跡は、暹羅人の間に於てよりは、ラオ人の間に於て一層明白に認められる家、山、野に出入する小さな神々、多少

有效なる假面の下にラオ族の精神界に跋扈せる婆羅門の諸神に就ても、暹羅人よりは、遙かに多く護考へてゐる。彼等は又、暹羅人よりは、遙かに多く護符呪符を信用する。此の點は僧侶の付込む所で、彼等は、佛教僧侶であり乍ら、魔術、醫師、豫言者、護符賣として、地方的に大なる勢力を有し、佛教並びに政府の施行せんとする善良なる政治の妨害になつてゐる。

藝術の點に於て、ラオ族は可成り進歩してゐる。例



第十四圖 北部暹羅に於ける村落市場

小型のものから、十四本、若くは其れ以上の蘆を連ねてゐる大型の、誠に朗かな音色と、大なる音量を有するものまである。此等の大型ケンには、勿論職業的音樂師の用ふるものである。ケンは、久しき以前から南部に這入り、暹羅人に依て殊の外珍重せられた。諸藝に巧みなる暹羅の一親王は歐洲の音樂をケンに仕組み一大成功を博した。蘇格蘭の悲しげな歌曲近代的舞蹈に伴奏する約調曲は、特に此の不思議なる樂器に能くはまるやうである。

(ハ) シャン族

暹羅に住する少數のシャン人を、暹羅人はンギアウ(Ngiao)と呼び、時としてタイ・ヤイ(Thai-Yai)大なるタイ人)といふ。此等少數のシャン人は、緬甸のシャン・スレーツから暹羅の北方に這入つて來たものである。別に盤谷には、一般的商品を取扱商人として、既に久しき以前より少數のシャン人が入込んでゐる。チャンタブーンには、附近に寶石の鑛山が発見せられたため、少數のシャン人が入込み、該地に於ける鑛業は、一時全く彼等の手中にあつた。

緬甸に於けると同じく、二、三十人で隊を組んだシャン人の行商が、暹羅に於ても、汽車の停車場や、田舎道で屢々邂逅せられる。此等は、マウルメイン(Maui-main)とか蘭貢のバザーで、安物を仕入れて賣り歩いてゐるので、緬甸への歸路には、コーラートの絹布、チャンタブーンの寶石を仕入れて歸るのである。

一九〇一年、北部暹羅に居住するシャン人が、暹羅の統治に對し不満を抱き、遂に反旗を翻し、

突如ブレーの町を攻撃して、同地に於ける憲兵屯所を陥れ、知事並びに其の幕僚を殺戮した。シャンの叛兵は、數に於て極めて少數であつたが、勢に乗じてラコン・ラムバーンを攻め、一時無人の境に居るが如き觀を呈した。遂に中央政府の出兵となり、彼等を山寨に驅逐することに依て、漸くにして事なきを得た。右は一小事件に過ぎなかつたが、政治上重大なる結果を生み出した。即ち、此の事件は、暹羅の地方行政の不行届なること、ラオ諸邦に對し中央政府の壓力が足りないこと、暹羅の地方に於ける軍事的組織が不完全なることを遺憾なく暴露した。此等三種の事實は過去二十年間、同方面に於ける政治行政上の改革の動因をなしたと言つて差支へない。

(ニ) リュー族

リュー族は、甚だラオに似てゐる。暹羅の北方に彼等が這入つたのは、比較的最近で、多分、彼等の根據地であつたシブソン・パンナ (Sibsong Panna) に、各種の暴動があつた結果其處から退轉したものであらう。彼等は、暹羅の境内に於ては、北部暹羅のナン郡 (Nan District) に居を擴め、緬甸に於ては、シャン諸邦中の一なるケン・トゥンに多數棲息してゐるのである。彼等は、前述の如くラオに似てゐるが、強ひて兩者の相異を求むれば、リュー族はラオ族よりは身長が稍々大で、骨格が幾分逞しく出來てゐる點にあるであらう。以前の暹羅人、又は現在のラオ族と同じく、暹羅のリュー人は、頭の後と横とを剃り、上に房々した毛を残してゐる。彼等は佛教信者である。彼等の根

據地たるナム・ンガウ谷 (Nam Ngau) には、多くの僧院がある。ラオ人よりも寧ろ一層甚だしく、彼等は佛教と精靈及び鬼神崇拜とを混交してゐる。而して、此の事に關しては、此等の場合に於て普通に見る如く、佛教の僧侶から積極的に獎勵を受けてゐるやうな次第である。リュー族の男子はラオ族の男子と同じく、何れも足首から腰部まで割青を施してゐるが、非常にぶた／＼したズボンと、赤いフランネルの小片を以て刺繡し、珠數に似た種子、又時としては眞珠貝製のボタンの列を以て飾つた黒青い綿布の、二重ボタン上衣を著てゐる。彼等は頭をば、大なる白又は赤の頭帕布で覆ひ、其の上に三つの異なる縁になつて下つてゐる、大きなシャン人麥稈帽子を被つてゐる。彼等は、ダーと稱する長劍、短劍、或場合には火打石銃、煙管煙草、檳榔子其の他種々のものを入れ刺繡を施せる肩囊糧囊) を持歩く。彼等が一體の様子を見てゐると、どうもンギアウ人 (シャン人) を思ひ出さずにはゐられない。リュー族の婦人は、概して眉目秀麗で、時として美人と思はれる者も其の中に包含されてゐるが、頭髪を長く伸し、頭の頂上にはそれを束ねてゐる。彼等は、ラオ婦人と同じく、ベティコートと稱するも可なるスカートを穿ち、上には長い袖口と、縁に澤山の刺繡を施し、胸上で十字形に折り曲げた、チャケットを纏うてゐる。ラオ婦人は、男子の氣を引くためか或はだらしなきためか、彼等の魅力點 (乳房を指せるものか——譯者) を餘り密に隠すことを避ける傾向を持つてゐるが、そんな傾向はリュー婦人にはない。リュー種族は、シャン人と同じく、男女

共、耳朶に孔を穿つ習慣を持つてゐる。而して、其の孔は、直径約二吋の巻紙、木栓、其の他の物を挿入することが出来る程擴大され、従て、耳朶も著しく下に伸びてゐる場合もある。富裕なるリユー人は、黄金の薄板をシリンドラー型に捲いて作つた栓を耳朶に嵌めてゐる。而して、此等栓の目方が時として、一つで四オンスあるといふに至つては驚かざるを得ない。

(ホ) サム・サム族

サム・サム族といふのは、南部暹羅の西海岸地方に住する混血的暹羅人の社會をいふのである。多くの點に於て、彼等は馬來人に似てゐる。似て居ると言はんよりは、事實上同一だと言つた方(回々教を信じない點を除けば)が適當な位である。本世紀の始め、アンナンデール(Annandale)、スキート兩氏が、彼等の住地を探險し、其の真相を明かにする迄は、彼等は殆んど外部に知られてゐなかつた。彼等は、獨立の團體としては、問題にならない程小さく、一度馬來人に汲收され、又再び暹羅人中に汲收同化されやうとしてゐる。

第七節 所屬不明の部

(イ) カリエン族

暹羅には、其の西及び南西山脈に、約三萬人のカリエン族が住んでゐるが、此等は、前既に説明した通り、緬甸のカリエン族(カレン族)がこぼれて來たものである。カリエン族は緬甸に於ては全人口の十五分の一を占めてゐる。カリエン族中に於ける諸支族、彼等の容貌、外觀、衣服、習慣、宗教等に就ては、サー・チョーヂ・スコット其の他緬甸に就て著述せる諸家が、既に詳しく説明してゐるから、此處に又此等の事柄に就て述ぶることは、蛇足たるの嫌ひがある。

暹羅に在住するカリエンは、主としてブウォー(Pwo)、ブウェー(Bwe)派からなつてゐる。スガウ(Sgaw)派は、事實上暹羅に棲んでゐないと言つても差支へない。カリエンは、家庭郷土を戀しがる民族である。従て、彼等は、彼等の住所たる山嶽地方から、容易に出て歩かない。勿論、暹羅人の町又は、彼等の住居せる部落の附近にある暹羅人村落のバザーには、斷えず出入してゐる。彼等は、其の部落の附近にある勾配急なる山側に、陸稻を作つてゐる。自家用の衣服は、自ら耕作した綿を以て織つた綿布を以て仕立てる。彼等の他の要求は、彼等が發作的に採掘する錫、狩獵に依て得る鹿角といふが如き雜品を、暹羅人の市場に行つて他の物と交換することに依て充足される。カリエンの

男子は、瘦せ型で、一見貧弱に見えるが、筋骨は殊の外逞ましい。彼等は、徹頭徹尾森林の人である。而して、大獸猛獸の獵師追跡者としては、後印度に於て彼等の右に出づる者ない。彼等は、綿布製の極めて短かいスカートと、ぶた／＼したデヤケット、或は多くの場合に於て長寛衣を身に纏うてゐる。ブウエー族は、頭髮を申し丸めて頭布の中に入れてゐるが其の末端が中から飛出してゐる有様は、恰も前額に角でも生やしてゐるかの如くである。ブウエー族は、頭髮を短かく刈つてゐる。彼等はダー



圖一十四第 女の族種ネリカるけにおに方地トウサ・メ

彼等は、徹頭徹尾森林の人であるといふ長劍、槍、鐵砲を有し、此等の武器を携帯せずして外出すること稀れである。

婦人は、麗はしい方である。而してメクロン谷(Mekong)に住する比較的開化せる部落の婦人は、氣持善い顔をしてゐる。メクロンの人間より、遙かに野氣を帯びたブウオー、ブウエーの婦人に就ても、同様のことが言はれ得る。唯ブウオー、ブウエーの婦人は、身體の

みならず、身の廻りが甚だしく不潔である。カリエン婦人の主なる衣服は、長寛衣である。此の著物は、仕立方極めて簡單で、一枚の布の兩端を縫ひ付け、真中に首を通すだけの孔を明けることに依て出来るのである。時として、カリエンの婦人は、これ一枚のみ著てゐる。時としては此の長寛衣を短かくして、別に是れと一部相重なるやうに、下に或は足首、或は膝にまで達するスカートを



圖二十四第 女の族種ネリカるけにおに方地トウサ・メ

付けて飾りとしてゐるのであるが、カリエンの婦人は大抵是れを手足に巻いてゐる。彼等の著物は、眞珠に似た種子の刺繡で飾られてゐる。彼等は又同じ種子を糸に通して作つた紐を首又は腰

部に巻いてゐる。銀製の鉢、又は環で耳を飾り、結婚後は、著色せる布片を頭に覆ふ習慣を持つてを食ひ、米を原料とし

開化せるカリエン族の中

少數の者は佛教を信仰してゐるが、此等を除く以外の暹羅にゐる彼等の仲間は、單純なる精靈崇拜者である。緬甸にゐるカリエンの大部分を基督教に改宗せしめた宣教師等も、暹羅のカリエンには手を出し得ないでゐる。彼等が精靈崇拜の骨子は、精靈を宥慰するために犠牲を捧げ、是れ結婚の約束をして貰ふ。夫婦の協約に依て離婚することが出来る。姦通した婦人は、耳朵を切斷



第四十三圖 ノーワークイノ谷にけつる文化せるカリエン人

て造つた酒を飲んで騒ぐといふことに存する。彼等は山地耕作の名人で、森林中に於ける開拓地から、相當數量の米と玉蜀黍とを收穫する。彼等の家屋はバラック式の長屋で竹を以て造り、草を以て葺いてある。子供は生後間もなく、耳朵に孔を穿ち、六歳未満にし

されるから、有夫の女が姦通すること稀である。死人があれば、鐵砲を一齊に發射し、ゴング(Gong)を亂打して、是れを村民に通知する。葬式の後には、舞踏、宴會、飲酒を行ふ。屍體は、棺に入れて埋められる。而して、棺内には、平素故人が親しんだ武器、道具のやうなものが納められてゐる。墓の上には、假小屋を設け、食物と、故人が在世中好んで用ひた諸道具を備へ付けて置く。葬式上に於ける各種の習慣、其の他多くの點に於て、カリエン族と、緬甸の北部及び北東部に住するカチン人との間には、非常なる類似の點がある。此の事實は、カリエン族の出處由來を明かにする上に於て、將來參考になるかも知れない。殺された鳥の骨を検査して占をするといふことは、カリエンの間に相當行はれてゐる。彼等は、鳥骨に現はれてゐる靈の示しを、占に依て明かにしなければ、縁組もせず、家も建てず、旅にも出ず、穀物も植付けず、其の他如何なる重要なことをもしない。然し、此の如き占は、専門の易者に依て爲されるので、占ひの根據、易の原理が奈邊にあるかは薩張り明かでない。

鐵の製鍊、金屬の細工は、カリエンに知られてゐない技術ではない。彼等は、日常使用する刀類、犁頸、鋤、其の他の道具を自ら製造する。眞鍮の鑄物で、蛙の呼鐘(Frog Gongs)として、冷く極東諸國に知れ渡つてゐるゴング——極東諸國の王が最も珍重したゴング——はカリエン族と聯想せられる。何となれば、此のゴングは、最初カリエンの故郷から出て、彼等の取行ふ總ての儀式に於て

索引

附録 地名及人名索引

- A
- Aka (Akha) (アカ)(カウ族を見よ)
- Andaman Islands (アンダマン諸島) 61, 80
- Ang Tong (アン・トーン) 52
- Annandale (アンナンテール氏) 168
- Annamese (安南人)(ユアン族を見よ)
- Assam, C. (中部アッサム) 63
- Assam (アッサム) 60,70
- Ava (アヴァ) 161
- Ayuthia (アユティア)州,14,157, 市,26, 27,47—49,71,89,136
- B
- Ban (バン) 35
- Bandon (バンドン)港,7,32, 灣,32, 河,(メナム・コン・カ河を見よ)
- Bangkok (盤谷市) 36—44
- Ban Mai (バン・マイ村) 4,5
- Ban Pakong (バン・パコン河) 10,29,31
- Ban Sam Kôk (バン・サム・コーク) 25, 26
- Ban Takwai (バン・タクワイ) 26
- Bassac (バサック縣) 5
- Battambang (バッタムボン縣) 5
- Bhamo (バーモ) 102
- Blagden (ブラッグデン氏) 80,174
- Border R. (ボーダー山脈) 100
- Bowring, Sir John (ボウリング氏) 55
- Bugis (ブギス人) 67
- Bwé (ブウェー族) 169,170,171

- C
- Cape Liant (リアント岬) 6
- Cha Cherg Sa (チャ・チェルン・サオ町) (ベトゥリッを見よ)
- Chainat (チャイナート) 25
- Chaiya (チャイヤ) 32,54,80
- Cha'ang (チャラン島)(チャンク・セイロン島を見よ)
- Chantabun (チャンタブーン)州,6,14,21, 29,57,99,110, 町,5,49—50,89,165, 河, 50
- Chantaburi (チャンタブリー州)(チャンタブーン州を見よ)
- Chao (チャオ) 45
- Cho Nam (チャオ・ナム族) 73,84—89
- Chawang Hills (チャワソン山) 32
- Chieng Dao (チエン・ダオ) 20
- Chieng Kawng (チエン・カウ縣) 104, 120,123
- Chieng Khong (チエン・コン町) 33
- Chieng Mai (チエン・マイ)(バーヤップを見よ)
- Chieng Rai (チエン・ライ町) 35
- Chieng Sen (チエン・セン)縣,123, 郡, 120, 町,3
- Chinbok Tribes (チンボク部族) 114
- Chong (チョン族) 67,74,110—111
- Chumporn (チャムボン町) 7,56
- Chum Seng (チャム・セン) 24

- D
- Damneun Sandak (ダムネウン・サンダク) 31
- De La Loubère (ドゥ・ラルーベール氏) 128

暹羅研究 第一卷 (終り)

第二章 人種 第七節 所屬不明の部族

使用されたからである。然し、此處にいふゴングは、實は、緬甸に於けるカリエン人の中に住んでゐるシャンが作つたもので、ゴングと言はんよりは、寧ろ太鼓のやうな格好に出来て居り、始め別の鑄物として出来たものが、後で鎔接せられたものである。此のゴングは、今日でも、後印度に於ける各種の民、及び支那人に依て貴重品とせられてゐる。

(ロ) サカイ族

馬來半島に於ける英、暹の國境に關し、協約が新に成立した結果、サカイ族は暹羅の種族でなくなりかけた程少なくなつた。今日サカイ族の暹羅に住する者は、百人足らずであつて、此等は到底文明人の接近すること出来ないバタニー州の部分に棲んでゐる。サカイ族に就ては、スキート、ブラッグデン兩氏が其の大著「馬來半島の異教徒諸種族」中に、頗る詳細に論じてゐるから、完全なる知識を此の種族に就て得んことを希ふの士は、右の著に依られんことを望む。

Korat Plateau (コーラート高原) 21, 33, 60
 Kra (クラ) 3, 15
 Krabin (クラビン) 29, 山, 21
 Kratt (クラット縣) 5
 Krung (クルン) 35
 Krung Kao. (クルン・カオ市) (アユティア市を見よ)
 Krung Tep (クルン・テプ州) 14
 Kukan (クカン) 96
 Kuwi (クウィ) 10, 15
 Kwaa Noi (クワー・ノイ河) 30
 Kwaa Yai (クワー・ヤイ河) 30
 Kwi (クウィ族) (カウ族を見よ)

L

Lahu (ラフ族) (ラフナ族, ムーソー族の別名) 69, 74, 114—119, 164
 Lahu Hsi (ラフ・シ) (カウ族を見よ)
 Lahuna (ラフナ族) (ラフ族を見よ)
 Lakon (ラコン) (ナコン・スリー・タムマラート町を見よ)
 Lakon Lampang (ラコン・ラムバン) 158, 166
 Lamet (ラメト族) 104
 Lanten Yao (ランテン・ヤオ族) 125, 127
 Lao (ラオ族) 2, 3, 10, 11, 65, 69, 70, 71, 72, 74, 77, 100, 104, 105, 106, 119, 148, 156—165, 166, 167
 Lao Pung Dam (ラオ・ブン・ダム族) 157
 Lao Pung Khao (ラオ・ブン・カオ族) 157, 159
 Lao Sông Dam (ラオ・ソン・ダム族) 159, 160
 Lao State (ラオ族國) 3, 65, 166
 Lao Tai Family (ラオ・タイ族) 69, 70, 71, 72, 73, 74, 101, 128—168
 Lawa (ラワー族) 67, 68, 74, 77, 100—104, 106

Ligore (リゴア) (ナコン・スリー・タムマラートを見よ)
 Lishaw (リショウ族) 69, 74, 122—123
 Logan (ローガン氏) 85
 Lopburi (ロプブリー町) 26, 54, 水道 27
 Lower Burma (南部緬甸) 3, 97,
 Lü (リュ族) 71, 75, 77, 166—168
 Luang Phrabang (Luang Prabang) (ルーアンプラバーン) 3, 5, 104, 165, 120, 158

M

Ma Carthy (マッカーシー氏) 112
 Macadok (マカドック山) 22
 Maharat (マハラート州) 11, 23
 Makassars (マカッサ人) 67
 Malay (馬來族) 2, 10, 19, 53, 67, 71, 73, 77, 78, 82, 83, 84, 87, 88, 89, 94, 97, 126
 Malupre (マルプレ縣) 5
 Maulmain (マウルメイン) 165
 Me Nam Kông Ka (メ・ナム・コン・カ河) 31
 Meao (meo) (メアオ又はメオ族) 69, 74, 111—114, 121, 123
 Mekong (メコン河) 3, 5, 10, 11, 14, 19, 20, 23, 32, 33, 34, 51, 63, 65, 68, 69, 71, 104, 105, 112, 157, 158
 Meklong (メクロン) 河 30, 31, 谷, 170
 Menam (メナム河) 23, 24, 25
 Menam Chao Phaya (メナム・チャオ・プヤ河) 9, 10, 11, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 31, 36, 44, 47, 96
 Menam Noi (メナム・ノイ河) 25
 Meping (メピン河) 4, 23, 24, 44, 158
 Mergui Archipelago (マーギ群島) 84
 Meyom (メイヨム河) 23, 24
 Mewan (メワン河) 23, 24
 Mon (モン族) (タライン族の別名) 2, 63, 67, 69, 72, 74, 77, 96—99, 139
 Mon Annam Family (モン・アナム族)

Doi-Intanon (ドイ・インタノン山) 20
 Dong Phaya Fai (ドン・ピヤ・ファイ山) 21
 Dravidians (ドゥラヴィダ族) 1, 64, 65, 73
 Dusit Park (ドゥシット公園) 41, 42
 Dvarapuri (ドゥヴァラプリー) (ドゥヴァラヴァティを見よ)
 Dvaravati (Dvaravatti) (ドゥヴァラヴァティ) 47, 48
 Dyaks (ダイア族) 67

F

Forbes (フォーブス氏) 63, 72
 Further India (後印度) 1, 60, 64, 68, 69, 101, 118, 119, 136, 158, 162, 163, 170, 171

G

Garison (ギャリソン氏) 63
 Garnier (ガニエール氏) 63
 Gaul (ゴール) 2
 Grierson, Sir G. (グリーアソン氏) 120

H

Haung Daya, (ハウン・ダヤ河) 4
 Hor Muang (ホアムアン) (ムアンを見よ)

I

Irrawaddy, (イラワッティ河) 63, 68

J

Jakun (ジャクン族) 73, 84, 85, 87
 Johore (ジョホア) 85
 Junk Ceylon (ジャンク・セイロン島) (ジャラン島の別名) 8, 46

K

Ka (カ族) 80, 105
 Kabit (カビト族) 68, 104
 Kaché (カチエ族) 67, 68, 74, 77, 104—110
 Kachin (カチン族) 102, 173
 Kachin Country (カチン地方) 122
 Kahok (カホク族) 68, 104
 Kamburi (カムブリー町) 31
 Kamet (カメト族) 68, 104
 Kampengpet (カムペンペット町) 54
 Kamuk (カムク族) 68, 104
 Kao Chemao (カオ・チェマオ山) 21
 Kao Kmoek (カオ・クモック山) 21
 Kao Luang (カオ・ルーアン山) 23
 Kao Luong (カオ・ルオン山) 23
 Kao Prong (カオ・プロン山) 23
 Kao Phra Wan (カオ・プラワン山) 22
 Kao Sidao (カオ・サイダオ山) 21
 Karen (Karen) (カリエン族又はカレン族) 30, 72, 73, 75, 77, 169—174
 Kaw (カウ族) 69, 74, 120—122
 Kawi (カウ族) 74, 120
 Kedah (ケダー州) 17
 Keng Tung (ケン・トゥン) 3, 162, 166
 Khmer (クメル族) 67, 69, 71, 72, 74, 77, 94—96, 101, 139, 159, 161, 162
 Koh Chang (コー・チャン島) 9
 Koh Kong (コー・コン島) 9
 Koh Kut (コー・クット島) 9
 Koh Pangan (コー・パンガン島) 9
 Koh Samui (コー・サムイ島) 9
 Kol (コール族) 64
 Korat (コーラート) (ナコン・ラーヂャシマーの別名) 州, 15, 4, 95, 町, 50—51, 165

Phrapatum (アラバタム町)(ナコン・パトム町を見よ)
Pitsanulok (ピットサヌローク)州,11,157, 町,52
Pnom Dan Rek (プノム・ダン・レク山) 5,21,29,95,96
Prachim (プラーチム)州,14,29,94, 縣,5, 町,29
Pré (プレー) 158,166
Puket (プケット)州,19, 町,46,47,77, 島 84
Pwo (プウォー族) 169,170
Pygmies (ピグミー族) 80

R

Raheng (ラヘン町) 22,24,30,52
Raja (ラーザア) 53
Rajaburi (ラーヂャブリー)(ラーヂャブリーを見よ)
Rajburi (ラーヂャブリー)(ラーヂャブリーの別名)州,14,97,157 町,31,52,159
Ramarat (ラマラート村) 34
Roi Et (ロイ・エット州) 15
Rumai (ルマイ族)(パラウン族を見よ)

S

Sai Cheng (サイ・チェン河) 29
Sai Yai (サイ・ヤイ河) 29
Sakais (サカイ族) 62,73,75,80,174,
Salwin (サルウネン河) 4,10,11,23,71, 104
Sam Peng (サム・ペン) 43
Sam Sao (サム・サオ山) 21
Samsama (サムサム族) 19,71,75,168
Samudt Sōngkram (サムット・ソーンクラム町) 31
Saraburi (サラブリー町) 27,52
Sawankalok (サワンカローク町) 54

Scott, Sir George (スコット氏) 118,120, 169
Semangs (セマン族)(ネグリット族を見よ)
Sgaw (スガウ族) 169
Shaher al Nawi (シャハー・アル・ナウイ) 48
Shahr i Nao (シャール・イ・ナオ)(同上)
Shan (シャン族) 2,50,71,74,100,101,158, 161,165—166
Shan States (シャン・ステーツ) 65,70, 165, 佛領,3, 英領,3 北部,63
Si Chang (シー・チャン島) 9
Siamese (暹羅人)(タイ族を見よ)
Sibsong Chutai (シブソン・チュタイ) 69
Sibsong Panna (シブソン・パンナー) 69, 166
Siemrap (シームラップ縣) 5
Singgora (シンゴラ)(ソングラーを見よ)
Sisophon (シソボン縣) 5
Skeat (スキート氏) 80,85,168,174
Smyth, H. W. (スミス氏) 120
Somdet Phra Putayot Fa (ラマー世陛下) 38
Songkla (ソングラー町) 7,16,17,34,52,53, 80
Sukhothai (スコータイ町) 54
Supan (スパン河) 25
Supanburi (スパンブリー町) 54
Surao (スラオ) 91
Surat (スラート州) 17
Sutep (ステプ山) 21

T

Tabar (タバー) 16
Tachin (タチン河)(スパン河を見よ)
Tagalas (タガラ族) 67

62,63,64,65,66,67,72,74,75,83,84
Mongkut (King Rama IV) (ラマ四世) 99
Muang (ムアン) 35
Muang Fang (ムアン・ファン) 115,116, 120
Muang Kratt (ムアン・クラット) 10
Muang Kuwi (ムアン・クウィ) 22
Muang Nan (ムアン・ナン) 102, 104
Muang Sin (ムアン・シン) 69
Muang Sing (ムアン・シン) 3
Muh-sō (ムソー族)(ラフー族を見よ)
Muller, Max (ミュラー氏) 63

N

Nakon (ナコン) 35
Nakon Chaisi (ナコン・チャイシー州) 14,97,159
Nakon Chai Sri (ナコン・チャイ・スリー州)(同上)
Nakon Nayok (ナコン・ナーヨク山) 21
Nakon Patom (ナコン・パトム) 町,52, 河,29
Nakon Raja Sima (ナコン・ラーヂャ・シマ町)(コーラート町を見よ)
Nakon Sawan (ナコン・サワン) 州,11, 14,22,157, 町,54
Nakon Sri Tammarat (ナコン・スリー・タムマラート) 州,17,32, 町,15,16,23, 52
Nam Ing (ナム・イン河) 34,35
Nam Kōh (ナム・コー河) 24
Nam Mun (ナム・ムーン河) 5,10,32, 33
Nam Ngau (ナム・ンガウ谷) 167
Nam Si (ナム・シー河) 10,33
Nam Kun (ナム・クン河) 34

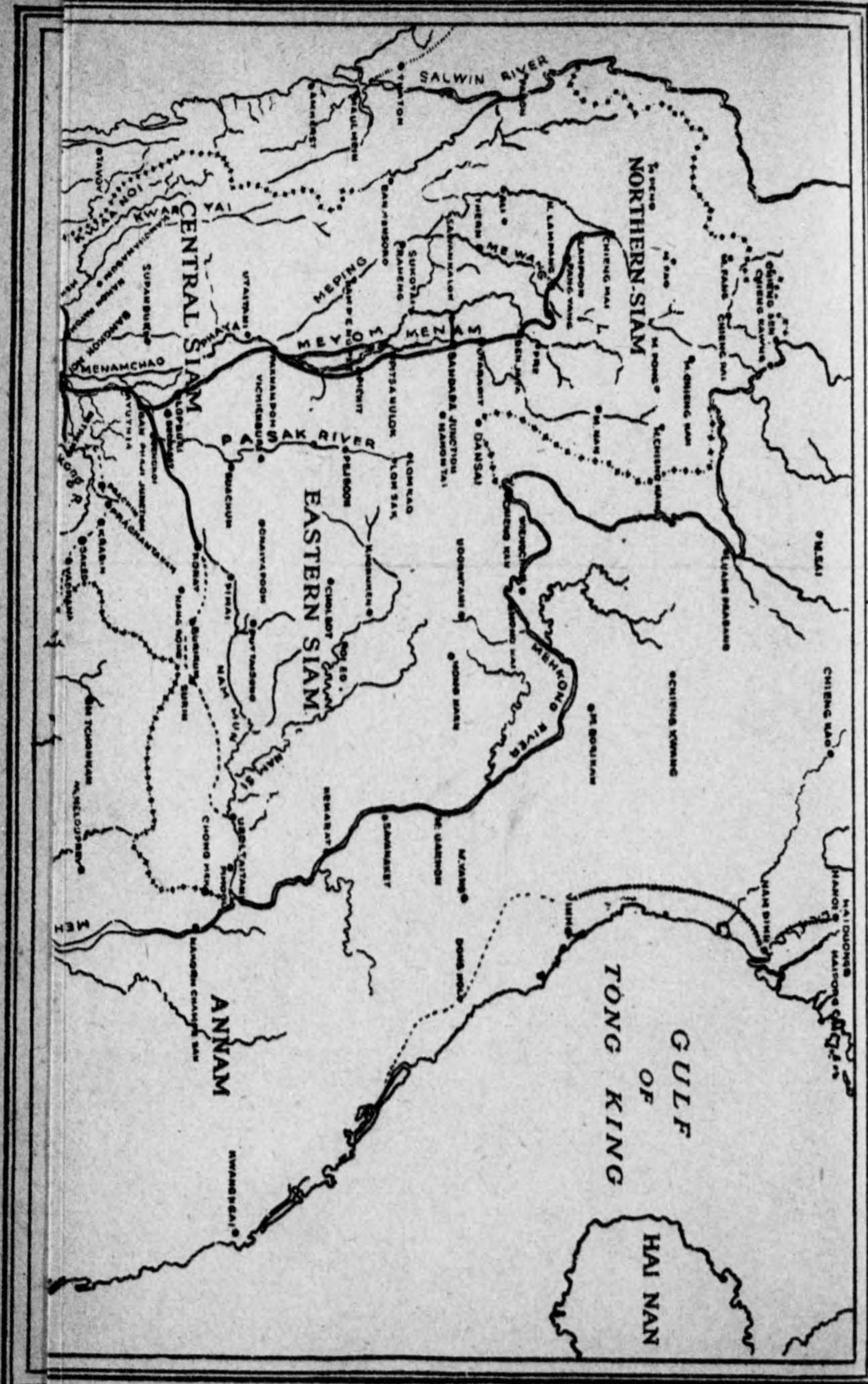
Nan (ナン)縣,106,113,123,158, 郡,166
Nawng Han (ナワン・ハン湖) 34
Nawng kai (ナワン・カイ町) 33
Negrito (ネグリット族)(セマン族の別名) 19,62,66,73,80—84,86,106,110
Ngiou (ンギョウ族)(シヤン族を見よ)
Non Sarnao (ノン・サルナオ) 48
Nong Sano (ノン・サノ)(同上)

O

Orang Laut (ラウト人) 1,84

P

Pachaw (パチャウ山) 21
Pahsi Charoen (パーシ・チャローエン) 31
Pai (パイ族) 104
Paknampoh (パークナムホー町) 24,25, 28,52
Palaung (パラウン族)(ルマイ族の別名) 104
Pallegoix Bi-hop (パルゴワ監督) 75,78
Panom Pok (パンナム・ホク山) 20
Pasak (パスアク河) 27
Patalung (パタルン町) 16
Patat R. (パタト山脈) 7,21,29
Pattani Division (パタニー區) 34
Pattani (パタニー)州,34,174, 町,17,16,52, 80, 河,34,
Pa Wing (パ・ウキン山) 21
Payap (パーヤップ)(チェン・マイの別名) 州,11,23,120, 町,44—46
Pegu (ペグ) 72,97,161
Perlis (ペーリス) 17
Petchabun (ペチャブーン)州,11 町,27
Petriu (ペトリウ) 29,49,79



- Takbai (タクバイ)(タパールを見よ)
 Talaing (タライン族)(モン族を見よ)
 Tale Sap (タレ・サーブ)湖,20, 内海16
 Tamils (タミル人) 93
 Tanen Taung Gyi R. (タネン・タウン・ギ
 山脈) 10
 Taphan Hin (タパン・ヒン河) 29
 Ta Rua (タ・ルア) 47
 Tavoy (タヴイ河) 4
 Tawng Baing (タウン・バイン)(タウン・
 メンを見よ)
 Tawng Peng (タウン・ペン) 104
 Telingana (テリンガナ) 8,64
 Tenasserim (テナッセリム)州,96, 河,4
 Thai (タイ族) 2,8,10,19,23,49,50,53,67,71,
 74,77,79,80,82,83,84,86,87,90,91,92,93,
 94,95,97,98,100,101,105,106,110,128
 —156,158,159,160,161,163,164,165,16
 6,169
 Thai Yai (タイ・ヤイ族)(ジャン族を見
 よ)
 Thalang (タラン島)(ジャンク・セイロン
 島を見よ)
 Thomson (トムソン氏) 85
 Thong Yin (トウン・イン河) 4
 Tibeto.—Burman (西藏—緬甸人) 65,68,
 69,70,72,74,111—127
 Tin Pan Yao (ティン・パン・ヤオ族)
 124,127
 Tung Kah (トゥン・カー町)(ブケット町
 を見よ)

U

- Ubon (ウボン)州,15,94,95, 町,51
 Udorn (ウドーン州) 15
 Ujong Salang (ウジョン・サラン島)(ジ
 ャンク・セイロン島を見よ)
 Utai Tani (ウタイ・ターニー町) 35

V

- Veddas (ベッタ族) 73
 Victoria Point (ヴィクトリヤ岬) 3,16

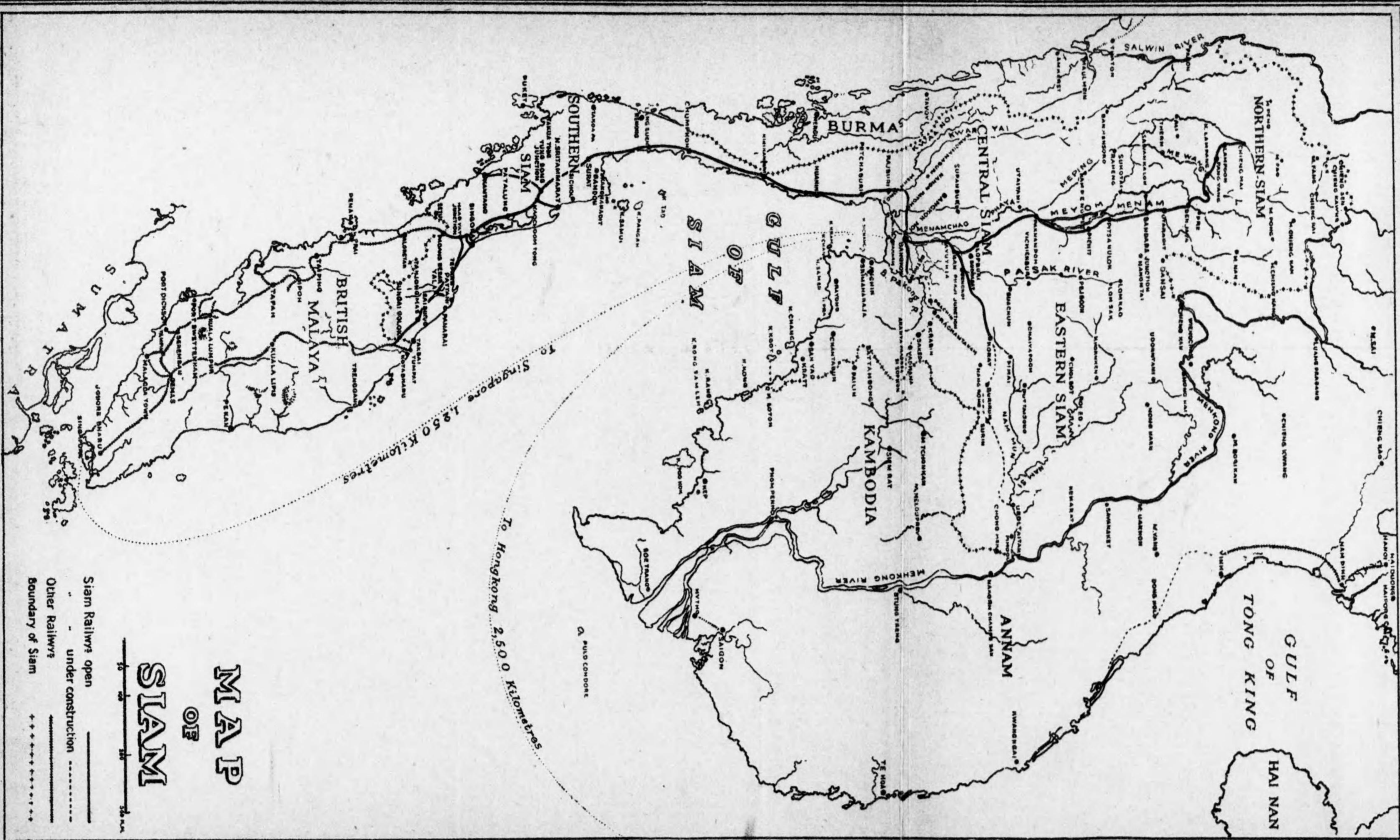
W

- Wa (ワ族) 104
 Wallace A. R. (ウォレス氏) 67
 Wattana (ワッタナー) 29
 Wieng (ウヰエン) 35
 Wieng Chan (ウヰエン・チャン町) 65,
 69,158

Y

- Yao (ヤオ族) 69,74,123—127
 Yao yin (ヤオ・イン)(ヤオ族を見よ)
 Yuan (ユアン族)(安南人の別名) 2,67,74,
 99—100

附録 地名及人名索引



MAP OF SIAM



- Siam Railways open —————
- under construction - - - - -
- Other Railways (with cross-ticks)
- Boundary of Siam ++++ (with cross-ticks)



終

